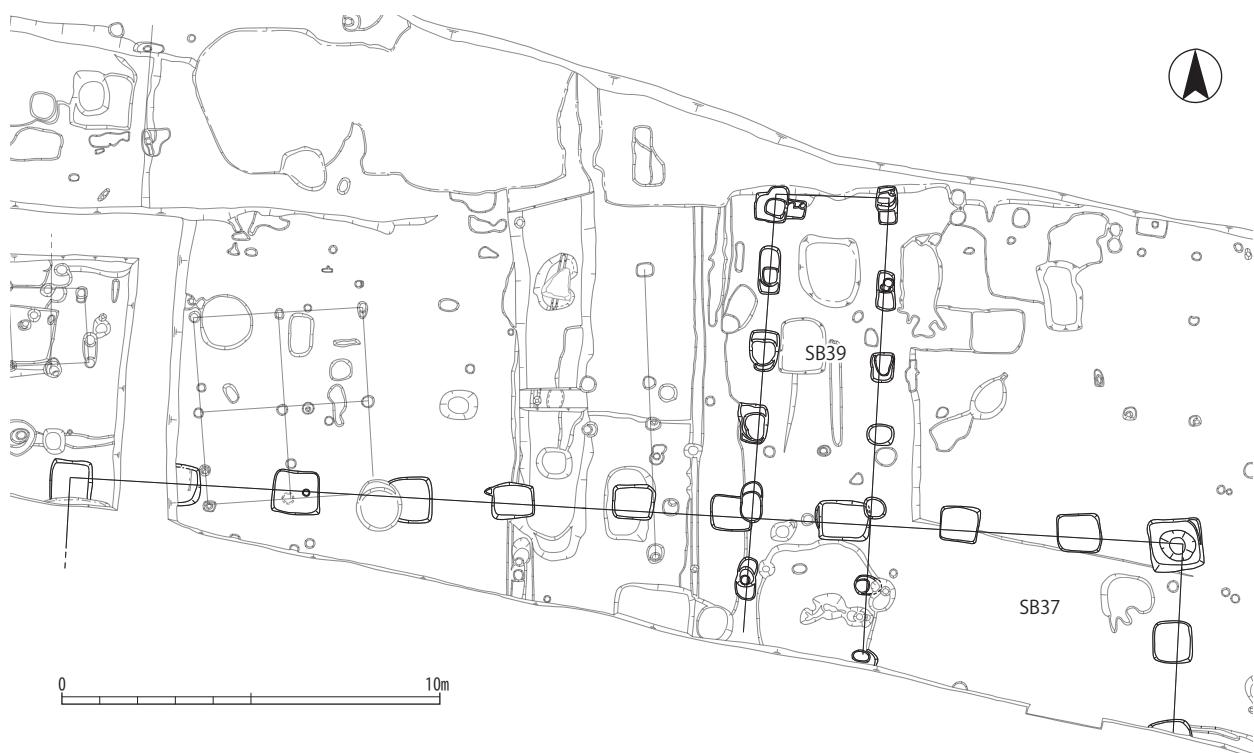


薦生遺跡（第1・2次）発掘調査報告

～名張市薦生～



SB37 (桁行 10間)・SB39 (桁行 6間)

2025（令和7）年3月

三重県埋蔵文化財センター



S B 37 検出状況（人の位置がピット、北東から）



S B 37-P1（南から）



S B 37-P5・S B 39-P12検出状況（南から）



S B 38-P1柱抜取穴検出状況（北から）



S B 38-P2礎盤石（北西から）



S B 39 検出状況（人の位置がピット、北東から）



同（南西から）

例　言

- 1 本書は、一般県道上笠間八幡名張線道路改良事業に伴う薦生遺跡（第1・2次）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、三重県名張市薦生字崎切に位置する。
- 3 発掘調査は、三重県県土整備部から依頼を受けて実施した。発掘調査および整理作業の経費は、三重県県土整備部から執行委任を受けた。
- 4 調査および整理作業の体制、調査期間、調査面積は以下のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会

[現地調査 令和3年度（第1次）]

調査担当	三重県埋蔵文化財センター　調査研究1課
	櫻井拓馬　佐藤嘉晃
補助委託	橋本技術株式会社三重支店
調査期間	令和3（2021）年4月28日～同9月24日
調査面積	1,200 m ²

[現地調査 令和4年度（第2次）]

調査担当	三重県埋蔵文化財センター　調査研究1課
	原田恵理子　佐藤嘉晃
補助委託	株式会社アート三重支店
調査期間	令和4（2022）年5月31日～同9月30日
調査面積	1,535 m ²

[整理作業 令和4～6年度]

整理担当	三重県埋蔵文化財センター　調査研究1課
	櫻井拓馬　原田恵理子　佐藤嘉晃
保存処理委託	（株）吉田生物研究所
自然科学分析委託	（株）パリノ・サーヴェイ

- 5 本書の編集は櫻井があたり、文責は文末に記した。遺物の写真撮影は櫻井・田中が行った。
- 6 発掘調査および整理作業に際し、下記の諸氏に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい。
小澤毅、山中章、吉川敏子、青柳泰介、諫早直人、丸山真史、古市晃、清水みき、岡田雅彦、薦生自治会（順不同、敬称略）
- 7 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 図版に掲載した絵図の出典は以下のとおりである。
 - ・三重県特定歴史公文書等（絵図・地図等）：三重県環境生活部文化振興課の掲載許可を得た。
「伊賀国名張郡薦生村全図」（C-1100）
 - ・薦生自治会所蔵絵図：薦生自治会館にて撮影
「伊賀国名張郡薦生村地籍図」

凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000 数値地図（「名張」相当（平成20年10月発行）、三重県共有デジタル地図の1:2,500 地形図（平成30年060E914番）を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の使用承認を得た（令和6年4月16日付三総合地第2号）。
- 2 標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。名張市薦生付近の真北は、座標北に対し0度02分西偏する（国土地理院HPによる）。
- 4 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
S B：掘立柱建物 S H：竪穴建物 S K：土坑 S E：井戸 S D：溝 Pit：柱穴・小穴
- 5 土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
- 6 遺物実測図の縮尺は1:4を基本とし、その他の縮尺を適宜用いた。
- 7 註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。
- 8 遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。
- 9 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
 - ・色調は外面のみ、標準土色帖の色名（「黄橙色」など）を記す。マンセル記号の表記は省略した。
 - ・土器の残存率は全周を12分割して示す（例：口縁部3/12）。1/12以下は「口縁部小片」など。
 - ・胎土は、特徴的な事項（特定の鉱物など）のみ備考欄に記した。
 - ・法量は完存ないし復元の値である。土師器皿の底径は記していない。
 - ・出土砥石の粒度は、JIS研磨剤の規格に準拠するサンドペーパーに対比して示す。粒度は#40以下、80（粗目）、120、180（中目）、320、600（細目）、1000、2000以上（極細目）の8段階とした。
- 10 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。
- 11 第2・4・5図は、三重県県土整備部（伊賀建設事務所）から提供された工事図面を用いた。

目 次

卷頭図版

例言・凡例	i · ii
目 次	iii ~ vi

I 前 言	1
-------	---

1. 調査の経緯と経過	1	3. 遺構の保護（現地保存）	5
2. 調査の方法	4		

II 位置と環境	8
----------	---

1. 地形と地質	8	3. 薦生牧をめぐる争論	10
2. 古代名張郡と都祁山道	8	4. 中世以降の薦生	11

III 遺 構	13
---------	----

1. 基本層序	13	3. 遺構	29
2. 各調査区の概要	15	遺構一覧表	47 · 48

IV 遺 物	49
--------	----

1. 出土遺物の概要	49	4. 薦生遺跡表面採集遺物	51
2. 遺構出土遺物	49	遺物観察表	56 ~ 60
3. 表土・包含層・その他	51		

V 自然科学分析	61
----------	----

1. 分析の種類と対象	61	2. 分析結果報告	61
-------------	----	-----------	----

VI 総 括	69
--------	----

1. 遺跡形成過程と古環境	69	4. 中世の薦生遺跡	75
2. 奈良時代の薦生遺跡	69	5. 調査のまとめ	75
3. 平安時代の「薦生牧」	73	6. 今後の課題と展望	76

巻末写真図版

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第24図 S B 51、S A 52	34
第2図 範囲確認調査位置図	2	第25図 S H 101	35
第3図 グリッド割付図	4	第26図 S H 104	37
第4図 道路工事平面図・縦断図	6	第27図 S H 105	38
第5図 道路工事横断図	7	第28図 S K 1・4~9・13・14	39
第6図 遺跡分布図	9	第29図 S K 16・17・20、S E 22、 S K 26・29	40
第7図 土層柱状図	13	第30図 S K 30・31・34・40・42・102	42
第8図 遺跡内の地形断面図	14	第31図 S K 106~111	43
第9図 1区遺構全体図	15	第32図 S D 25・116	45
第10図 1区土層断面図	16	第33図 出土遺物①	50
第11図 2区遺構全体図	17・18	第34図 出土遺物②	52
第12図 2区a・b土層断面図	19	第35図 出土遺物③	53
第13図 2区c土層断面図	20	第36図 出土遺物④	54
第14図 3区a遺構全体図①	21	第37図 遺物採集位置	55
第15図 3区a遺構全体図②	22	第38図 曆年較正結果	63
第16図 3区b遺構全体図	23	第39図 年代測定用試料	64
第17図 3区a北壁土層断面図	24	第40図 植物珪酸体含量	66
第18図 3区a南壁土層断面図	25	第41図 植物珪酸体	67
第19図 3区a・b東壁土層断面図、 3区a下層確認3土層断面図	26	第42図 成分分析対象箇所	68
第20図 S B 37・38	27・28	第43図 遺跡の変遷	70
第21図 S B 39	30	第44図 奈良時代建物の変遷	72
第22図 S B 44・45	32	第45図 S B 37と長舎の事例	74
第23図 S B 48~50	33		

表目次

第1表 範囲確認調査結果一覧	2	第6表 遺物観察表	56~60
第2表 薦生遺跡関連年表	12	第7表 樹種同定結果	62
第3表 奈良時代の斎王群行	12	第8表 放射性炭素年代測定結果	63
第4表 基本層序対照表	13	第9表 植物珪酸体含量	66
第5表 遺構一覧表	47・48	第10表 成分分析結果	68

写真図版一覧

- ・卷頭図版 1 (奈良時代の掘立柱建物)
 - S B 37 検出状況
 - S B 37-P1、S B 37-P5・S B 39-P12 検出状況
 - S B 38-P1 柱抜取穴検出状況、S B 38-P2 磁盤石
- ・卷頭図版 2 (奈良時代の掘立柱建物)
 - S B 39 検出状況
- ・写真図版 1 (空中写真等)
 - 空中写真
 - 遺跡遠景
- ・写真図版 2 (調査地遠景)
 - 調査地遠景
 - 1区・2区全景
- ・写真図版 3 (調査前風景)
 - 1区調査前風景
 - 2区調査前風景
 - 2区・3区調査前風景
- ・写真図版 4 (1区)
 - 1区東半、1区西半
- ・写真図版 5 (2区)
 - 2区a南半、2区a北半
- ・写真図版 6 (2区)
 - 2区b・c全景
 - 2区b・c掘立柱建物周辺
- ・写真図版 7 (2区)
 - 2区b・c全景
- ・写真図版 8 (3区)
 - 3区a全景、3区b全景
- ・写真図版 9 (掘立柱建物)
 - S B 37 検出状況
 - S B 37-P1 土層、S B 37-P2 土層
 - S B 37-P3 土層、S B 37-P4 土層
- ・写真図版 10 (掘立柱建物)
 - S B 37-P5 土層
 - S B 37-P10 柱抜取穴検出状況
 - S B 37-P12 土層、S B 37-P13 土層
 - S B 37-P1 完掘状況、S B 37-P2 完掘状況
- ・写真図版 11 (掘立柱建物)
 - S B 37-P3 完掘状況、S B 37-P4 完掘状況
- ・写真図版 12 (掘立柱建物)
 - S B 37 完掘状況
 - S B 37・39 完掘状況
- ・写真図版 13 (掘立柱建物)
 - S B 39 検出状況、S B 39-P1 土層
 - S B 39-P2 土層、S B 39-P3 土層
 - S B 37-P5・S B 39-P12 検出状況
- ・写真図版 14 (掘立柱建物)
 - S B 39-P4 土層、S B 39-P7 土層
 - S B 39-P8A 土層、S B 39-P8B 土層
 - S B 39-P10 土層、S B 39-P11 土層
 - S B 39-P12 土層、S B 39-P1 完掘状況
- ・写真図版 15 (掘立柱建物)
 - S B 39 完掘状況、S B 39-P8 完掘状況
 - S B 39-P9 完掘状況、S B 39-P10 完掘状況
 - S B 39-P12 完掘状況
- ・写真図版 16 (掘立柱建物)
 - 2区b全景
 - S B 38・44・45 完掘状況
- ・写真図版 17 (掘立柱建物)
 - S B 38-P2 磁盤石、S B 38-P1 土層
 - S B 38-P3 土層
 - S B 38-P1 完掘状況、S B 38-P3 完掘状況
- ・写真図版 18 (掘立柱建物)
 - S B 44・45 検出状況
- ・写真図版 19 (掘立柱建物)
 - S B 44・45 完掘状況
 - S B 44-P4 土層、S B 44-P5 土層
 - S B 44-P6 土層、S B 44-P3 完掘状況

- ・写真図版 20（掘立柱建物）
 - S B 44-P4 完掘状況、S B 44-P5 完掘状況
 - S B 44-P6 完掘状況、S B 45-P3 磁盤石
 - S B 45-P1 土層、S B 45-P2 土層
 - S B 45-P1 磁盤石、S B 45-P2 完掘状況
- ・写真図版 21（掘立柱建物）
 - S B 49・50、S B 48・51
- ・写真図版 22（竪穴建物）
 - S H 101・104・105
 - S H 101
- ・写真図版 23（竪穴建物）
 - S H 104、S H 105
- ・写真図版 24（土坑・井戸）
 - S K 1、S K 4～6・8～10
 - S K 7、S K 16
 - S K 30・31・34 土層
 - S K 13・14 土層、S E 22
 - S K 29 土層
- ・写真図版 25（土坑）
 - S K 26、S K 28
 - S K 40、S K 42
 - S K 17・20
- ・写真図版 26（土坑）
 - S K 106～111
 - S K 106 土層、S K 108 土層
 - S K 109 土層、S K 111 土層
- ・写真図版 27（溝）
 - S D 25、S D 116
- ・写真図版 28（下層確認）
 - 下層確認 1 土層、下層確認 2 土層
- ・写真図版 29（下層確認・その他）
 - 下層確認 3、下層確認 3 土層
 - S B 37-P1 土壤試料採取位置
 - S B 37-P12 土壤試料採取位置
 - S B 38-P1 土壤試料採取位置
 - S B 39-P8B 土壤試料採取位置
 - S K 40 下層 土壤試料採取位置
 - S D 25 下層 土壤試料採取位置
- ・写真図版 30（範囲確認調査）
 - 調査坑 1、調査坑 2
 - 調査坑 4、調査坑 19 土層、調査坑 19
- ・写真図版 31（遺構の保護）
 - 砂による遺構面の保護
 - 砂による遺構の保護
 - 法面籠枠、ポリエチレン製U字溝
 - 道路工事風景
- ・写真図版 32（絵図）
 - 伊賀国名張郡薦生村全図
 - 伊賀国名張郡薦生村地籍図
- ・写真図版 33（出土遺物①）
- ・写真図版 34（出土遺物②）
- ・写真図版 35（出土遺物③）
- ・写真図版 36（出土遺物④）
- ・写真図版 37（出土遺物⑤）
- ・写真図版 38（出土遺物⑥・表面採集遺物）

I 前 言

1. 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

一般県道上笠間八幡名張線は、奈良県宇陀市上笠間・山辺郡山添村と三重県内の国道368号を結ぶ地域の重要な生活道路であるが、道路幅員が狭く、車両のすれ違いが困難であり、また、名張市内の工業団地への通勤ルートであることから、朝夕の通勤時間帯は交通が集中し、安全・安心な車両の走行に支障をきたしていた。このため、特に狭隘な区間の問題を解消するバイパス工事が名張市薦生地内で計画された。

この事業区域内に周知の埋蔵文化財包蔵地である薦生遺跡⁽¹⁾が所在することから、三重県県土整備部(伊賀建設事務所)と、三重県教育委員会事務局(社会教育・文化財保護課、三重県埋蔵文化財センター)の間で保護協議がなされ、工事着手前に発掘調査を

実施することとした(第1図)。

用地買収完了の目処が立った令和2年度に範囲確認調査を実施し、その結果に基づき、令和3・4年度の2カ年で2,735m²の発掘調査を実施した。その後、令和4年度5月に道路用地内の既設構造物撤去に伴い、工事立会を実施している。

(2) 範囲確認調査

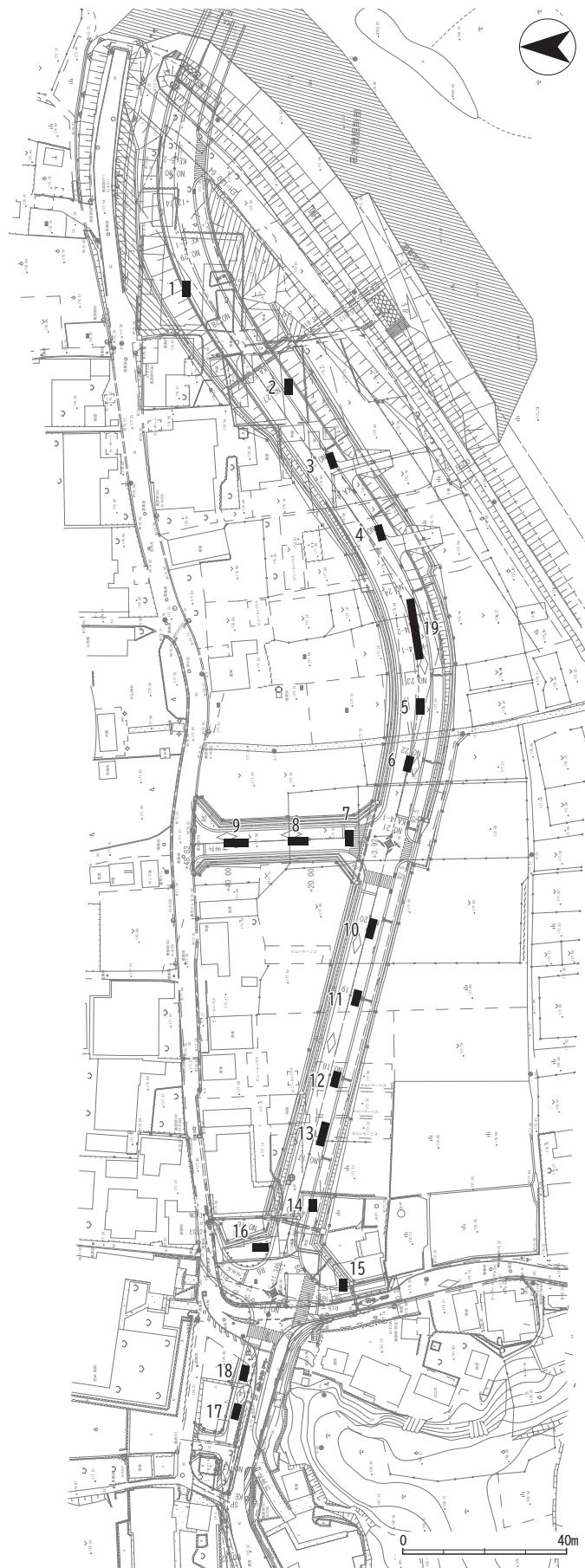
範囲確認調査は令和3年3月3~9日に実施し、道路用地内の18箇所に調査坑を設定した(第2図・第1表)。その結果、道路用地の西側(調査坑10~15)で中世の土坑や溝、北側(調査坑7~9・16~18)で近世の井戸や溝などが確認された。名張川に近い地点(調査坑1~6)は、地表下約30~60cmで基盤層に達したが、遺構・遺物はなかった。調査坑3~6では、現地表下60~90cmで黒ボク土に相当する土壤化層(暗灰黄色系細砂、発掘調査3区a北壁7層に対応)に達したことから、段丘の表



第1図 遺跡位置図(1:5,000、三重県共有デジタル地図1:2,500に加筆)

第1表 範囲確認調査結果一覧

調査坑	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物
1	—	—	なし	なし
2	—	—	なし	なし
3	—	—	なし	なし
4	—	—	なし	なし
5	—	—	なし	なし
6	—	—	なし	なし
7	—	—	なし	なし
8	—	80	なし	土師器皿、陶器
9	—	65	近世土坑	近世陶器
10	—	70	土坑・ピット	土師器 瓦器
11	—	60	ピット・溝	土師器 瓦器
12	—	85	なし	なし
13	—	60	ピット 土坑・溝	土師器 瓦器・陶器
14	—	40	ピット・土坑	土師器 瓦器・陶器
15	—	40	ピット 土坑・溝	土師器 瓦器・陶器
16	—	110	近世井戸	なし
17	—	110	近世溝	近世陶器
18	—	70~90	なし	近世陶器
19	—	—	なし	なし



第2図 範囲確認調査位置図 (1:1,600)

層は縄文時代以降の洪水堆積に覆われており、名張川により近い遺跡南東側は、特に洪水の影響を受けやすかったと推測される。また、調査坑1・2では、地表下30～60cm以深は現代遺物を含む砂礫層であり、造成により地形が大きく改変されていた（写真図版30）。

その後、第2次調査後の令和5年5月31日に、未買収であった地点（調査坑19）の範囲確認調査を実施した。第2次発掘調査の状況から、遺構密度の低い場所でも堀や柵などの遺構が存在する可能性があったため、延長15mの長いトレンチを設定したが、遺構・遺物はみられなかった。

古代・中世の遺構は、第2次調査地より東側には存在しないと判断される。

（3）調査の経過

第1次調査は令和3（2021）年4月28日に開始し、同9月24日に終了した。

第2次調査は令和4（2022）年5月31日に開始し、同9月30日に終了した。

【調査日誌（抄）】

令和3年（第1次）

5月19日	2区b西側より表土掘削開始
6月8日	2区a遺構検出開始
6月10日	2区表土掘削終了
6月11日	1区表土掘削開始
6月15日	2区b遺構検出開始、掘立柱建物の柱列を確認、1区表土掘削終了
6月18日	S B 38 磁盤石を確認
6月23日	2区c遺構検出開始
6月29日	S B 37 を10間の長舎と推定
7月6日	2区b西半遺構検出
7月12日	名張市立薦原小学校3年生見学 小澤毅氏（三重大学）調査指導
7月16日	2区cの遺構をほぼ完掘
7月21日	2区b全景・遺構写真撮影
7月26日	S B 37・39・44・45写真撮影 諫早直人氏、青柳泰介氏視察
7月27日	S B 39 全景写真撮影、2区全景写真撮影、山中章氏、吉市晃氏、清水みき氏、吉川敏子氏視察
7月28日	ドローンによる空中写真撮影

7月31日	現地説明会（参加者220名）
8月4日	丸山真史氏視察
8月6日	2区a全景写真撮影
8月11日	S B 37・39・44のPit 断ち割り開始
8月17日	伊賀建設事務所と遺構保護について協議開始
8月23日	2区a下層確認
8月27日	1区遺構掘削完了、全景写真撮影 S B 37～39 埋土分析試料採取
8月30日	S B 37・38・39・44・45掘削
9月1日	S B 37完掘
9月2日	ピットの埋土洗浄（ふるいがけ）
9月8日	2区c下層確認
9月14日	遺構養生用の砂入れ、埋め戻し
9月21日	現場引き渡し

令和4年（第2次）

6月15日	3区a西側より表土掘削開始
6月29日	遺構検出開始
7月10日	3区a表土掘削終了
7月26日	3区a全景写真撮影
8月1日	3区a下層確認
8月6日	現地説明会（参加者140名）
8月17日	3区b表土掘削開始
8月26日	3区b全景写真撮影

（4）文化財保護法にかかる諸手続

- 発掘調査に伴う法規上の手続きは以下のとおり。
- ①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項
(土木工事等のための発掘に関する通知)
・令和3年2月4日付 賀建第603号
(県教育委員会教育長あて三重県知事通知)
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等発掘通知書」
- ②文化財保護法第99条第1項
(発掘調査の着手報告)
・第1次：令和3年5月24日付 教理第44号
・第2次：令和4年6月1日付 教理第59号
(県教育長あて県埋蔵文化財センター所長報告)
「埋蔵文化財発掘調査の報告について」
- ③文化財保護法第100条第2項

(文化財の発見・認定通知)

・第1次：

令和3年10月6日付 教委第12-4408号

・第2次：

令和4年11月26日付 教委第12-4410号

(名張警察署長あて三重県教育委員会教育長通知)

「埋蔵文化財の発見について(通知)」

2. 調査の方法

(1) 調査区の設定

調査区は1次調査の2箇所を1・2区、2次調査を3区と呼称し、調査区内はa～cの枝番で示す(第3図)。

平面直角座標系は世界測地系を採用した。地区割は座標北に即し、X=-149,340、Y=7,532を原点とした100m四方の大地区(A・B)を設定した。大地区内は南北をA～Y、東西を1～25に25分割した4m四方の小地区を設け、大・小地区とも、北西隅を基点とした地区名(例:A-A10)を付与した。遺物取り上げはこのグリッドを用いている。

(2) 遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機(バックホー)で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。下層確認や一部大型遺構の掘削においては、重機を補助的に用いている。

古代の大型建物の埋土は、炭化した植物遺体など

の微細遺物を回収し古環境分析に供するため、一部洗浄とふるいがけを行ったが、有意な結果は得られなかった。

(3) 記録・図化

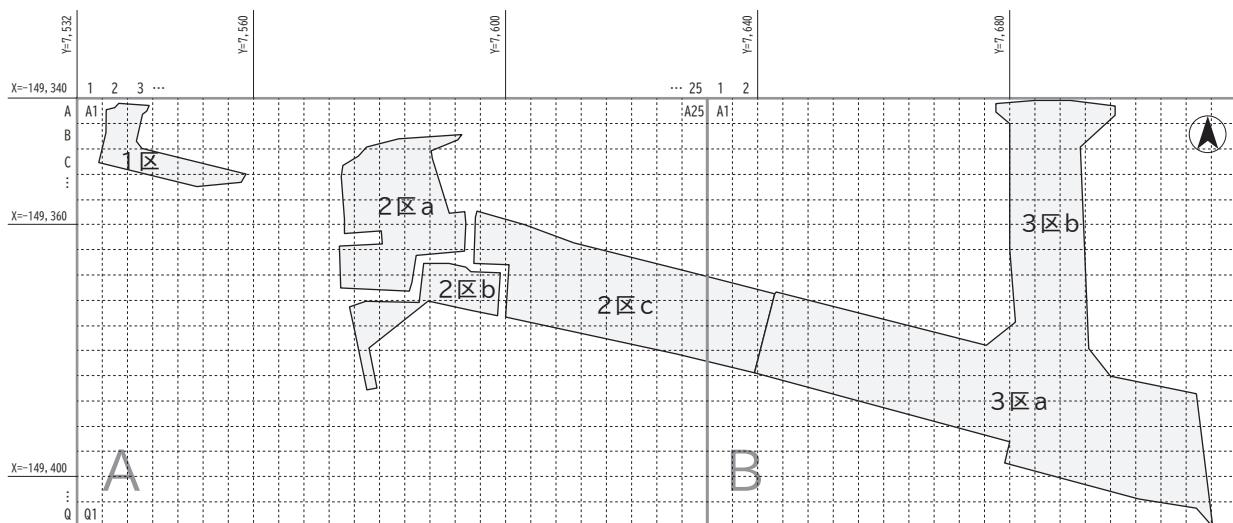
遺構実測は調査員による手測りである。遺構検出段階は小地区単位の1:40略測図(遺構カード)を作成し、これをもとに1:100の遺構配置図を作成した。遺構平面図・土層断面図については原則1:20で作成し、適宜その他の縮尺を適用した。これらの図面や現場作業日誌は当センターで保管している。

遺構番号は次数ごとの通し番号とし、第1次調査は遺構番号001から、2次調査は遺構番号101から付与した。報告書作成にあたり、遺構番号の加除訂正を行ったが、原則として調査時の番号をそのまま用いている。ピットの遺構番号は、当センターの調査標準に従い、小地区ごとの通し番号としているが、掘立柱建物のピットは、別に番号を付した(例:S B 37-P1)。

遺構・遺物写真は、デジタル一眼レフ(ニコンD3300・D800E)で撮影した。ドローンによる空中写真は、伊賀建設事務所から提供を受けた。

(4) 出土遺物の整理

出土遺物は出土年月日と遺構・層位の区別を行い、小地区単位で取りあげている。整理作業終了後は報告書掲載遺物およびその参考資料(A遺物)と未掲載遺物(B遺物)に区分して保存した。金属製品の保存処理は、A遺物のすべてを対象とした。



第3図 グリッド割付図(1:1,200)

3. 遺構の保護（現地保存）

大型建物 SB 37 が桁行 10 間の長舎形式と確定した令和 3 年 8 月から、三重県県土整備部（伊賀建設事務所）と遺構の保護協議を開始した。地形上、路線形の変更が困難であることから、道路の設計内容を変更し、遺構の現地保存を図ることとなった。

一方、遺構の年代や性格に関する情報が不足しており、SB 37 などの大型建物は調査区外に広がっていることから、調査区内の遺構は基本的に完掘することとした。SB 38-P2・SB 45-P1・P3 の礎盤石はそのまま存置している。また、調査区外にあった SB 37-P10 西半は、その後の工事立会時に検出しているが、完掘はしていない。

遺構の保存は SB 37・38・39・44・45 を対象とし、遺構掘方際から約 2 m を保存区とした（第 4 図網掛け部分）。

調査終了後、厚さ 20 cm の細砂で建物ピット掘方内と保存区内の遺構面を被覆したのち、掘削表土で丁寧に埋め戻し、県土整備部（伊賀建設事務所）に調査地を引き渡した（写真図版 31）。

道路設計変更の概略は以下のとおりである（第 4・5 図）。設計変更は地元薦生区の理解を得たうえで進められた。

- ・道路高を嵩上げするとともに、遺構面上に保護層（厚さ 20 cm）を設けた。保護層は埋め戻し時の細砂である。工事は極力盛土内に収めるが、一部の集水枠工なども保護層内に収まるようにした。

- ・車道舗装工はジオテキスタイル工法を採用し、路床改良をなくした（ジオテキスタイル工法：路盤と路床の境目に浸透性の特殊繊維不織布を敷設し、路盤の沈下を防ぐ工法）。

- ・集水枠など掘削深度の深い構造物の配置を変更した。変更前は、SB 38 ピットと大型の集水枠、道路を横断する排水溝が干渉していたが、集水枠と排水溝を全体に北側へ移動させた。また、道路側溝の集水枠は、遺構面を掘り込まない深さとしたうえで、ピットに干渉しない位置に設置することとした。

- ・法面はコンクリート法面や L 字型擁壁から籠枠に変更し、設置時の掘削工をなくした。

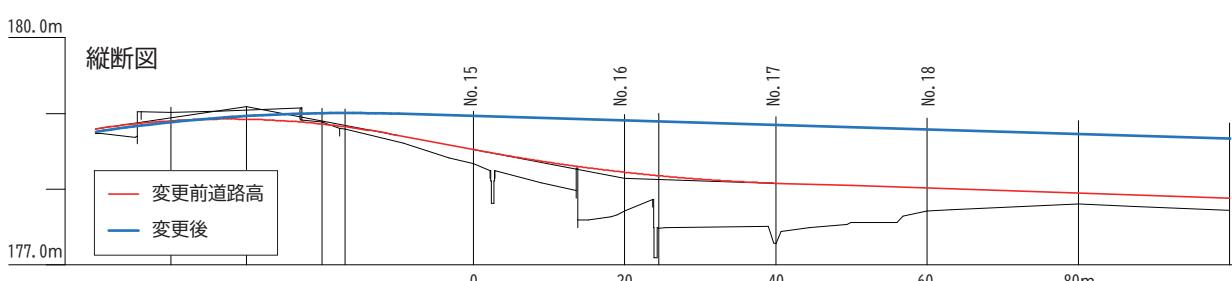
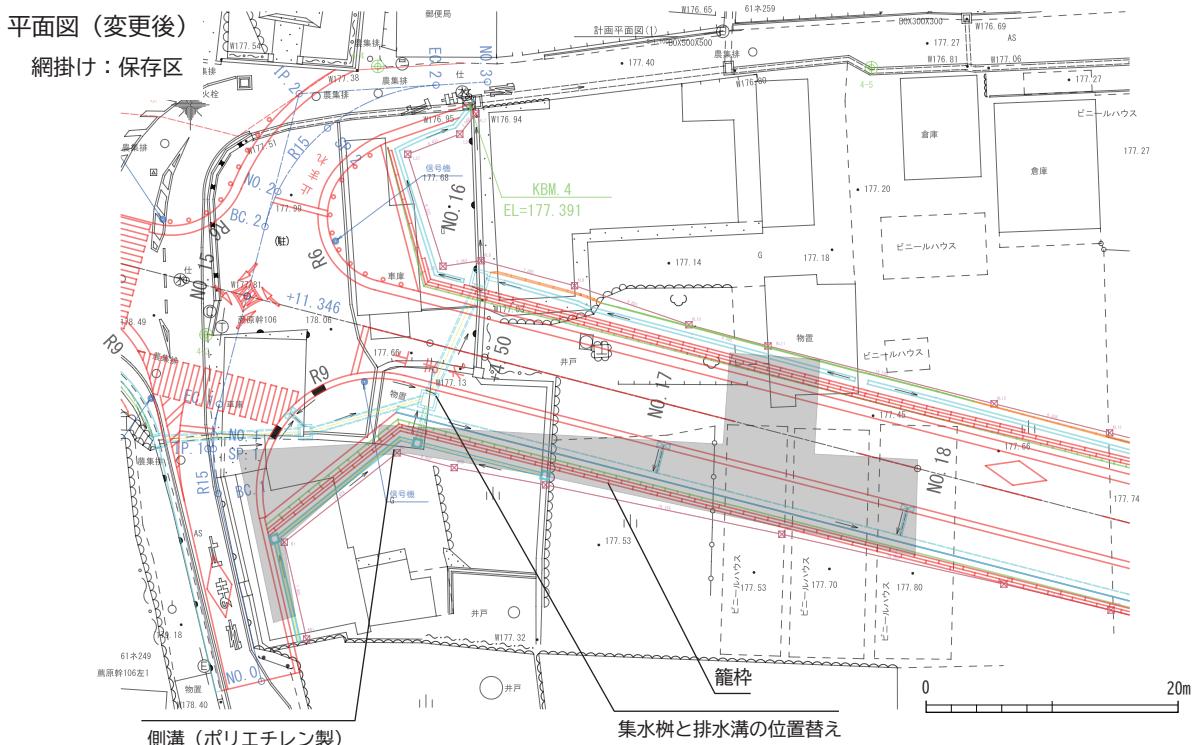
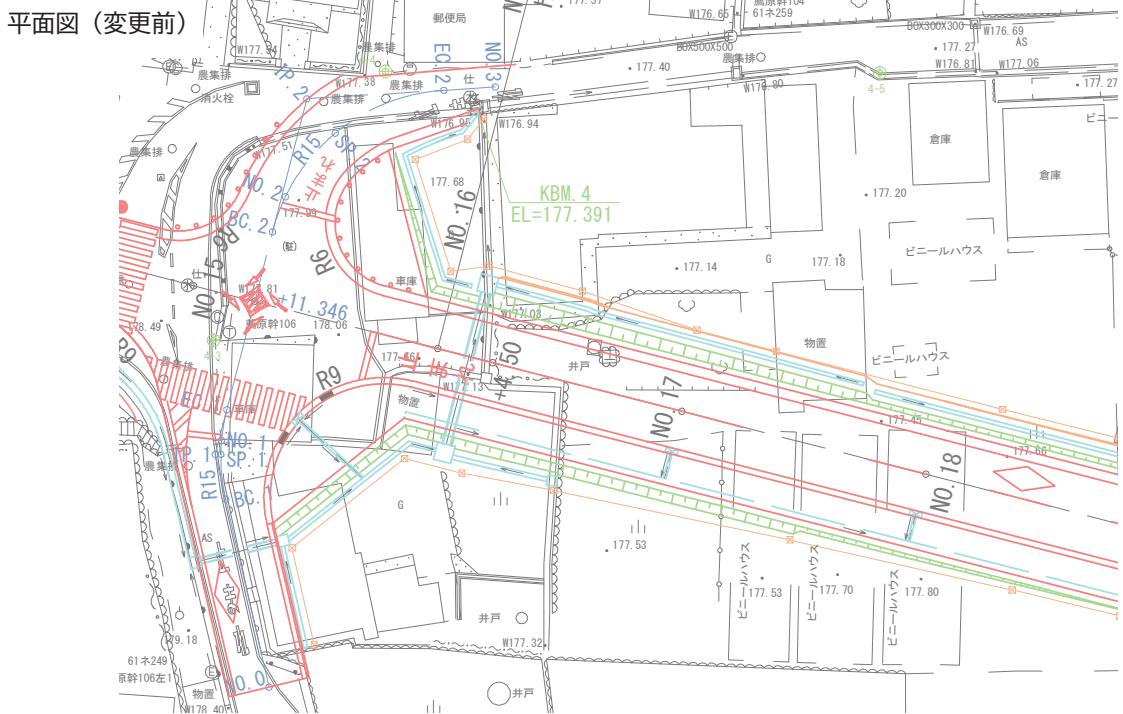
- ・側溝をコンクリート製からポリエチレン製の角型 U 字溝に変更し、掘削深度が盛土・保護層内に収まるようにした。

以上の設計変更の結果、すでに奈良県側の道路下に保存された毛原廃寺と合わせ、奈良・三重県道上笠間八幡名張線の毛原廃寺、薦生遺跡の計 2 遺跡で、遺構の現地保存が図られることとなった。また、薦生遺跡では道路高が全体的に嵩上げされたことで、今後道路沿いで宅地造成などの開発が生じた際にも遺構面までの保護層を確保できる可能性が高まったといえよう。

今回発掘調査を実施したバイパス区間は、令和 5 年 8 月 22 日に供用開始された。 （佐藤・櫻井）

註

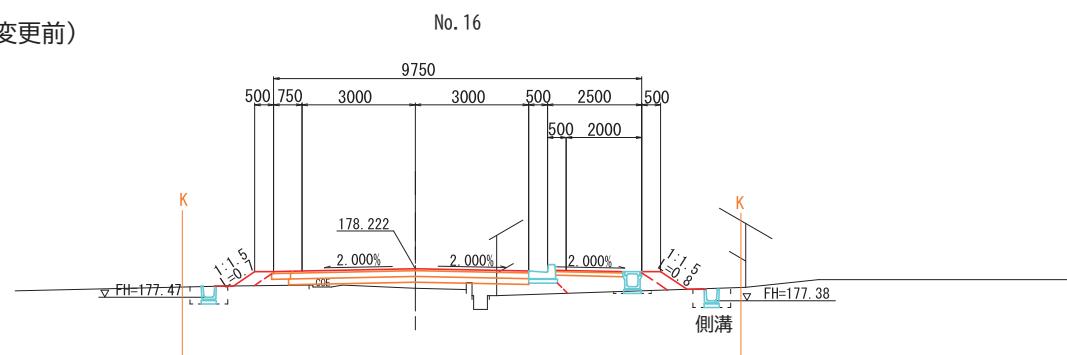
(1) 名張市刊行の『名張市史』考古編（2010 年）では、薦生遺跡の読みを「こも」と表記しているが、現在の行政上は「こもお」であり、また地域史・文献史学・歴史地理学の研究史上も「こもお」「こもお（の）まき」として認知されてきた経緯がある（富森盛一『黒田庄誌』赤目出版会、1968 年 / 平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983 年 / 竹内理三編『角川日本地名大辞典』角川書店、1983 年）。このことから、本書では「こもお」の読みをあてている。



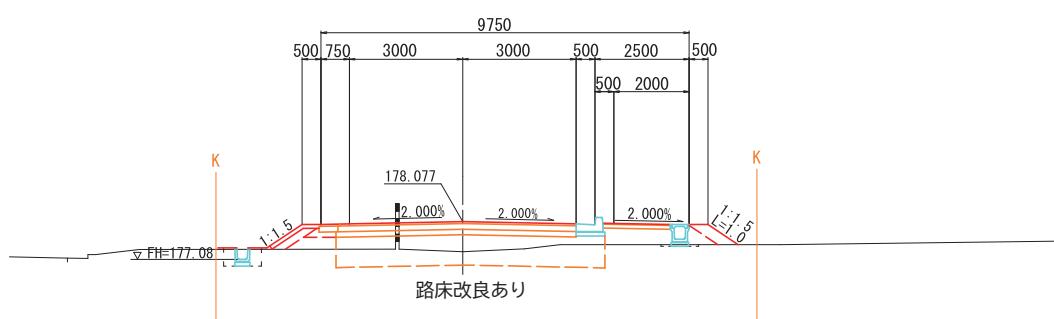
第4図 道路工事平面図(1:600)・縦断図(縦1:100、横1:1,000)

横断図（変更前）

(単位mm)

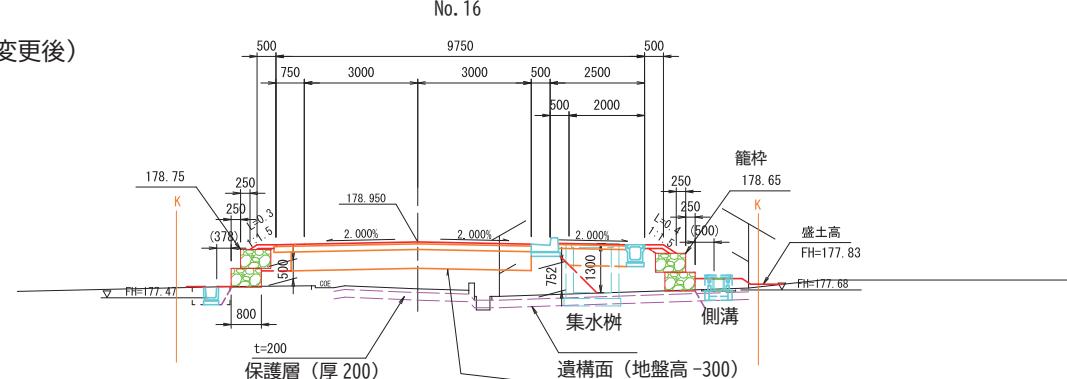


No. 17

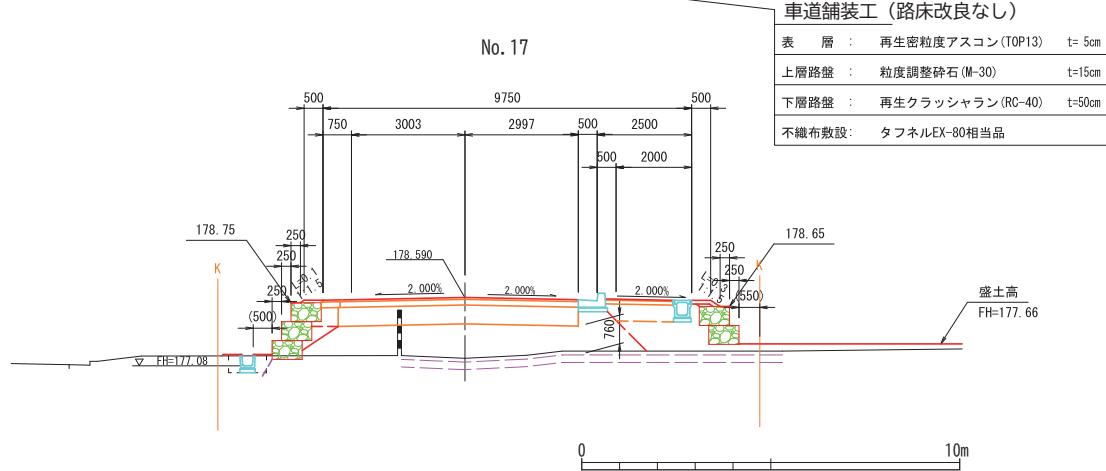


横断図（変更後）

(単位mm)



No. 17



第5図 道路工事横断図 (1:200)

II 位置と環境

1. 地形と地質

名張市は三重県の中央西端に位置し、市の南西側は奈良県宇陀市、北西側は奈良県山辺郡山添村と接する。市中心部（名張盆地）は名張川・宇陀川の氾濫原と名張川南東の段丘面で構成され、両河川の西側は北西側隆起の逆断層により急峻な山地となる。名張川や笠間川の流路位置は、この断層の影響を強く受けている⁽¹⁾。名張盆地の景観は、持統天皇行幸時に「隠の山」^{なばり}と詠われた（第2表文献2）。

薦生遺跡（1）は、奈良県境に接した名張市北西部の薦生に所在し、名張川が名張市夏秋付近から峡谷に入り、著しく蛇行して袋状をなした河岸段丘上に立地する（第6図）。薦生は周囲を山地・丘陵・名張川に囲まれた狭小地であるが、名張川を北に下れば笠置・南山城、笠間川を遡上すれば大和都祁、名張川を渡河し東行すれば美旗古墳群（身野、名張市美旗）を経由して阿保（伊賀市青山町）や伊賀国府方面に至る交通の要地である。薦生の名は、薦の材料となる葦などが繁茂することに由来すると推測され⁽²⁾、名張川河畔は植生の遷移が抑制されて、草原的な環境が常時保たれている（写真図版1）。

蛇行する名張川には小規模な河岸段丘が付属し、段丘上には鵜山遺跡（13）、大川遺跡（15）など縄文時代草創期・早期の著名な遺跡が所在する。薦生遺跡もこうした縄文遺跡のひとつであり、遺跡北部で土器や石器が採集されている（第IV章）。

2. 古代名張郡と都祁山道

（1）古代の名張郡

『倭名類聚抄』によれば、古代名張郡内には周知（名張市矢川ほか）・名張（名張市箕輪中村ほか）・夏身（見）（名張市夏見ほか）の三郷があった。大化改新の詔では、隠横河までが畿内とされ、壬申の乱で大海人皇子は菟田（宇陀）郡家から室生大野、隠駅家へ至り、横河を経て伊賀駅家へ向かう（文献1）。名張郡内には、この「原東海道」と呼ぶべき古道が

通過していた。持統天皇の伊勢行幸でも、大和長谷から名張を通り伊勢へ向かっている（文献2）。

古代名張郡の政治的中心は名張・夏見郷の原東海道付近にあった。飛鳥時代の隠横河・隠駅家は、原東海道が名張川と交差する手前の名張市箕輪中村付近と推定されている⁽³⁾。当地の黒石A遺跡（25）は、7世紀後半には竪穴建物が主体で、8世紀に朽行5間前後の掘立柱建物主体へと変化する。浦遺跡（26）は円面硯、観音寺遺跡（27）では、奈良時代の大型ピットや円面硯が発見された⁽⁴⁾。

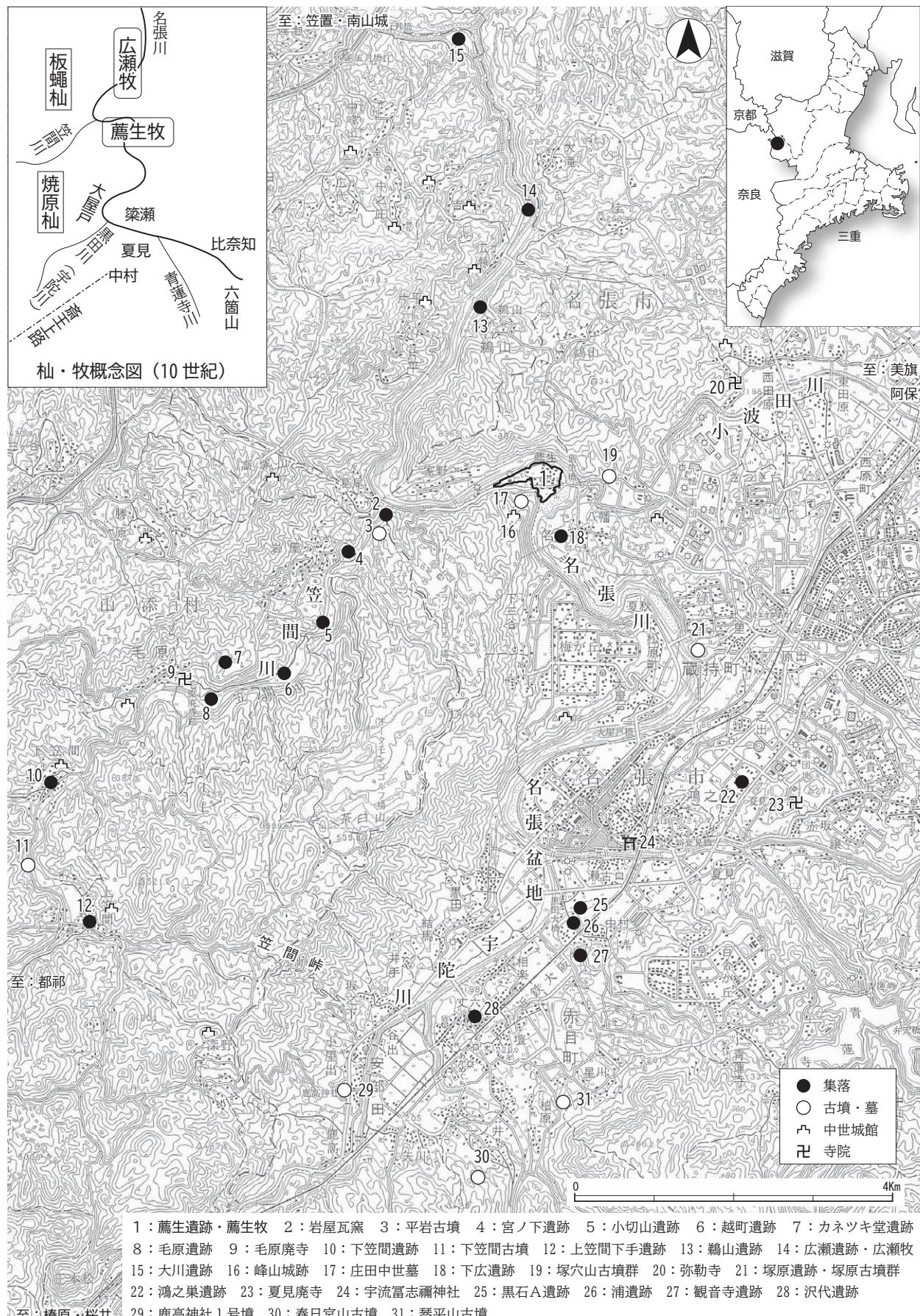
夏見廃寺（23）は、造営主体は大来皇女（文献5）など諸説あるが、出土瓦から金堂が7世紀末に建立、塔・講堂は8世紀中葉に整備されたとみられている。夏見廃寺の至近にある鴻之巣遺跡（22）は、夏見氏の居宅とも目され、7世紀代には竪穴建物が主体であるが、8世紀に正方位の掘立柱建物が整備され、円面硯や鎧帶が出土するなど官衙的色彩が強い⁽⁵⁾。

薦生は平安時代、名張郡夏見郷に属したが、原東海道からは約4～5km北西に離れている。

（2）都祁山道

都祁山道は靈龜元年（715）年に開かれた、平城京から都祁へ至り、伊賀・伊勢国へ向かう道である（文献3）。天平12年（740）の聖武天皇関東行幸や奈良時代斎王の群行・帰京にも利用されたとされ、古代交通の研究史上、主に都祁から名張への道程が問題とされてきた⁽⁶⁾。足利健亮氏は都祁から室生上笠間・深野を経て笠間峠を越え、名張市安部田で平安時代斎王上路に接続する道を想定している（以後、笠間越ルートと呼称）。このルートは、上笠間から最短で名張盆地に達するが、極めて険しい峠越え道であること、名張に至ると鹿高神社1号墳（27）が所在するものの、道中に古墳～奈良時代の遺跡が乏しい点が問題となる。また、足利説は11世紀の偽文書と疑われる「孝謙天皇勅施入文案」（文献7）を奈良時代の史料としている点も問題である。

一方、直木孝次郎氏は、都祁から笠間川に沿って下り、名張盆地に至るルート（以後、笠間川ルートと呼称）を都祁山道に比定した⁽⁷⁾。笠間川ルート



第6図 遺跡分布図 (1:70,000)

には、古墳時代後期の平岩古墳（3）、下笠間古墳（11）をはじめ、奈良時代には毛原廃寺（9）、毛原遺跡（8）、岩屋瓦窯（2）、薦生遺跡のほか、宮ノ下遺跡などの遺物散布地（4～7、10）が濃密に分布しており、直木氏も毛原廃寺の存在と、川沿いに名張盆地へ下るため比較的通行が容易であったことを比定の根拠としている。

毛原廃寺は唐招提寺と同等規模の金堂や、塔、中門、南門などの壮大な伽藍を有する大寺であるが、文献の記録がなく、造営主体は不明である。近年の調査や軒瓦の検討から、奈良時代前半（720年代頃）創建、天平頃に改修されたと推定されている⁽⁸⁾。岩屋瓦窯は大和国山辺郡内にあるが、毛原廃寺のほか夏見廃寺、伊賀国分寺など伊賀国中に瓦を供給している⁽⁹⁾。これらの遺跡に加え、薦生遺跡で大型建物が確認されたことは、ルート考証上重要である。

なお、笠間越、笠間川ルートのいずれにも中世城館や石造物が多くみられ、中世以前には大和高原内に無数の交通ルートが開かれていたとみられる。

（3）都祁山道と斎王上路

奈良時代の斎王群行・帰京のルートは記録がなく、史料上、具体的な行程が辿れるのは平安時代以降である。平安時代の斎王群行は東海道・近江国を経由するが、凶事に伴う帰京の際には、伊勢川口（津市白山町）、伊賀阿保（伊賀市青山町）、大和都祁を経由することになっていた（『江家次第』）⁽¹⁰⁾。永元年（1165）の好子内親王の帰京では、伊賀河口（阿保）から黒太（名張市黒田）に至り、丈六堂（名張市赤目町丈六）に宿している（『顕広王記』）。また、10・11世紀の東大寺領板蠅松・藤原朝成領関係史料には、「斎王上路」「伊勢往旧道」「西鹿高脇斎宮帰京大路」とあり、東大寺が主張した板蠅松四至の南限が斎王上路であった（文献8・14）。これらから、10～12世紀には宇陀川の南側に斎王の帰京路が通過していたことがわかる。

平安時代の斎王上路は、奈良時代以前の古式によったルートと解され、先述のように足利健亮氏も都祁山道と斎王上路を同一視しているが、奈良時代にも群行と凶事の帰京路が別であった可能性や、平安時代以降にルートが変更された可能性も含め、さらなるルートの考究が必要であろう。

3. 薦生牧をめぐる争論

（1）薦生牧の概要

平安時代、薦生には「薦生牧」があった。薦生牧は、興福寺転經院僧都円珍から勘解由長官（のち中納言）の藤原朝成に、山辺郡内の広瀬牧とともに伝領された牧である。10世紀以降、笠間川の西方にあった東大寺領板蠅松の四至をめぐる争いが顕在化するなかで、多くの関連文書が残された⁽¹¹⁾。薦生は、戦前に執筆され戦後刊行された石母田正氏の名著『中世的世界の形成』の舞台であり、東大寺領黒田荘の成立と展開に関する多くの研究がある。

朝成は名張郡内に薦生牧、築瀬、皇族から施入された墾田や栗林、野地などの広大な所領を有しており、康保元年（964）薦生牧を立券しようとしたが、天暦頃（950頃）に東大寺が笠間川の西方にあった板蠅松の四至拡大を企て、名張川の東に榜示を設置したことから検校使清忠の調査を必要とし、名張郡司、夏見郷薦生村刀禰、山辺郡都祁郷刀禰らの証言によって東大寺の主張は退けられた。こうして薦生牧は朝成の莊園として立券されるが、その後も争論や東大寺の工作は続いた。朝成の死後、万寿2年（1025）には妹孫の経通に伝領される。

（2）古代の牧と薦生牧の内部

古代令制下（職員令・厩牧令）では、牧ごとに牧長（長官）、牧帳（文官）、牧子が置かれ、郡令層が牧長にあたり、都や軍團に馬を供給した。延喜式制下（牧規定）では、主に東国の馬匹生産適地に諸国牧・御牧（皇室料所）、京都近郊に近都牧を置き、中央に貢納された馬は馬寮厩舎での櫛飼、畿内近国の國飼、近都牧の放飼で飼養されたが、律令制の変質とともに、私牧の発展をみることになった⁽¹²⁾。

薦生牧は、興福寺転經院僧都円珍から藤原氏に伝領された、いわゆる私牧である。康保元年に薦生村刀禰等が記すところ（文献10）では、薦生牧の四至は「東限垣田河并壺野小峯 南限小鮎滻梁（築）瀬并高峯 西限笠間河并大河 北限高峯」であり、現在の薦生に名張川東岸（名張市八幡）の河岸段丘を加えた範囲と推測されている⁽¹³⁾。牧内には域外から流入した浪人が居住しており、朝成の立券により臨時雜役が免除された。また、在地側の薦生村刀

禰のうちに、東大寺社別当粟田良種の名がみえる。康保3年には、牧内山麓に腰帶状の治田・新開田・公田が開かれ、その他の箕輪（平地）に牧地（放牧地か）や住人の居住域があったという（文献11）。牧内の田地は一様に牧の領主のもとにあり、その中に他人の私領が存在し、さらに公田からは官物租税が国衙に弁進されていた。応和2年には薦生牧内に新開治田、荒廃田、築瀬2箇所（万寿2年には小鮎瀬・葦瀬の2箇所）があった（文献9・13）。このように、10世紀中葉の薦生牧内には、谷水田、荒廃田、居住域、河畔の牧地、鮎漁等の築瀬が存在するとともに、社工や浪人など山・野・河の多様な生業に従事する人々が、利害に応じて貴族や寺院、国衙と個別に関係を結び混在していた。以上を念頭に薦生牧の景観や牧地の規模を検討する必要があろう。

薦生・広瀬牧近辺では、8世紀の大和国宇陀郡内に「宇太御厩」「宇陀肥伊牧」があり、皇室・皇族に馬を資する小規模な備蓄牧と推定されている⁽¹⁴⁾。また、宇太御厩には野地が含まれ、皇室に箸用の竹^{まき}や芻などが献上されていたことも参考になる。

（3）奈良・平安時代の社

奈良時代、大安寺は大和国山辺郡「波多蘇麻」、伊賀国伊賀郡に「太山蘇麻庄」、西大寺は伊賀国名張郡社を有し、造東大寺司（令外官）も伊賀山、伊賀山作所を管轄していた。平安時代には、名張郡南部の六箇山に神宮社があり、薦生周辺には笠間川の西に東大寺領板蠅社、笠間川の東に、のち板蠅社に包摂される焼原社（山添村毛原付近）があった。毛原は焼原の遺称とされるほか、焼原は山間での焼畑農耕を示唆する地名としても注目されよう。

概して、名張川流域の山林開発は木津川近くから進行し、平安時代以降に名張川の中・上流へ進んだ。

4. 中世以降の薦生

東大寺は、薦生牧から一旦手を引いたあとも板蠅社の拡大工作を図り、11世紀中葉には「孝謙天皇勅施入文案」（文献7）の偽作などを通じて笠間川東の焼原社が板蠅社に包摂され、名張盆地（宇陀川左岸）の東大寺領化が進んだ（黒田本荘の成立）。また12世紀後半、東大寺は薦生の社出作地の一円

寺領化を図り、国衙との間で争論となった。これらの結果、鎌倉時代初めには東大寺領薦生荘が名実とともに確立したとみられる（文献14・15）。

鎌倉時代後期には、黒田荘民が蜂起し悪党として東大寺に抗するが、「薦生山田」の住人「左衛門入道良顔」「兵衛尉」が黒田荘悪党の縁者に挙げられており、南北朝期には、黒田荘民とともに南朝に属し、域内に城を構え寺家に対峙している。その際、薦生荘悪党「公文孫五郎」以下5名の名が挙げられ、黒田荘悪党との連合が進んでいた（文献18）。悪党活動は応安2年（1369）に一応鎮圧されたが（文献19）、東大寺の支配は著しく弱まった。

薦生の名張川対岸にある下広遺跡（18）では、平安時代末～鎌倉時代の小規模な掘立柱建物が確認された。室町時代・戦国期には、薦生の南側山地に峰山城跡（16）が築かれ、尾根上に小規模な曲輪が階段状に連なっている。峰山城跡の膝下には、瀬戸鉄釉四耳壺などが出土した庄田中世墓（17）がある⁽¹⁵⁾。現薦生集落北側の副野氏堡（第1図）には、土塁や戦国期の一石五輪塔が残されているほか、明治の地籍図には、発掘調査2区aの北側に溝で囲まれた方形区画があり（写真図版32）、集落内に複数の城館が存在した可能性が高い。

薦生の鎮守社は中山神社（春日社）で、寺院は真言宗醍醐派中山明王院があり、境内や薦生地内には寛正（1460-1466）、応永13年（1406）の記年銘のある石造物がみられる⁽¹⁶⁾。

近世には、薦生村は嘉永6年（1853）田23町余、畠18町余、家数60、人数246人であった⁽¹⁷⁾。村内は大和高原から美旗新田を経て初瀬街道に至る新田街道（現：県道上笠間八幡名張線）が通過し、南は名張への名張街道が分岐した（写真図版32）。

（櫻井）

註

- （1）産業技術総合研究所活断層データベース 2024年8月23日版 (<https://gbank.gsj.jp/activefault/>)
- （2）富森盛一『黒田庄誌』赤目出版会、1968年。
- （3）足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道』第一巻、法藏館、1988年。
- （4）名張市教育委員会『黒石遺跡』2000年 / 名張市「浦

遺跡』『名張市史』資料編考古、2010年 / 三重県教育委員会「観音寺遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1985年。

(5) 名張市教育委員会『夏見廃寺』1988他 / 名張市遺跡調査会『鴻之巣遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群』1991年。

(6) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道』第一巻、法藏館、1988年 / 市大樹「古代の交通」『三重県史』通史編 原始・古代、2016年。

(7) 直木孝次郎「毛原廃寺と都祁の山道」『日本古代國家の成立』講談社、1996年（初出は『近鉄文学散歩』1997年9月号、近畿日本鉄道、1977年）。

(8) 奈良県立橿原考古学研究所『毛原廃寺』2020年 / 山添村教育委員会・奈良大学文学部文化財学科『毛原廃寺跡第2次発掘調査報告』2020年 / 山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『史跡毛原廃寺跡西方地区発掘調査概要報告』2022年 / 山添村教育委員会・奈良

県立橿原考古学研究所『毛原遺跡発掘調査概要－毛原廃寺2022年度範囲確認調査－』2023年。

(9) 森川桜男・山田猛「伊賀国分僧寺出土瓦とその周辺」『古代研究』21、元興寺文化財研究所、1980年。

(10) 註6前掲。

(11) 平安時代以降の薦生牧・黒田荘関連文書は、三重県『三重県史』資料編古代・中世（上）、2015年を参照した。

(12) 湯山賢一「古代の牧」『日本馬具大鑑』第2巻古代下、吉川弘文館、1991年。

(13) 丸山幸彦『古代東大寺庄園の研究』渓水社、2001年。

(14) 吉川敏子「大和国宇陀郡の古代牧二題」『文化財学報』第37集、奈良大学文学部文化財学科、2019年。

(15) 名張市『名張市史』資料編考古、2010年。

(16) 竹田憲治氏の教示による。

(17) 竹内理三編『角川日本地名大辞典』角川書店、1983年 / 平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983年。

第2表 薦生遺跡関連年表

西暦	和暦	主な出来事	文献	文献番号
672	天武元	壬申の乱、隱駅家を焚く	日本書紀	1
692	持統6	持統天皇伊勢國行幸 行幸歌「わが背子は、いづく行くらむ 奥つもの 隠の山を 今日か越ゆらむ」	日本書紀 万葉集卷4-52	2
		このころ、夏見廃寺建立か 夏見廃寺出土甲午年銘塔（694年）		
715	靈亀元	都祁山道が開かれる	続日本紀	3
717	垂老元	久勢女王が伊勢に遣わされる	続日本紀	4
725	神亀2	大来皇女の発願で夏見に昌福寺建立という (ただし、大来皇女は大宝元年(701)死去)	薬師寺縁起 ※承保2年(1075)に成立	5
		このころ、毛原廃寺創建・改修か		
740	天平12	聖武天皇閑東行幸、堀越（都祁）から名張に至り1泊する	続日本紀	6
755	天平勝宝7	板蠻仙、孝謙天皇の勅命により東大寺に施入という	(存疑)天平勝宝7年12月28日孝謙天皇勅施入文案（東大寺文書1-1-264） ※11世紀の偽文書とされる	7
950頃	天暦頃	東大寺が板蠻仙の四至を拡大し、薦生牧東南の桜瀬に勝石を打つ	康保3年4月2日伊賀国夏見郷刀禰等勘状案（東大寺文書1-1-309-（5））	8
962	応和2	薦生牧・広瀬牧など、興福寺転經院僧都円珍の遺言により、藤原朝成に譲渡される	応和2年8月20日転經院牧地等去状案（東大寺文書1-1-155-（1））	9
964	康保元	薦生牧をめぐり、東大寺と朝成の相論となり、朝成の莊園となる	康保元年11月23日伊賀国名張郡夏見郷刀禰等解案（東大寺文書1-1-309-（3））	10
966	康保3	薦生牧内には、山麓に治田・新開田・公田・箕輪（平地）に牧地や住人の居住域があった	康保3年4月2日伊賀国夏見郷薦生村刀禰等勘状案（東大寺文書1-1-309-（5））	11
974	天延2	藤原朝成死去		
998	長徳4	東大寺領諸国莊園田地目録に「薦生庄」と記される	東大寺領諸国莊園田地目録案（『東大寺要録』巻6）	12
1025	万寿2	薦生牧が朝成の妹孫の経通に伝領される	万寿2年11月日伊賀国名張郡司解案（東大寺文書1-1-309-（8））	13
1034～1058	長元7～天喜6	名張盆地（宇陀川左岸）の東大寺莊園化が進む（黒田本荘の成立） 焼原仙が板蠻仙に包摶される	天永元年12月13日勧学院使紀守俊等文書勘定状案（東大寺文書3-11-14） 天喜6年正月8日伊賀国司宣（東大寺成願文書44巻）	14
1128	大治3	東大寺莊園目録に「笠置庄加薦生」と記される	東大寺領見在莊園目録案（東大寺文書1-24-303）	15
1220	承久2	薦生莊民、麦の不作を東大寺に訴える	伊賀国薦生莊民申状（真福寺文庫）	16
1282	弘安5	黒田莊惡党の蜂起（のちに薦生・築瀬などの周辺住民も加わり、名張郡惡党と呼ばれる）	東大寺衆徒等申状案（東大寺文書1-1-22-（1））他	17
1340	暦応3	東大寺、黒田・薦生の住民が比叡山と通じ、郡内に城を構え寺に従わないと訴える 薦生莊惡党として、「公文孫五郎」らの名が挙げられる	暦応3年卯月東大寺衆徒群議事書土代（東大寺文書1-1-53） 暦応3年9月薦生莊惡党交名注文（東大寺文書4-98）	18
1369	応安2	惡党活動が鎮圧される	中村章定請文（久原文庫）	19

天皇	斎王	在任	備考
元正	久勢	717?～?	
元正～聖武	井上	721～?	斎宮寮の本格的な拡大と制度化
聖武	県	?～749	
孝謙	小宅	749	
淳仁	山於	758	
光仁	酒人	772	夏見郷に栗林を所有
光仁	淨庭	?	

第3表 奈良時代の斎王群行
(実在し、群行が確認できる斎王)

III 遺構

1. 基本層序

(1) 基本層序

当地の基本層序は以下のとおりである。地点間の層序の対比は、第7図、第4表に示した。

I : 近現代盛土・作土

盛土や近現代の畠、水田作土である。明治の地籍図では「畠」が圧倒的に多く（写真図版32）、水田は谷部（1区、2区b、2区c）にわずかにみられる程度である。

II : 縄文～中世遺物包含層

縊まりのない褐色系砂質シルトで、縄文時代から中世の遺物を含んでいる。畠（畠）作や土壤化作用によりIII層が攪拌されたもので、III層との境界は漸移的である。II層は1区、2区a bにはみられず、2区cから3区へ向かうにつれて層が厚くなる。2区c・3区では、II層上・中が近世遺構の基盤となっている。

2区c南壁4層（第13図）から、縄文時代の

サヌカイト剥片（134）が出土した。

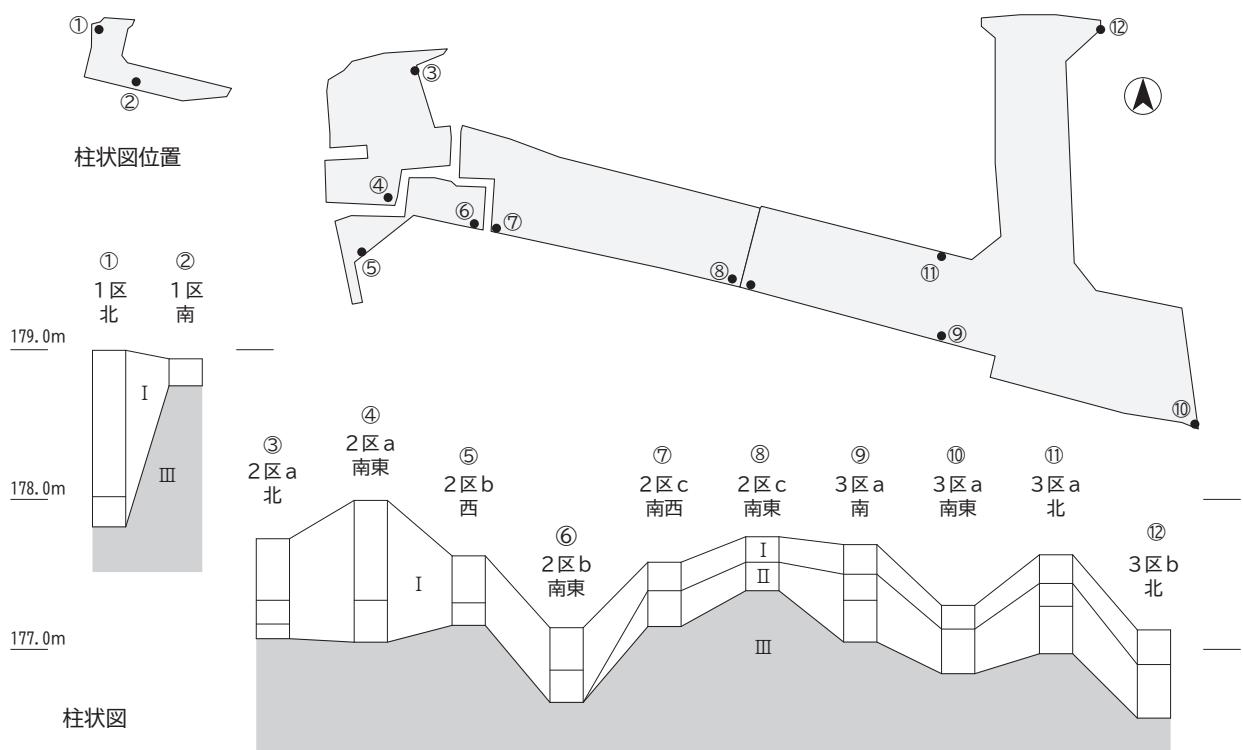
III : 基盤層

1区では、南方の山地から派生する丘陵が基盤となる。2区の基盤層は名張川の氾濫堆積物に由来する段丘堆積物で、調査深度内では丘陵の基盤に達していない。

III層上位は砂質シルトや細砂層で、遺物を含まない。また、各層とも植物の生痕が顕著である。2区a・2区c・3区aでは有機物を多く含み、強く土壤化（暗色化）している箇所がある。3区a北壁7層は黒ボク土に相当する暗色帶で、完新

第4表 基本層序対照表

基本層序	1区 南壁	2区a 東壁	2区b 南壁	2区c 南壁	3区a 南壁②	3区b 東壁
I	1～ 7層	1～ 5層	1～ 4層	1～ 3層	1層	1層
II	-	-	-	4層	2～ 5層	2～ 6層
III	8～ 9層	6～ 13層	5～ 6層	5～ 10層	6～ 9層	7層

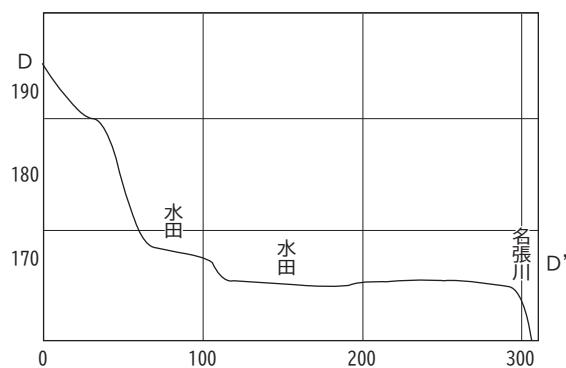
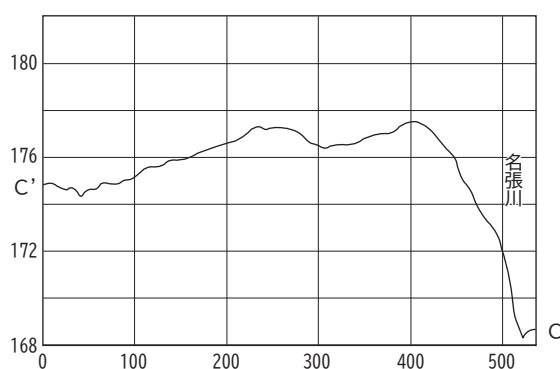
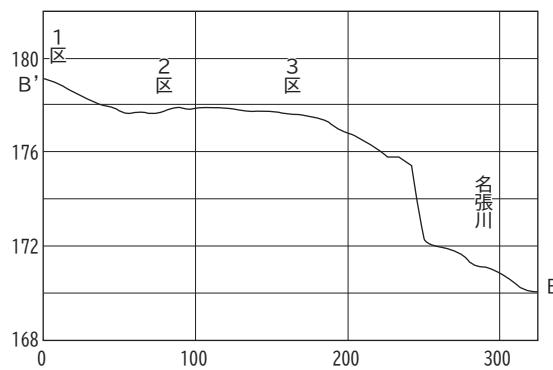
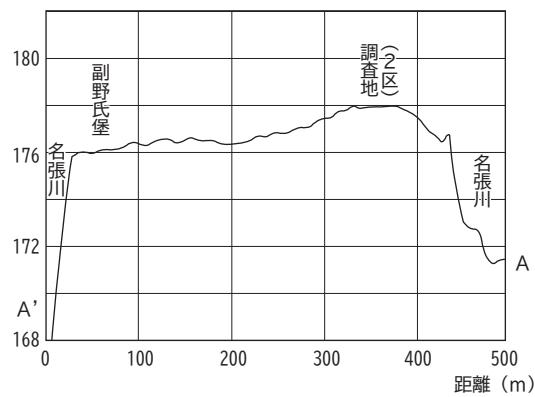


第7図 土層柱状図（1:50）



※等高線図は名張市教育委員会『名張市遺跡地図』(1983年)中の1970年の地形図による

標高 (m)



第8図 遺跡内の地形断面図（国土地理院基盤地図情報5mメッシュを「カシミール3Dスーパー地形」で作図）

世に形成され、その上に砂質シルトや細砂が墨重し続けたことがわかる。

下位は礫（拳大～人頭大）を多く含む。2区a東壁①8層（第12図）では、拳大～人頭大の礫が覆瓦構造をなしており、名張川が供給した礫層の上に砂・シルトなどの氾濫堆積物が被覆し自然堤防化、のちに段丘化したことが知られる。

（2）調査地の微地形

薦生遺跡が所在する河岸段丘は、詳細にみると以下のようないくつかの微起伏が認められる（第7・8図）。

ア：発掘調査2区、3区付近を最高点（標高約178 m）として、土地が北側に緩やかに傾斜している（A-A'）。段丘の南側は名張川水流の攻撃面にあたり、自然堤防が特に発達していると考えられる。

3区内では、南から北へ地表・遺構面ともに標高が低くなる（第7図）。

イ：調査地は、名張川から緩やかに立ち上がり、2区c・3区aでほぼ平坦となる。2区bは谷状となるが（B-B'）、発掘調査の状況からは近世・

近代の水田による地形改変の影響も大きいと推測される。

ウ：中山神社の北東・北西に舌状の微高地と谷があり（C-C'）、中山神社周辺や副野氏堡付近に広い平坦地がある。

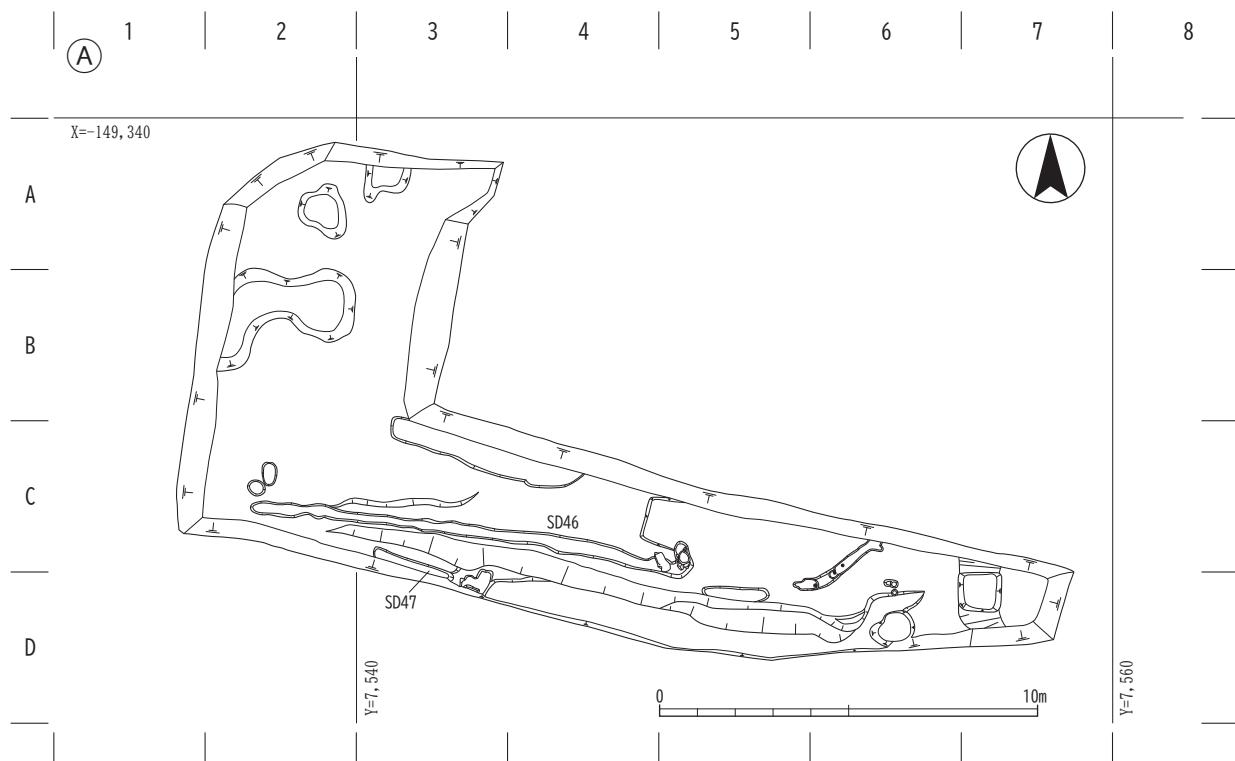
これらの特徴のうち、特にア・イで示した、段丘南側の自然堤防のリッジが、今回の発掘調査の遺構を評価する上で重要であるといえよう。

2. 各調査区の概要

（1）1区

1区は、南側の山地から延びる丘陵尾根と北側の低地に挟まれ、現道が切り通し状を呈している（写真図版3）ことから、旧地形に関する詳しいデータを得るために設定した調査区である（第9図）。

表層は厚さ1.1～1.5 mの盛土で、標高178.0 mで近現代の水田作土（西壁8層）、標高177.8 mで基盤層に達した（第10図）。中世以前の遺物包含層（基本層序II層）はみられない。基盤層（基本層序



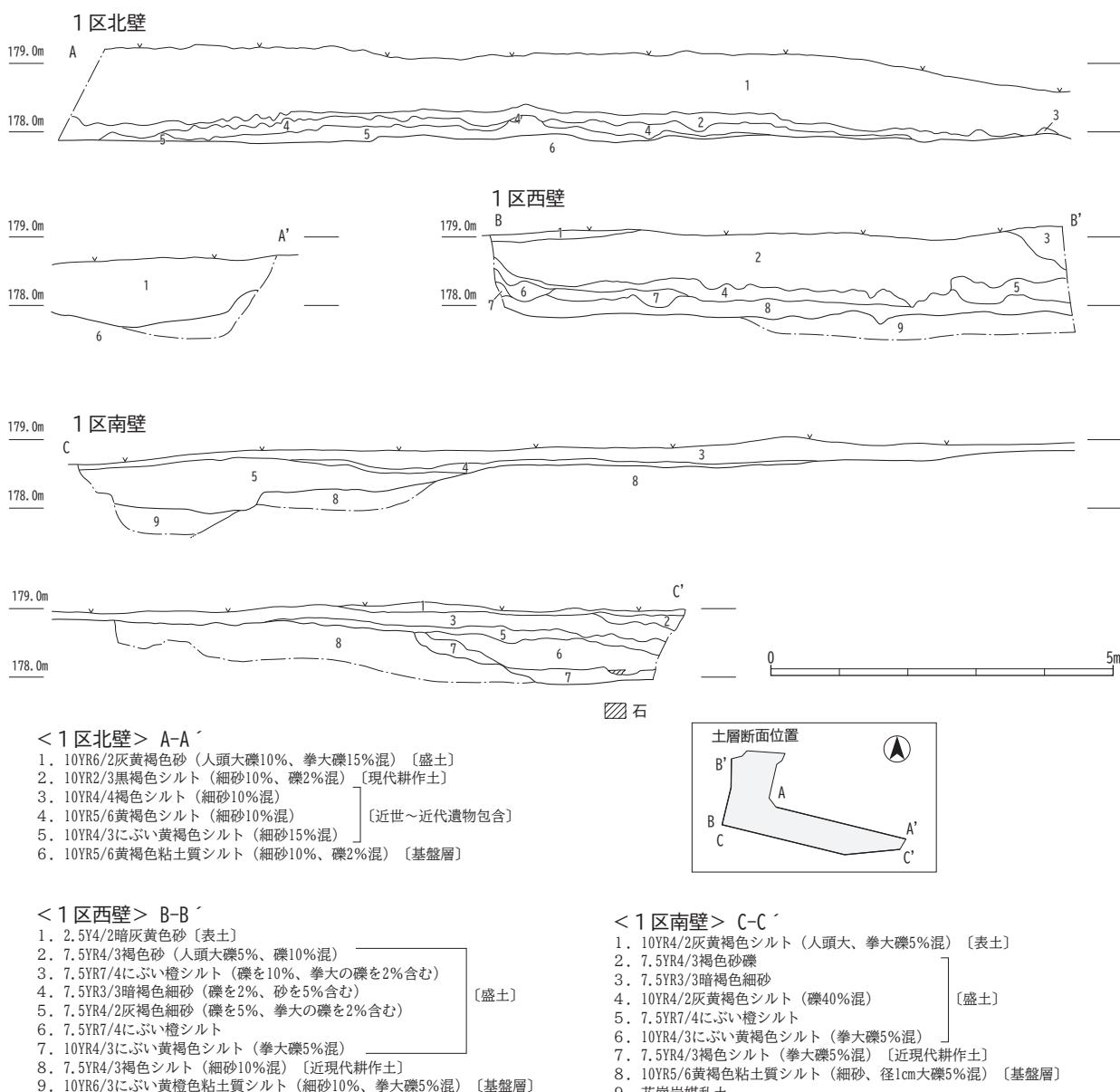
第9図 1区遺構全体図 (1:200)

Ⅲ層)は、丘陵裾の黄褐色粘土質シルト(南壁8層)や山地の岩盤が風化した花崗岩媒乱土(南壁9層)で、名張川の氾濫堆積物は1区には及んでいない。

検出した遺構はいずれも近世のもので、耕作に伴う素掘溝(SD 46・47)がある。

明治時代の地籍図(写真図版32)では、1区の北側に道が通過しており、1区は盛土で嵩上げされていることから、切り通し状の道路景観は現在の県道敷設時に形成されたものと判断される。中世以前の道は、明治時代と同じく、調査区の北側を通過していたと考えられよう。

(2) 2区



第10図 1区土層断面図(1:100)

調査区内に水路と擁壁があり、水路は道路工事着工まで撤去ができなかったため、a b cの3ヶ所に分割して調査にあたった(第11図)。

① 2区 a

調査前は宅地として利用されており、近現代の盛土で大幅に嵩上げされていた。中世以前の遺物包含層(基本層序Ⅱ層)はみられない。

2区 a 南側は旧耕作土下(東壁③9層上、標高177.0m)で遺構を検出したが、A-Eライン以北は近世以降の大型攪乱が多く、基盤層の残りが極めて悪かったため、東壁①9・10層上(標高176.8~176.0m)で遺構検出を行った(第12図)。本来は



第11図 2区遺構全体図 (1:200)

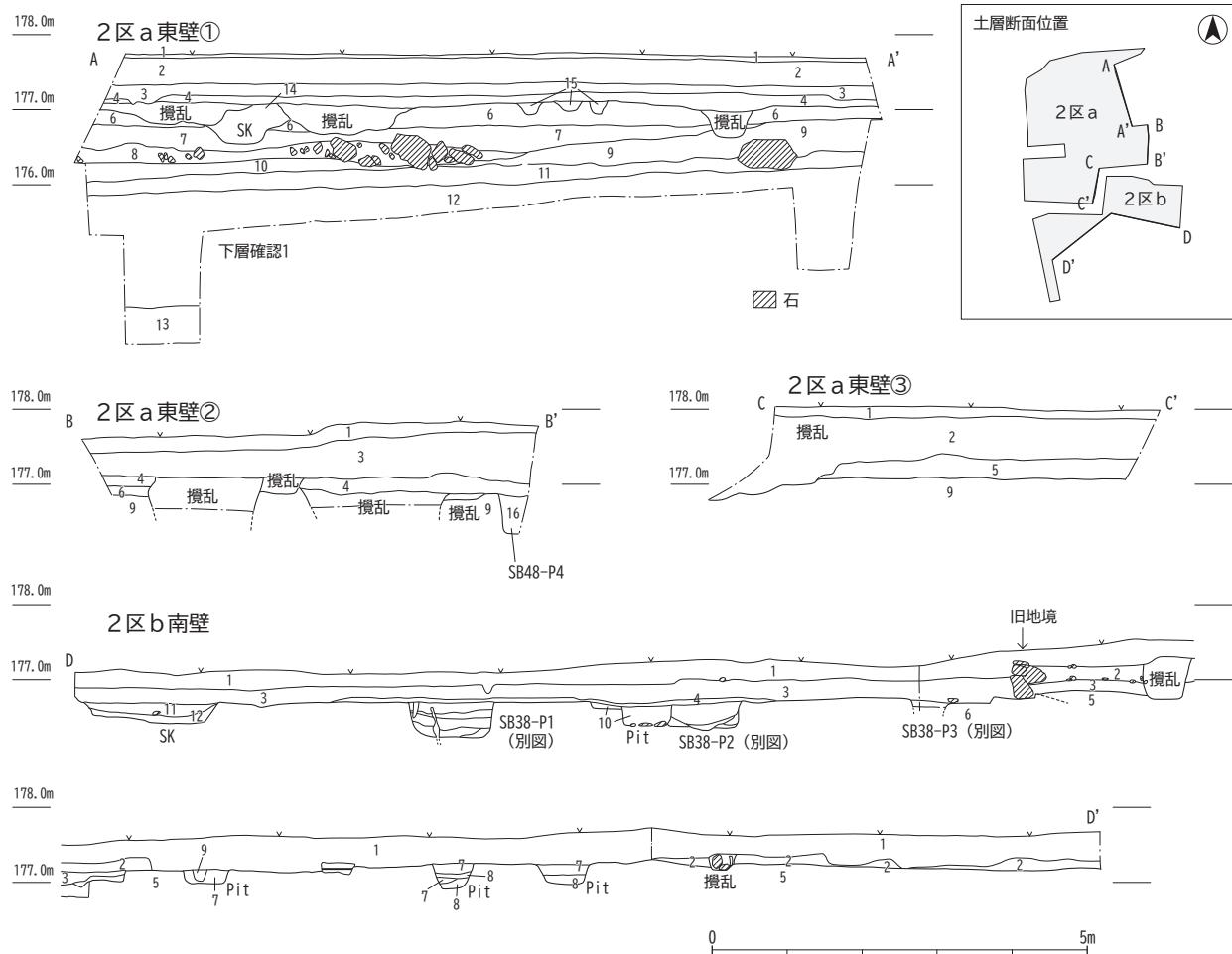
東壁①6層上（標高177.0m）が中世以前の遺構面であり、中世以前の遺構は大半が失われたとみられる。

なお、基盤層のうち、東壁⑨～11層は北へ向かって傾斜するように堆積しており、北側が凹地状を呈するが、同6～8層がその凹地を埋積している（下層確認1）。

検出した遺構は大半が近世以降の土坑や井戸である。遺構には中世の土器が混入しており、小型のものは完掘したが、大型で深いものは段下げにとどめ、完掘しなかった。調査区南東隅で中世の掘立柱建物（SB48）のピットを確認している（第11図）。

②2区b

調査前は全面畠地であったが、A-14ラインの東



<2区a東壁> A-A' B-B' C-C'

1. 碎石等〔表土〕
2. 2.5Y5/3黄褐色粗砂〔現代盛土〕
3. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト〔近現代遺物包含〕
5. 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト〔強グライ化〕〔旧耕作土〕
6. 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト〔径3～5cm大礫混〕
7. 7.5YR4/2灰褐色砂質シルト〔極細砂混〕
8. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト〔径5～50cm大の角礫多く、礫は覆瓦構造をなす。黄褐色粘土質シルトブロック混〕
9. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト～極細砂〔南側がより強く土壤化、生痕著しい〕
10. 10YR6/6明黄褐色砂質シルト～極細砂〔9と同質だが土壤化弱い〕
11. 2.5Y7/4浅黄色砂質シルト〔生痕著しい〕
12. 2.5Y6/4にぶい黄色粘土質シルト
13. 10YR6/4にぶい黄橙色細砂〔よく締まる〕
14. 10YR3/1黒褐色砂質シルト〔中世SKか〕
15. 10YR4/1褐灰色砂質シルト〔Pit〕
16. 10YR5/1褐灰色砂質シルト〔SB48-P4〕

<2区b南壁> D-D'

1. 2.5Y6/3にぶい黄～2.5Y4/1黄灰色砂質シルト〔現代畠作土〕
2. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト〔明黄褐色シルトブロック50%混〕〔旧畠作土〕
3. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト〔旧水田作土〕
4. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト〔旧底土〕
5. 10YR6/6明黄褐色砂質シルト〔径3～5cm大礫混〕〕〔基盤層〕
6. 7.5YR5/2灰褐色砂質シルト
7. 10YR4/1褐灰色砂質シルト〔黄褐色砂質シルトブロック50%混〕
8. 10YR6/6明黄褐色砂質シルト〔褐灰色砂質シルトブロック10%混〕〔Pit掘方〕
9. 10YR3/1黒褐色シルト〔Pit柱痕〕
10. 10YR6/6明黄褐色砂質シルト〔褐灰色砂質シルトブロック10%混〕〔Pit〕
11. 10YR4/1褐灰色砂質シルト〔明黄褐色シルトブロック50%、粗砂多く混〕〕〔SK〕
12. 10YR6/6明黄褐色砂質シルト

第12図 2区a・b土層断面図 (1:100)

は凹地で、近世・近代には水田として利用されており、水田作土から18世紀代の陶磁器が出土している。SB49付近は水田により大きく削平されていた。中世以前の遺物包含層（基本層序II層）はみられない。A-14ラインの西は、土壤化や生痕の影響が特に大きく、古代の遺構表層に中世の土器片が混入していた。

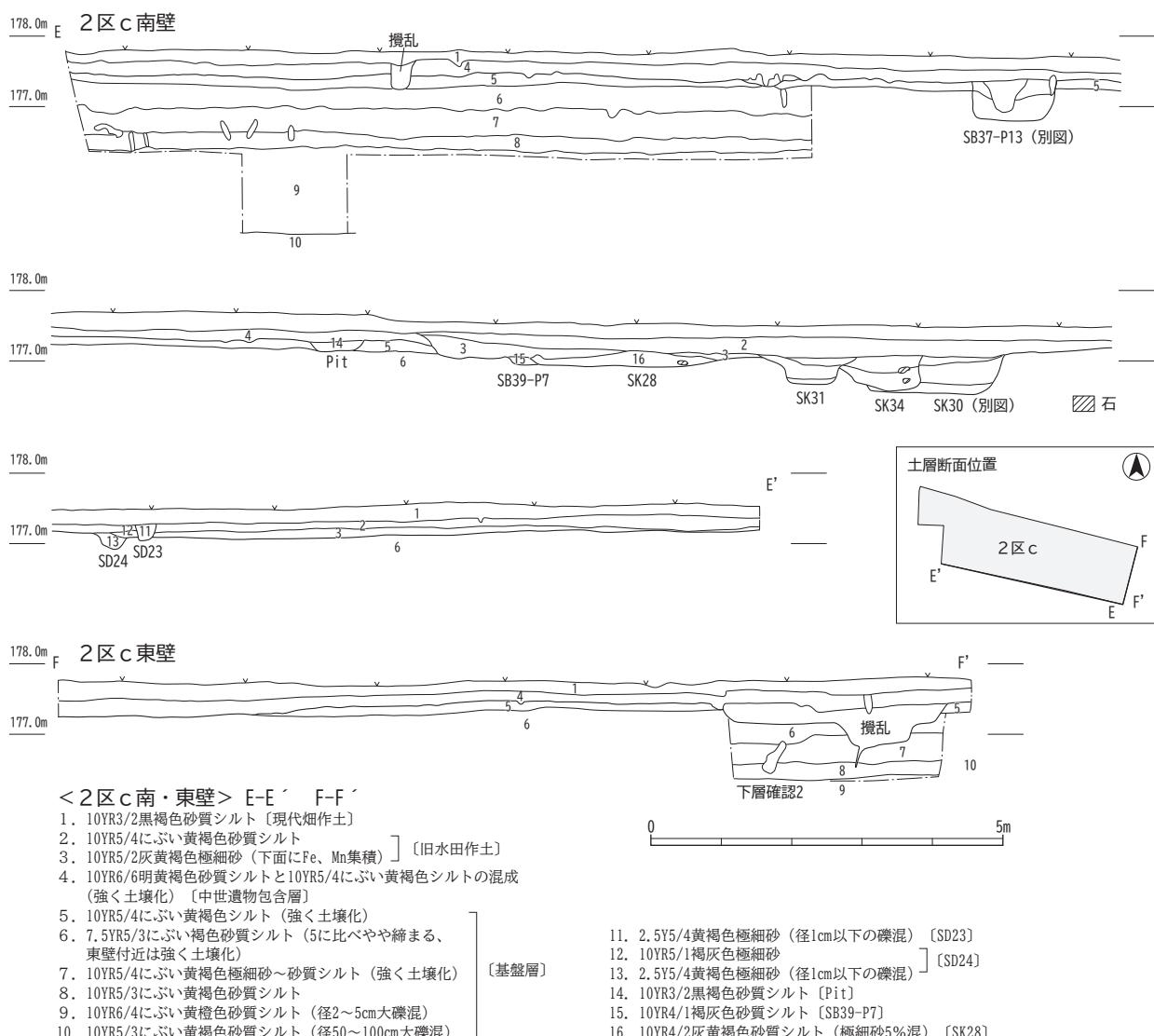
A-14ラインの東は標高176.6m、西は177.1mで古代・中世の遺構を検出した（第12図）。古代の遺構は掘立柱建物（SB38・44・45）である。中世は非常に多くのピットがみられたが、SB49・50以外の建物プランを復元するには至らなかった。他にSK40・42などの土坑がある（第11図）。

③2区c

調査前は全面畠地であったが、A-23ラインの西は近代まで水田として利用されていた。2区bと同じく、作土から18世紀代の陶磁器が出土している。水田の影響で、基本層序I・III層間の境界が明瞭なため、遺構を良好に検出できた。中世以前の遺物包含層（基本層序II層）はみられない（第13図）。

A-14ラインの西は標高177.2m、東は177.4mで古代・中世の遺構を検出した（第13図）。遺構は、古代の大型建物SB37・39や中世の掘立柱建物SB48・51、中世の溝SD25などで、SB37以東は遺構の密度が希薄となる（第11図）。

A-Gラインの北側は近世以降の大型攪乱が多くみ



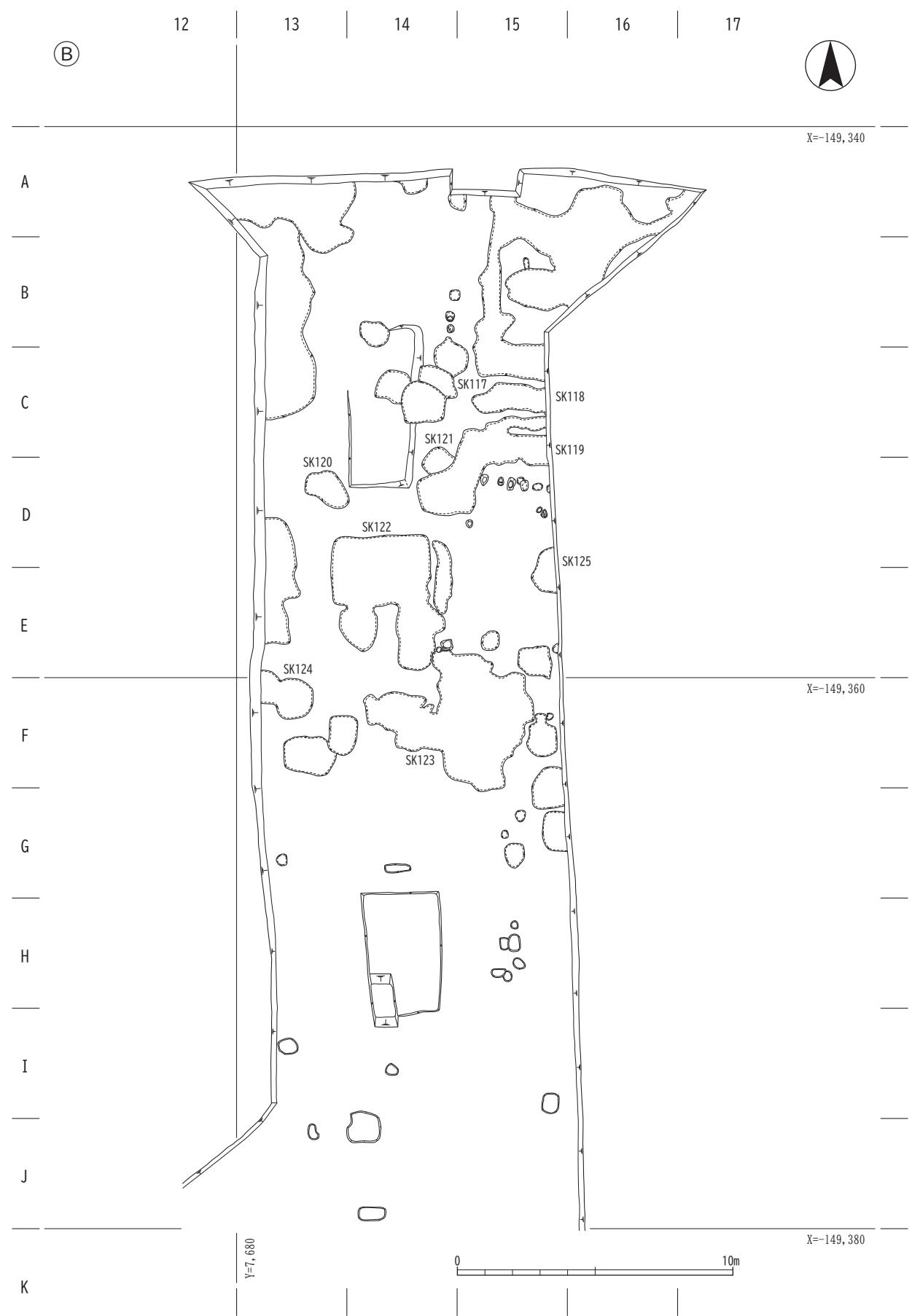
第13図 2区c土層断面図 (1:100)



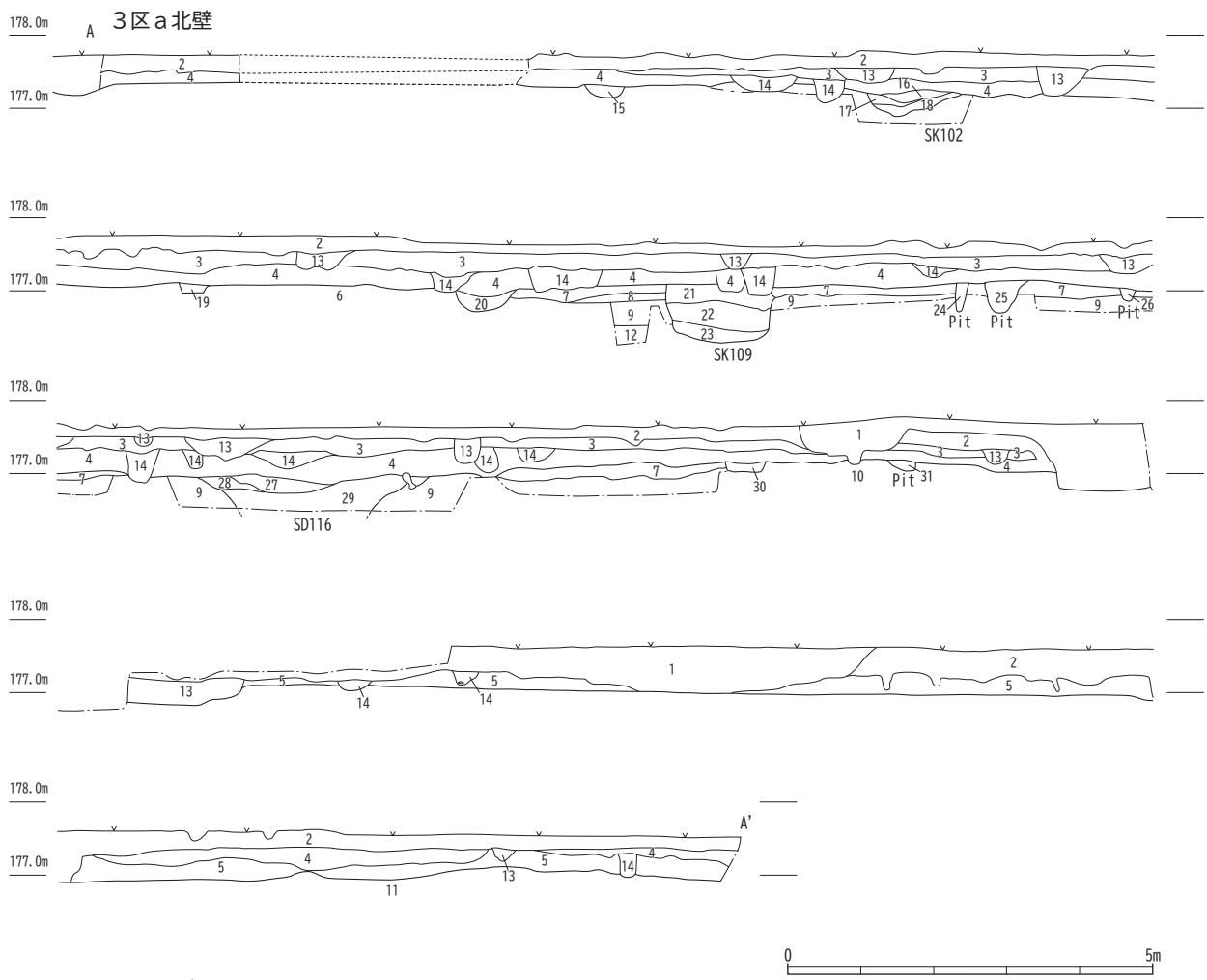
第14図 3区a遺構全体図① (1:200)



第15図 3区a遺構全体図② (1:200)

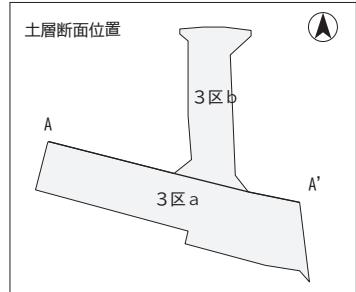


第16図 3区b遺構全体図 (1:200)



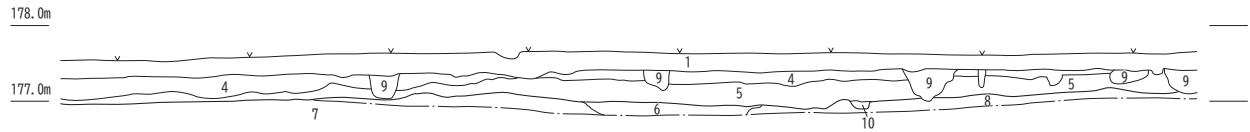
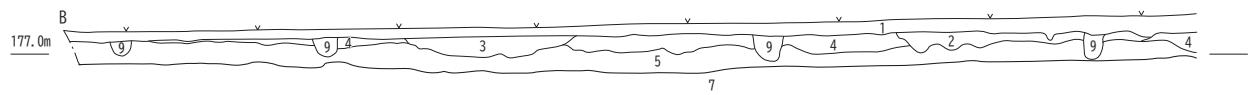
<3区a北壁> A-A'

1. [現代盛土]
2. 10YR3/2黒褐色砂質シルト [現代畑作土]
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト
4. 10YR4/6明黄褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混成土
(強く土壤化)
5. 10YR3/3暗褐色砂質シルト (10YR4/3にぶい黄褐色シルト50%混)
6. 7.5VR5/3にぶい褐色砂質シルト
7. 7.5VR3/4暗褐色シルト (10YR3/4暗褐色シルト20%混)
8. 7.5VR3/2黒褐色砂質シルト (10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト20%混) [基盤層]
9. 10YR3/3暗褐色シルト [基盤層]
10. 7.5VR3/3暗褐色砂質シルト (10YR3/2黒褐色砂質シルト10%混)
11. 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂シルト
12. 10YR3/3暗褐色細砂
13. [攪乱]
14. 10YR4/3暗褐色砂質シルト～2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト [近世遺構]
15. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (炭1%混) [SK]
16. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (締まりあり)
17. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (炭5%、焼土少量混) [SK102]
18. 7.5VR4/3褐色砂質シルト (焼土30%、炭5%混)
19. 10YR3/3暗褐色砂質シルト (10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、炭少量混)
20. 7.5VR3/2黒褐色砂質シルト (7.5VR4/3褐色砂質シルト10%、炭少量混)
[SK]
21. 7.5VR3/3暗褐色砂質シルト (7.5VR4/3褐色細砂20%、炭少量混)
22. 10YR3/3暗褐色砂質シルト (締まりなし、炭少量混) [SK109]
23. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト (炭少量混)
24. 10YR3/3暗褐色砂質シルト (7.5VR4/3褐色砂質シルト5%混) [Pit]
25. 10YR3/3暗褐色砂質シルト (7.5VR4/3褐色砂質シルト5%混) [Pit]
26. 10YR4/3暗褐色砂質シルト (10YR3/3暗褐色砂質シルト20%混) [Pit]
27. 10YR2/3黒褐色細砂 (10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト10%混)
28. 7.5VR黑褐色細砂 (10YR5/2灰黄褐色砂質シルトブロック20%混)
29. 7.5VR3/2黒褐色砂質シルト (10YR2/2黒褐色砂質シルトブロック20%混)
30. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト20%混) [SK]
31. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト20%混) [Pit]

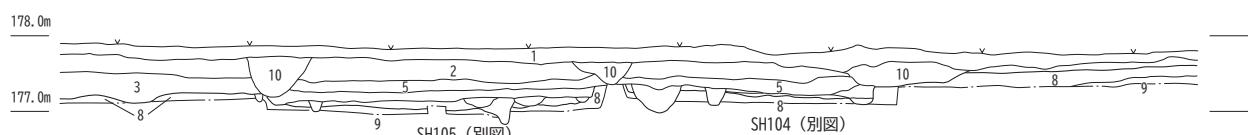
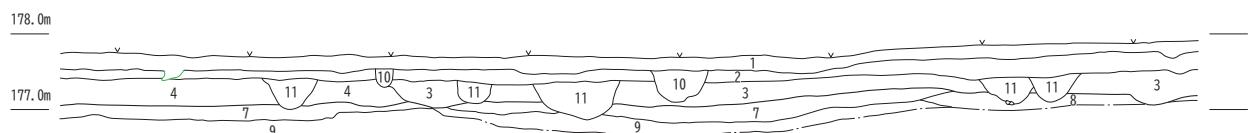
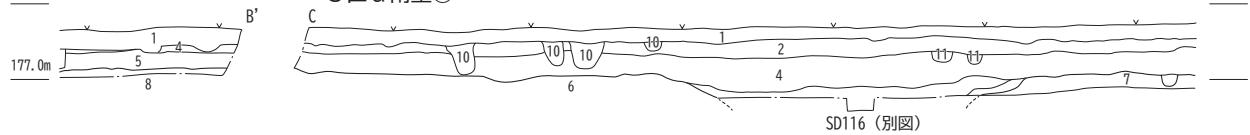


第17図 3区a北壁土層断面図 (1:100)

178.0m 3区a南壁①

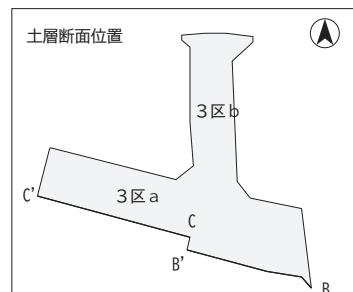


178.0m 3区a南壁②



<3区a南壁①> B-B'

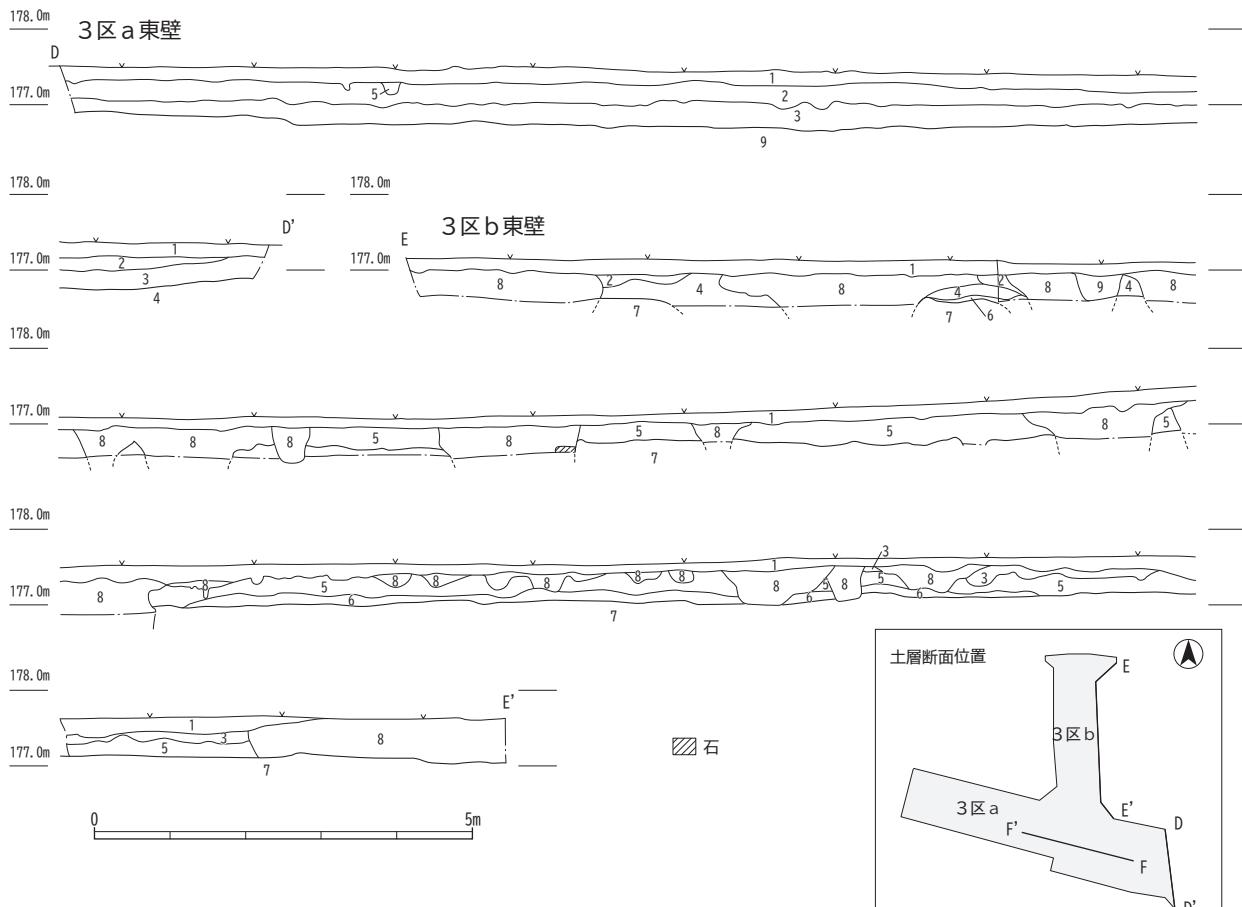
1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト〔現代畑作土〕
2. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト（径3mm以下の礫少量混）
3. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色シルト5%混）
4. 10YR6/6明黄褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混成土（強く土壤化）
5. 10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色シルト30%混）
6. 7.5Y3/2黒褐色砂質シルト
〔10YR4/2灰黄褐色砂質シルト20%混、土壤化著しい〕
7. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト
8. 7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト
9. 【擾乱】
10. 7.5YR4/3褐色砂質シルト〔Pit〕



<3区a南壁②> C-C'

1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト〔現代畑作土〕
2. 10YR6/6明褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混成土（強く土壤化）
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト（炭少量混）
4. 10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト10%混）
5. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
6. 7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト
7. 7.5YR4/2灰褐色砂質シルト（強く土壤化）
8. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト（強く土壤化）
9. 7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト（ややしまる）
10. 【擾乱】
11. 10YR3/3暗褐色砂質シルト～2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト〔近世遺構〕

第18図 3区a南壁土層断面図 (1:100)



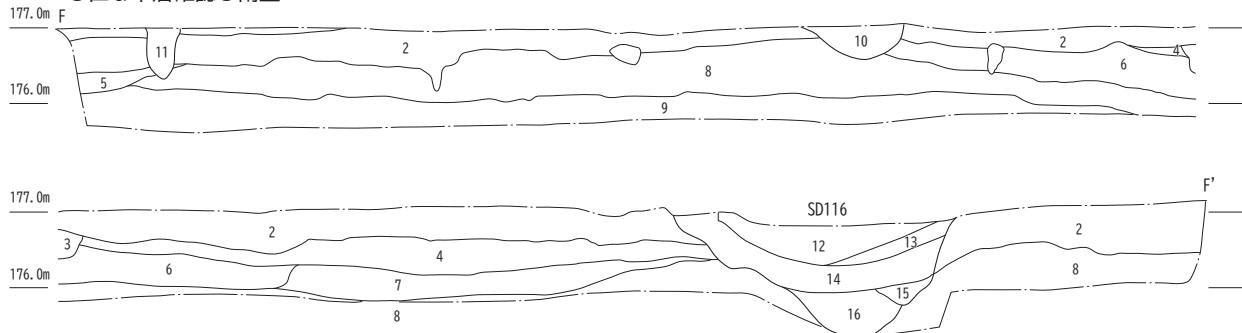
<3区a東壁> D-D'

1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト〔現代畑作土〕
2. 10YR6/4明黄褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混成土
(強く土壤化)
3. 10YR3/3暗褐色砂質シルト (10YR4/3にぶい黄褐色シルト30%混)
4. 2,5Y4/4オリーブ褐色シルト〔基盤層〕
5. 2,5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト (炭少量混) [攪乱]

<3区b東壁> E-E'

1. 10YR3/4暗褐色砂質シルト〔現代畑作土〕
2. 7,5YR4/2灰褐色シルト 3. 10Y5/1灰色シルト 4. 5Y4/1灰色シルト
5. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト (10YR7/1灰色シルト10%混)
6. 5Y4/1灰色シルト
7. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト〔基盤層〕
8. [攪乱]

3区a下層確認3南壁

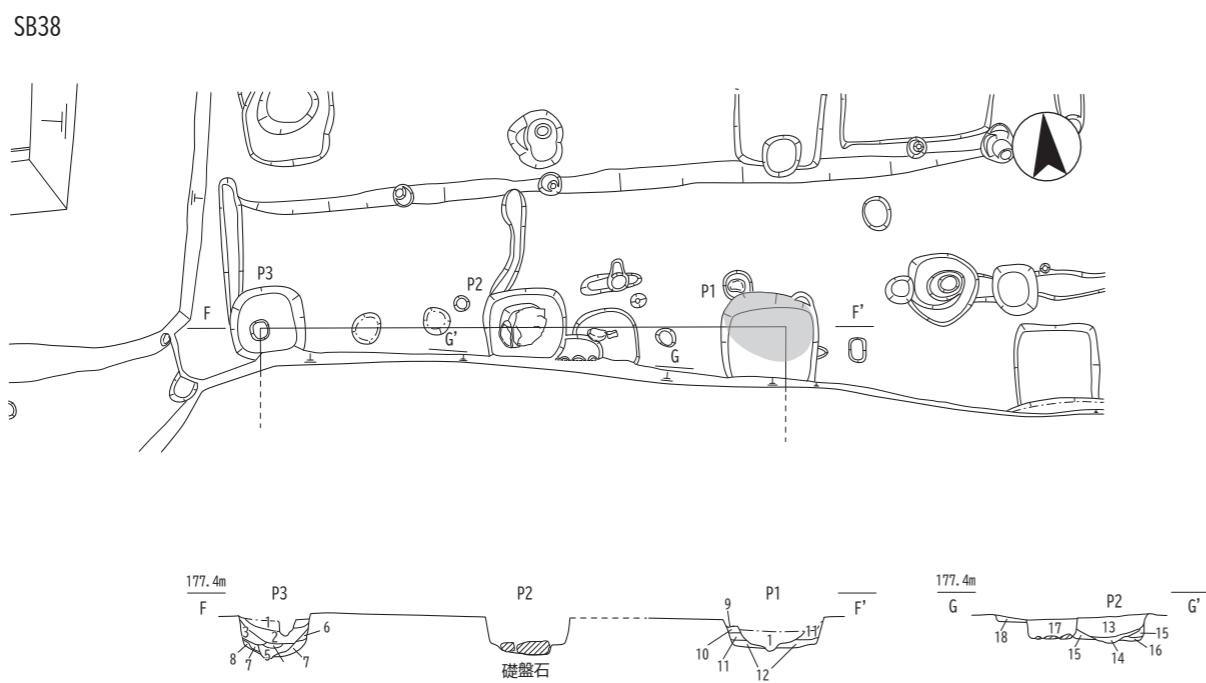
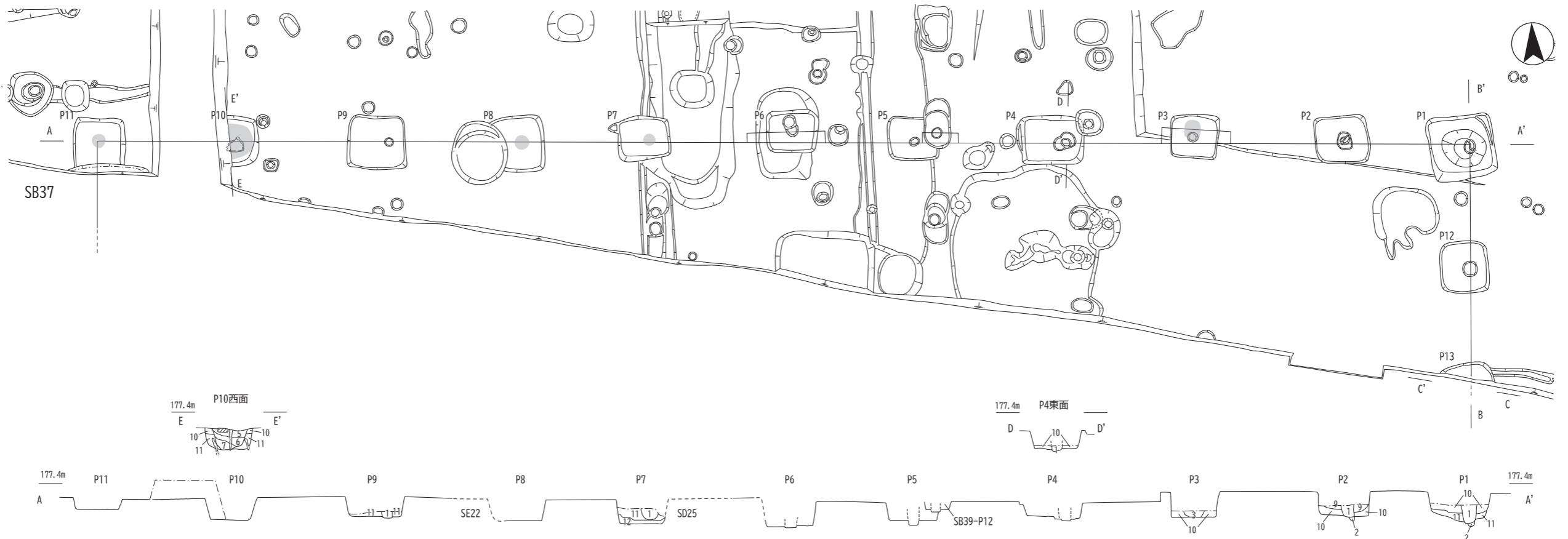


<3区a下層確認3南壁> F-F'

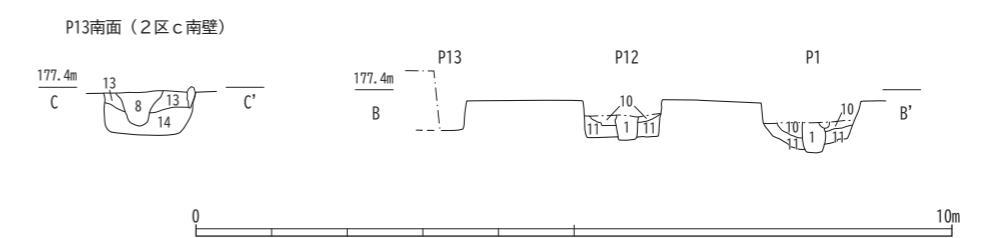
1. 2,5Y4/6オリーブ褐色砂質シルト～シルト (しまりあり)
2. 7,5YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト
3. 10YR4/6褐色細砂
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
5. 10YR4/4褐色砂質シルト (10YR5/4にぶい黄褐色細砂10%混)
6. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト (径10cm弱の礫少量混)
7. 2,5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト
8. 2,5Y5/3黄褐色細砂と10YR5/4にぶい黄褐色シルトの互層
9. 8に拳大礫混じる
10. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (径5mm以下の礫2%混)

11. 2,5YR3/3暗オリーブ褐色砂質シルト (2,5Y5/3黄褐色細砂5%混)
12. 10YR3/2黒褐色細砂 (10YR4/3オリーブ褐色砂質シルト10%混)
13. 7,5YR3/2黒褐色極細砂 (10YR5/2灰黄褐色砂質シルトブロック20%混)
14. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (細砂10%混)
15. 2,5Y5/4黄褐色細砂～中粒砂 (径5mm以下の礫少量混)
16. 10YR4/2灰黄褐色シルト (細砂20%混)

第19図 3区a・b東壁土層断面図、3区a下層確認3土層断面図 (1:100)



- <SB38> F-F'
- 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混)
 - 10YR6/6明黄褐色シルト (褐灰色シルトブロック10%混)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混)
 - 10YR6/6明黄褐色シルト (褐灰色シルトブロック10%混)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混、締まり弱い)
 - 10YR6/6明黄褐色シルト (褐灰色シルトブロック50%混)
 - 10YR4/1褐灰色シルト (明黄褐色シルトブロック50%混)
 - 10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (ブロック土含まず)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック10%混)
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色砂質シルトブロック10%混)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色砂質シルトブロック10%混)
- [柱抜取痕] [掘方埋土]
- <SB38-P2 (2区c南壁)> G-G'
- 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色シルトブロック20%混)
 - 10YR4/1褐灰色シルト (ラミナ状)
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色シルトブロック20%混) [別Pit]
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色シルトブロック20%混) [別Pit]
- [柱抜取痕] [掘方埋土]



- <SB37> A-A' B-B' C-C' D-D' E-E'
- 10YR3/2黒褐色砂質シルト～極細砂 [柱痕]
 - 2, 5Y7/3浅黄色粘土質シルト (やや締まる) [柱あたり]
 - 10YR4/2灰黄褐色細砂 (柱大～径10cm大の礫合)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色砂質シルトブロック30%混)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混)
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色砂質シルトブロック30%混)
 - 10YR3/2黑褐色砂質シルト (柱痕または抜取痕)
 - 10YR3/1黑褐色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混)
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色砂質シルトブロック30%混)
 - 10YR4/1褐灰色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混)
 - 10YR6/6明黄褐色砂質シルト (褐灰色砂質シルトブロック30%混)
 - 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト (明黄褐色シルトブロック30%混)
 - 10YR5/4にぶい黄褐色極細砂
- [柱抜取痕] [掘方埋土]

第20図 SB 37・38 (1:100)

られた。古代・中世の遺構検出に支障のなかった攪乱は、段下げにとどめ完掘していない。

2区cで下層確認を実施したが、遺構・遺物はみられなかった（下層確認2）。

（3）3区

3区は運土の関係上、3区aの調査を先行し、b区へと移行した（第14～16図）。3区aは標高176.8～177.6mで基盤層（基本層序Ⅲ層）に達し、この上面で古代・中世の遺構を検出した（第17～19図）。3区bは標高176.6～177.1mで基盤層（基本層序Ⅲ層）に達するが、近世以降の攪乱が非常に多く、古代・中世の遺構は確認できなかった。基盤層は西から東へ、南から北へ向かって低くなり、遺物包含層（基本層序Ⅱ層）も2区に比べ厚くなっている（第19図）。

古代の遺構は、3区a南西の竪穴建物3棟（SH101・104・105）である。

中世の遺構は、SD116以西に分布している。また、SD116西側に、円筒形・隅丸方形の土坑（水溜状の野井戸か）が南北方向に連なっており、付近に耕地の地境があったと推測される。また、3区a北側は中世のピットが多くみられたことから、付近に中世の掘立柱建物が存在した可能性が高い。

近世以降の攪乱は検出にとどめ完掘していない。3区aで下層確認を実施したが、SD116以外の遺構・遺物はみられなかった（下層確認3）。

3. 遺構

以下、遺構種別、遺構番号順に記述する。遺構の大きさなどの詳細は、末尾の遺構一覧表（第5表）に記した。

建物の軸方向は、座標北からの東西偏角で示した（例：N6° E、N84° W）。棟方向は東西棟、南北棟などと呼称する。奈良時代建物を記述する際の造営尺は天平尺（29.6cm）により、「約10尺」などと記す。

（1）掘立柱建物・柵

SB37（第20図、写真図版9～12） 2区c南壁付近で検出した古代の大型建物である。桁行10間（長さ29.5m）、梁行2間（幅5.0m）以上の長舎形式で、東西軸N87° W（南北軸N3° E）の東西棟

である。

調査区内では庇や足場などの付属・付帯施設は確認できない。南東隅のピット（P13）の西側で、調査区南壁を用地境界ぎわまで拡張し精査したが、南側柱のピットは確認できなかった。現状では、梁行3間ないしそれ以上の規模の可能性が高いといえよう。また、同位置・同主軸での建替えではなく、比較的短期間で廃絶した建物と推測される。SB37の廃絶後、SB39が造営される。柱痕跡等から復元される柱間寸法は3.0m（約10尺）等間で、P1-P2間のみ約2.7mと狭い。

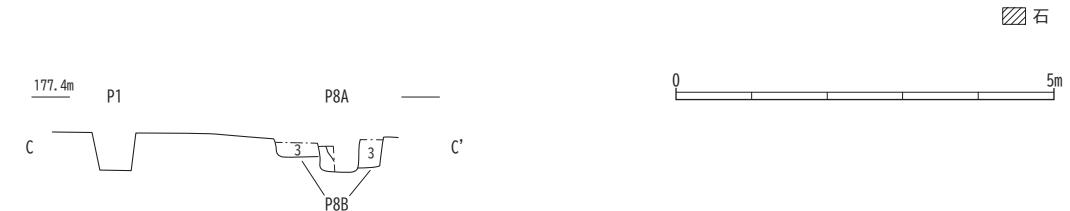
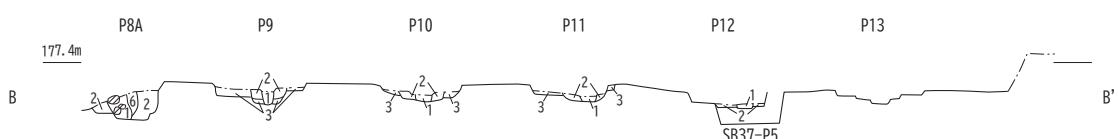
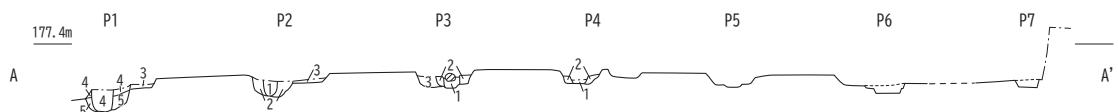
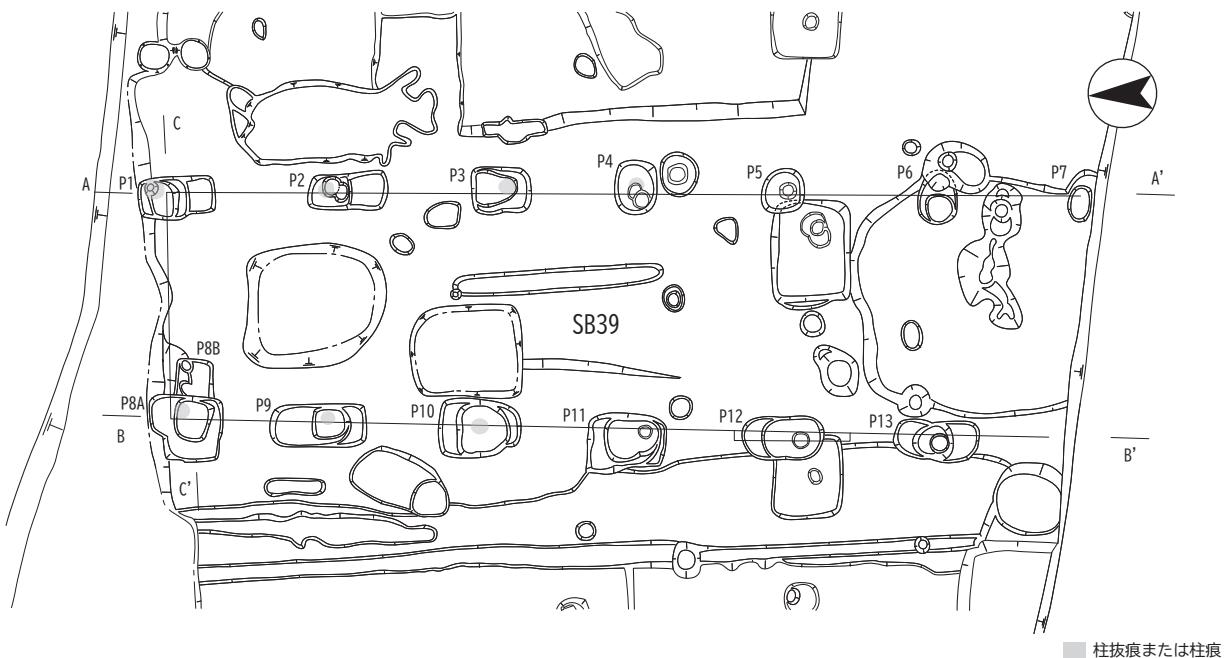
ピット（P1～P13）は一辺1.1～1.5mの方形で、特に隅柱のピット（P1）が大きい。ピットの深さは約30～70cmで、西側のピットが比較的浅い傾向がある。

柱が抜き取られたことが確実なのはP3・P10・P13で、抜取痕は掘方を大きく壊さない程度のものである。P3からP9は、埋土が砂質であることや、上方から微細な根が多く逡巡していた影響で、柱痕跡ないし柱抜取痕の識別が非常に困難であった。このため、掘方底面付近で柱痕跡ないし柱あたりを検出したものが多い。他に、P1・P2・P12などで直径20～30cmの柱痕跡（P1：25～30cm、P2：25cm、P12：25cm）を確認しており、柱の太さは直径25cm程度と考えられ、掘方の大きさに比して特段に大きいものではないといえよう。なお、P1・P2・P12なども柱抜き取り時に掘方下部を壊さず抜き取られた可能性がある。礎板等の痕跡は認められなかったが、P10で抜取穴上層から板石が出土しており、局所的に礎盤（板）石が敷かれた可能性がある。

掘方埋土は、黒褐色・褐灰色・明黄褐色土が互層をなしていた（P1・P2など）。

ピットから遺物は出土しなかったため、P1・P12掘方埋土中の炭化材を年代測定に供したが、基盤層や表土由来の炭化材が埋土に混入していたと推定された。また、P1・P5・P12掘方下層埋土を土壤分析に供し、古植生に関する資料を得た（第V章、写真図版29）。

SB38（第20図、写真図版16・17） 2区bの南壁付近で検出した古代の大型建物で、梁行2間（幅7.0m）、南北軸N6° E（東西軸N84° W）の南北棟



- <SB39> A-A' B-B' C-C'
1. 10YR3/1黒褐色砂質シルト〔柱痕または柱抜取痕〕
 2. 10YR4/1褐灰色砂質シルト(明黄褐色砂質シルトブロック30%混)
 3. 10YR4/1褐灰色砂質シルト(明黄褐色砂質シルトブロック50%混)
 4. 10YR4/1褐灰色砂質シルト(明黄褐色砂質シルトブロック30%混、焼土、炭まばら)
 5. 10YR4/1褐灰色砂質シルト(明黄褐色砂質シルトブロック50%混、焼土、炭まばら)
 6. 10YR3/1黒褐色砂質シルト(明黄褐色シルトブロック30%混)〔柱抜取痕か〕
- 〔掘方埋土〕

第21図 SB 39 (1:100)

である。

S B 38 の主軸は S B 37 主軸に対して直交し、2棟で L字状を呈するが、両ピット掘方の間隔は約 2.6 m しかなく、S B 37・S B 38 が同時に存在した切妻建物の場合、S B 38 の屋根軒先と、S B 37 のケラバの出が干渉する可能性がある。屋根形式によつては、S B 37・S B 38 は L字状に配された一連の建物である可能性も否定できないが、現状では、S B 37 とは別時期の建物と考えておく。

ピット掘方はいずれも柱の抜き取りによって若干外縁が広がり、一辺 90 cm～1.4 m の隅丸方形状を呈する。ピットの深さは 30～50 cm で、P2 では、掘方底面に長さ 40～50 cm、厚さ 10～20 cm の板石を 2 枚敷いて礎盤（板）石としていた。ピットの基盤層は砂質のシルトで、礎盤石のない S B 37・39 付近の基盤層と大きな土質の差はないことから、S B 38 の上屋重量は両建物に比べて相対的に重たかった可能性がある。

柱抜取穴の規模（長径）は P1：1.2 m、P2：約 1.0 m、P3：90 cm である。掘方の芯心間から推定される柱間寸法は 3.3 m（約 11 尺）等間である。掘方埋土は、褐灰色・明黄褐色土が互層となっている。

S B 38-P2 は、別の円形ピットが 2 基重複しており、付近に後出の掘立柱建物が存在したようであるが、P1・P3 の状況から、同位置での建替えではなく、比較的短期間で廃絶した建物と推測される。

ピットから遺物は出土しておらず、詳細な造営年代は不明である。なお、P1 掘方下層埋土を土壤分析に供し、古植生に関する資料を得た（第 V 章、写真図版 29）。

S B 39（第 21 図、写真図版 13～15）2 区 c 中央、A-22 ラインで検出した古代の掘立柱建物で、S B 37 より後出の建物である。桁行 6 間以上（長さ 12.0 m）、梁行 1 間（幅 3.0 m）の長舎形式で、南北軸 N3° E の南北棟である。庇や足場などの付属・付帯施設は確認できない。

ピット（P1～P13）は長さ 1.1～1.5 m、幅 60～80 cm の隅丸方形であるが、各ピットは重複しており、S B 39 は同位置で 1～2 度建て替えられたとみられる（以後、建て替え後のピットを P1A、建て替え前を P1B などと呼称）。このうち、西側柱

の P8・P13 は確実に 2 回掘り直されている。また、P9B・P11B は掘方底面の高さが南北で異なり、南側がより浅い。階段状の掘方ないし複数回の掘り直しの結果とみられる。

ピットの残存深さは約 20 cm で、建物付近は一定削平されているようである。北側の P1・P8 のみ約 40 cm と深い。また、建て替え後のピットが建て替え前より深くなっている。

柱芯心間の柱間寸法は 2.1 m（約 7 尺）等間で、P3-P4 間のみ約 1.6 m と狭い。建て替え後のピットで確認した柱痕跡は直径 20 cm 前後である。柱抜取痕は P8A で確認できるが、柱痕跡がやや大きい P1A や、埋土上位に石がある P3A も柱を抜き取った可能性がある。礎板の痕跡は認められなかった。掘方埋土は、ブロック土混じりの褐灰色砂質シルトである。

P1A 柱痕から須恵器杯または椀（77）、P8B 掘方から土師器甕（78）の小片が出土した。これらから、S B 39 は奈良時代の建物と推測されるが、詳細な時期比定は困難である。

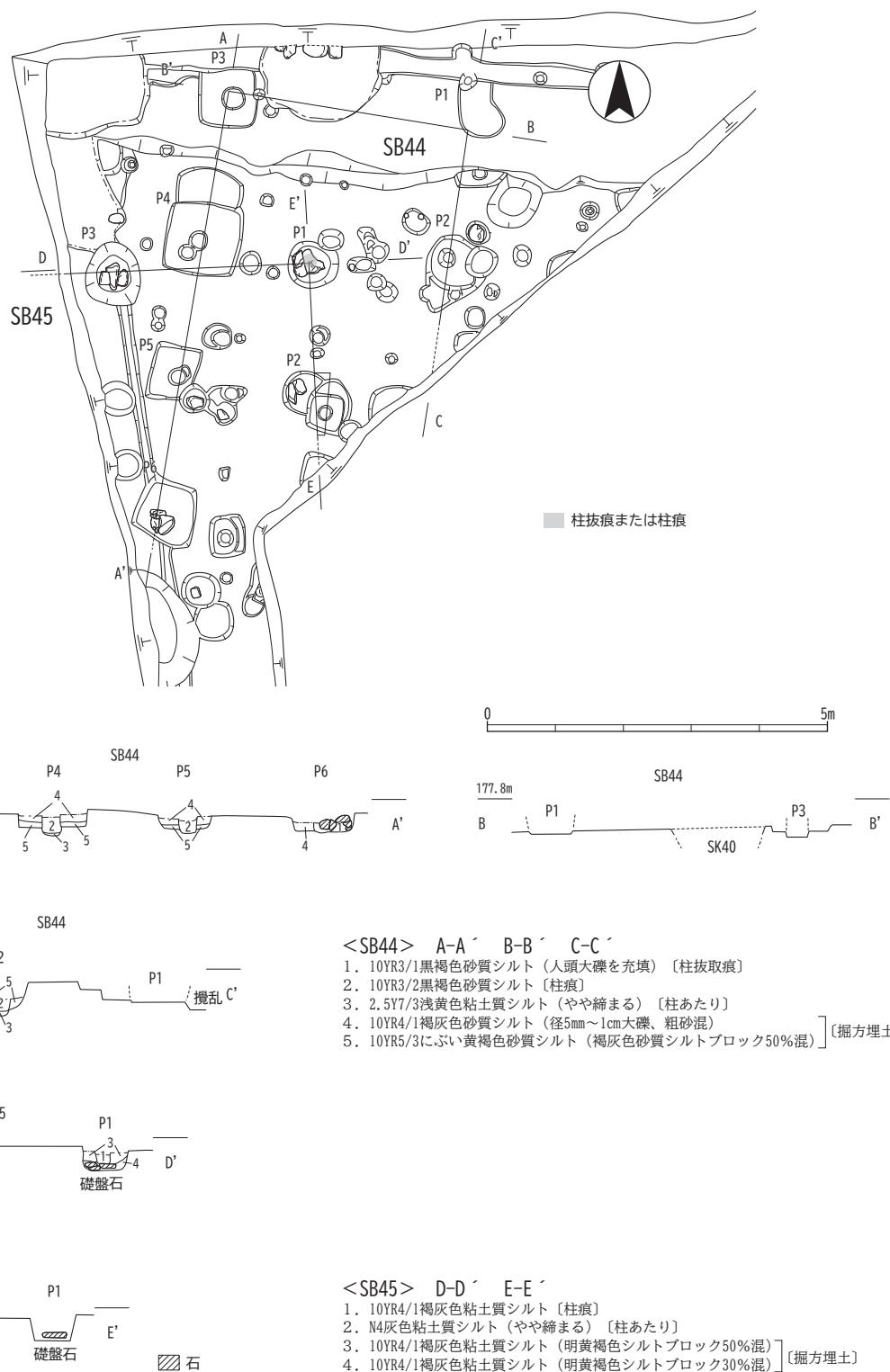
なお、P1B 埋土は炭化材を多く含んでいたため、年代測定を実施したが、基盤層や表土由来の炭化材が埋土に混入していたと推定された（第 V 章）。

S B 44（第 22 図、写真図版 18～20）2 区 b 西半で検出した古代の大型建物である。桁行 3 間（長さ 6.5 m）以上、梁行 1 間（幅 3.7 m）で、南北軸 N10° E の南北棟としているが、西側柱列（P3～P6）が方形のピットであるのに対し、東側柱 P1 が不鮮明なピットで、P2 も不整形なピットであることから、身舎の柱列は調査区外の西側に展開する可能性がある。P6 より南のピットは中世の土坑 SK 42 があるため確認できない。

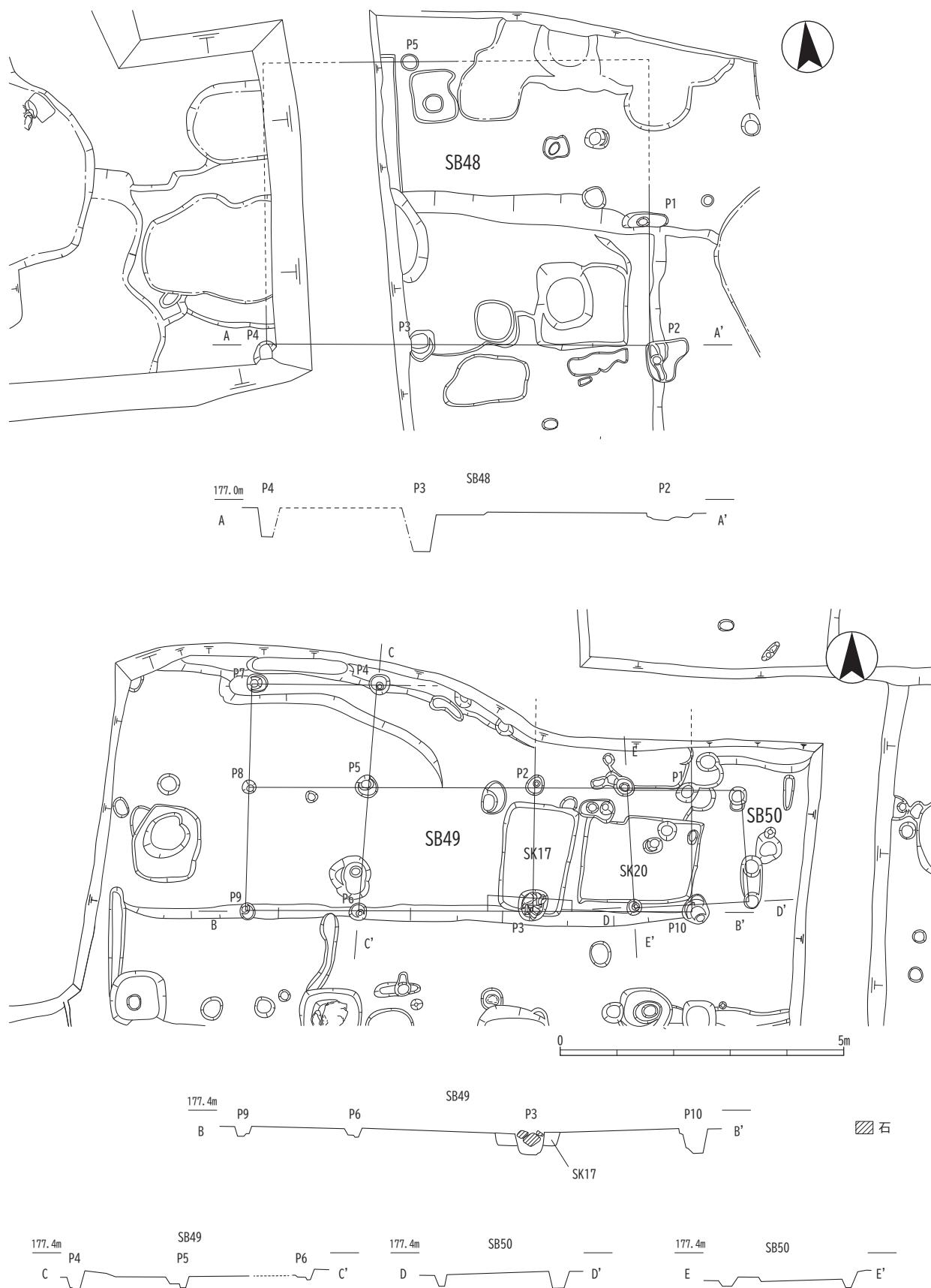
同位置での建替えではなく、比較的短期間で廃絶した建物と推測される。西側柱列の柱痕跡から復元される柱間寸法は 2.1 m（約 7 尺）等間である。

西側柱列のピットは一辺 80 cm～1.1 m の方形で、特に P4 が大きい。ピットの深さは約 20 cm で、S B 44 周辺は基盤層が大きく削平されていることがうかがえる。P2 のみ、深さ約 40 cm である。

P6 は柱が抜き取られ、礎が廃棄されていた。P3・P4・P5 で直径 20 cm 前後の柱痕跡（P3：18 cm、P4：21 cm、P5：22 cm）を確認している。礎板の痕跡は



第22図 SB 44・45 (1:100)



第23図 SB 48～50 (1:100)

認められなかつたが、P6 は礎盤石があつた可能性もあるう。

掘方埋土は、褐灰色・明黄褐色土が互層をなしてゐた。なお、2区b南壁断面では、他にも掘方埋土が互層となる大型ピットを複数確認している。

P4 から須恵器甕の口縁部片(85)が出土しており、SB 44 は奈良時代の建物と推測されるが、詳細な時期比定は困難である。

S B 45 (第22図、写真図版18~20) 2区b西半で検出した古代の掘立柱建物である。SB 44 と重複する位置にあるが、ピットの切り合ひはなく、直接的な先後関係は不明である。調査区内で梁行・桁行1間分の南北・東西柱列を検出した。南北軸はN3°Wである。

ピットは直径70~90cmの楕円形で、深さは35~50cmである。北側柱列のP1・P3では、縦長の礎

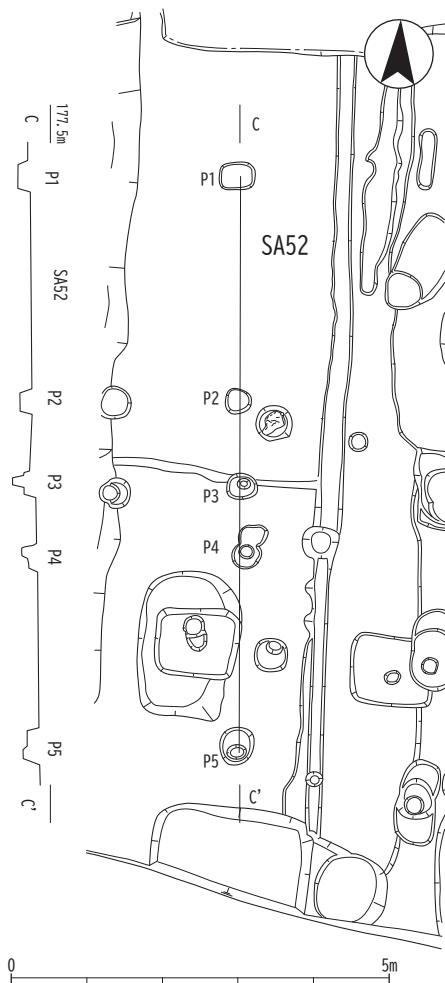
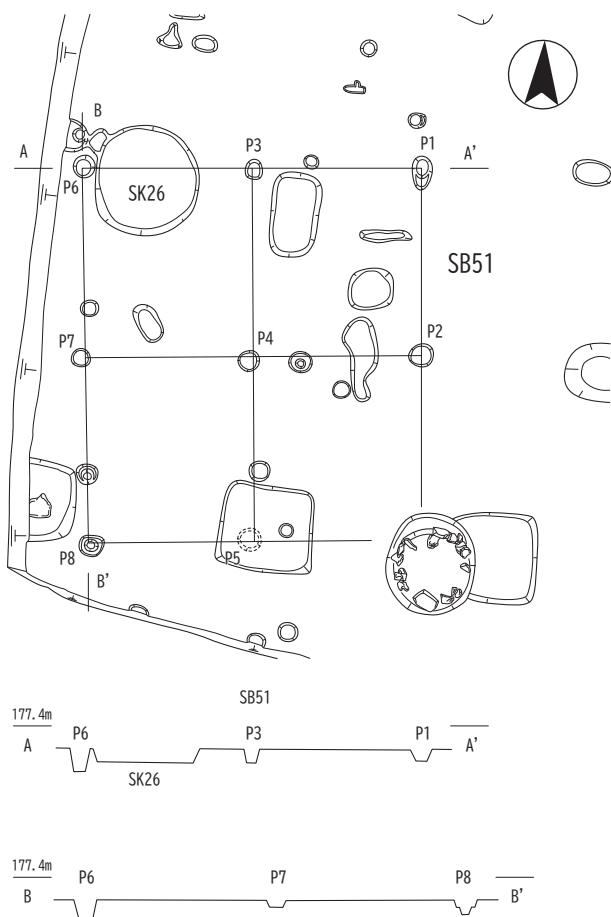
を3個敷いて礎盤石としている。P2 は複数のピットが重複しており、うち1基に礎が廃棄されていたことから、P1などと同じく礎盤石があつた可能性がある。

北側柱列 P1-P3 間から復元される柱間寸法は2.7m(約9尺)であるが、東側柱列 P1-P2 間は2.1m(約7尺)とやや短い。P1・P2 で直径20cmの柱痕跡を確認している。

P1・P3 の状況から、同位置での建替えはなく、比較的短期間で廃絶した建物と推測される。また、建物主軸やピット掘方の大きさ・平面形が SB37・38・39・44 とは大きく異なることから、これらとは別時期の建物である可能性が高い。

ピット内から古代の遺物は出土しておらず、詳細な時期比定は困難である。

S B 48 (第23図、写真図版21) 2区a南東から



第24図 S B 51、S A 52 (1:100)

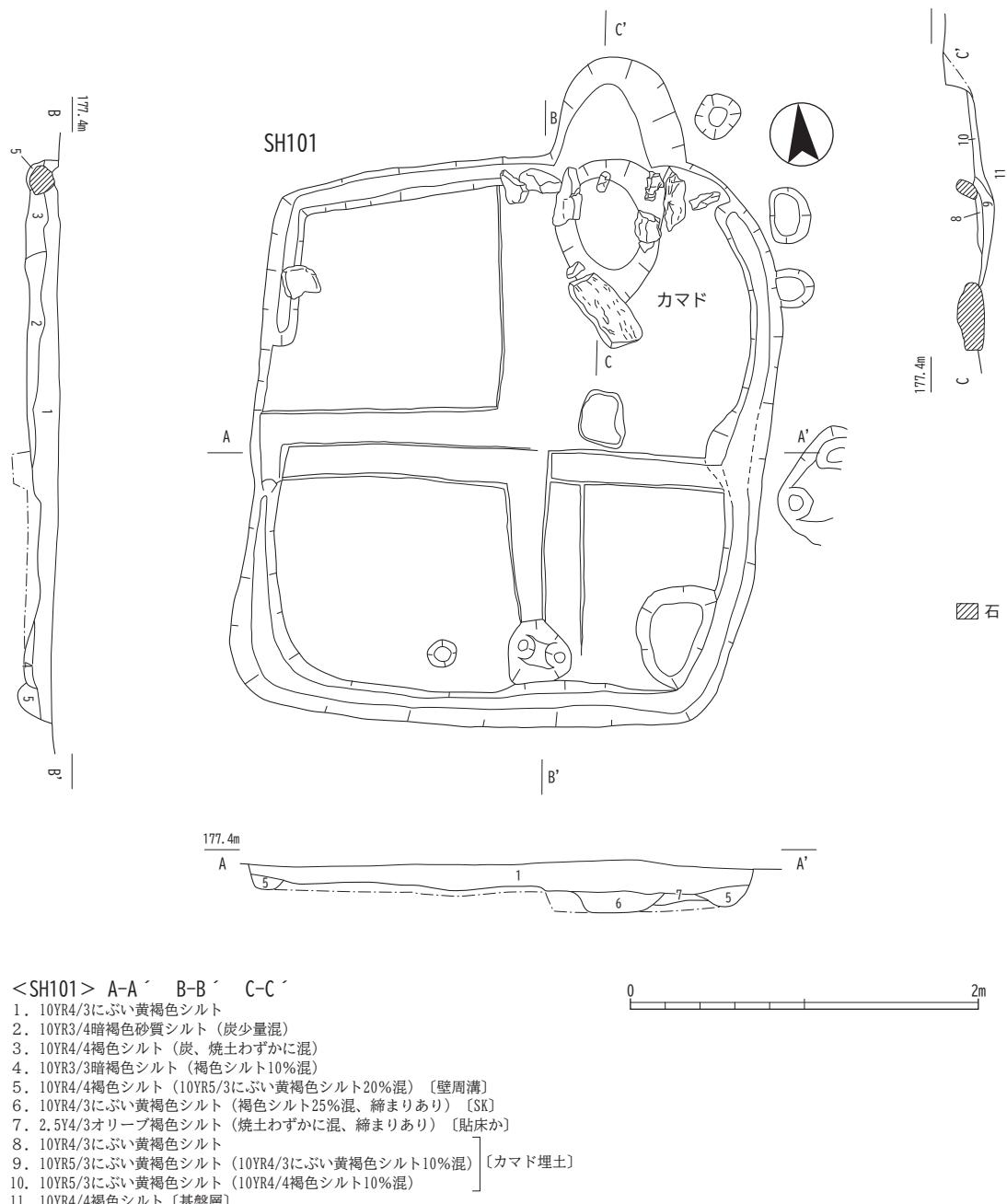
2区c北西にかけて検出した中世の掘立柱建物である。この周辺は、近世以降の水田や搅乱により削平・滅失しており、建物プランは不確実であるが、桁行3間、梁行2間程度で、南北軸N5°E(東西軸N85°W)の東西棟と推測される。ピットは直径30~50cmの円形で、深さは10~60cmである。柱間寸法は、南側柱列が2.7m、東側柱列が2.4mである。

各ピットから、平安時代末から鎌倉時代の土器器皿や鍋、瓦器小片などが出土した。

S B 49(第23図、写真図版21) 2区b東半で検

出した中世の総柱建物である。桁行3間(長さ7.8m)、梁行2間(幅4.0m)以上、南北軸N2°E(東西軸N88°W)の東西棟で、建物南東隅に2基の方形土坑(SK 17・20)がある。今回検出した中世の建物では比較的規模が大きい。

柱間寸法は1.8、2.1、2.7mと様々である。ピットは直径20~35cmの円形で、ピットの深さは20~40cmである。柱痕跡・柱あたりは直径15~20cmで、P3は柱が抜き取られ、礫が廃棄されていた。同位置での建替えはない。



第25図 SH 101 (1:40)

S K 17 は深さ 20cm、S K 20 は深さ 10cm の浅い土坑である（第 29 図）。

各ピットや S K 17・20 から、平安時代末から鎌倉時代の土師器、瓦器、瓦、土錐が出土した。

S B 50（第 23 図、写真図版 21）2 区 b 東半で検出した中世の掘立柱建物で、S B 49 と重なる梁・桁行 1 間の建物である。S B 49 の底や間仕切りの可能性もあるが、S B 50 南西のピットが S B 49 南東隅土坑（S K 20）と切り合い、S B 50 ピットがより後出であることから、S B 49 とは別の建物と推測される。

建物主軸は南北軸 N3° W で、柱間寸法は 2.1 m である。ピットは直径 20 ~ 25cm の円形で、ピットの深さは 15 ~ 25 cm である。

各ピットから、平安時代末から鎌倉時代の瓦器が出土した。

S B 51（第 24 図、写真図版 21）2 区 c 南西で検出した中世の総柱建物で、梁・桁行 2 間（長さ 5.0 m、幅 4.5 m）、南北軸 N4° W の南北棟である。建物北西側に円形の土坑（S K 26）がある。

柱間寸法は 2.1 m、2.4 m である。ピットは直径 20 ~ 30cm の円形で、ピットの深さは 15 ~ 30 cm である。

各ピットから、平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

S A 52（第 24 図）2 区 c 中央、A-H21 グリッド付近で検出した中世の柵である。南北方向（N2° W）に柱 4 間分（長さ 7.6 m）あり、柱間はやや不揃いである。

S D 23・24・25 と平行しており、これらとともに土地を区画する柵であったと推測される。

（2）竪穴建物

S H 101（第 25 図、写真図版 22）3 区 a 南西で検出した奈良時代の竪穴建物で、主軸は南北軸 N5° E、長さ 3.1 m、幅 3.0 m、深さ 20 cm を測る。壁周溝は幅 20 ~ 30cm、深さ 5 ~ 10cm である。

貼床（7 層）は東側にごく局所的にみられ、床面の硬化は不明瞭である。主柱穴は確認できなかった。

カマドは建物内北東側にあったとみられ、支柱等に用いられた棒状の礫や焼土が散乱していた。

建物埋土から奈良時代の土師器皿や須恵器杯、カ

マド埋土から土師器甕が出土している。

S H 104（第 26 図、写真図版 22・23）3 区 a 南西で検出した奈良時代の竪穴建物で、主軸は概ね正方位で、長さ 3.1 m、深さ 20 cm を測る。壁周溝は幅 20cm、深さ 5 ~ 10cm で、東側に建て替えないし拡張した痕跡が認められる。貼床（3 層）は主に西側にみられ、硬化面は不明瞭である。主柱穴は確認できなかった。

埋土から奈良時代の土師器が出土している。

S H 105（第 27 図、写真図版 22・23）3 区 a 南西で検出した奈良時代の竪穴建物で、主軸は概ね正方位、長さ 4.4 m、深さ 20 cm を測り、付近の竪穴建物群の中では最も大型のものである。

貼床（7・18 層）は他の 2 棟よりもやや厚く、床全面にみられるが、床面の硬化は不明瞭であった。内部に複数のピットがあるが、主柱穴は明確でない。

カマドは建物内東側にあったとみられ、浅い土坑状の残穴内に支柱等に用いられた棒状の礫や焼土が散乱していた。屋内南側には、土坑（S K 112）がみられる。建物埋土から奈良時代の土師器や須恵器が出土している。

（3）土坑・井戸

S K 1（第 28 図、写真図版 24）2 区 a 北側、A-D13 グリッドで検出した不整形な土坑で、長径 1.3m、短径 80cm、深さ 20cm を測る。

埋土は褐色系の砂質シルト・シルトで、遺物は出土しなかったが、埋土の色調から中世以前の遺構である可能性がある。

S K 4~9（第 28 図、写真図版 24）2 区 a 北側で検出した近世の土坑群である。S K 7 のみ長径 2.0 m、短径 1.2m の隅丸方形であるが、他はいずれも直径 1 m 前後の円形・不整円形である。

検出面からの深さは 10cm 前後で、ブロック土混じりの褐灰色シルトで埋没する。S K 7 は、掘方の外側に白色の粘土（5 層）を貼り付けていた。

これら遺構の一帯は基盤層が大きく削平されていたが、本来は S E 22 や S K 107 のような深さのある円筒形の土坑や水溜であったと推測される。S K 7 は木棺墓等の可能性も考慮し精査したが、有機質の枠を据えた痕跡は認められなかった。

各遺構の埋土から、近世の陶器片、S K 7 からは

18世紀末頃の肥前系磁器が出土した。

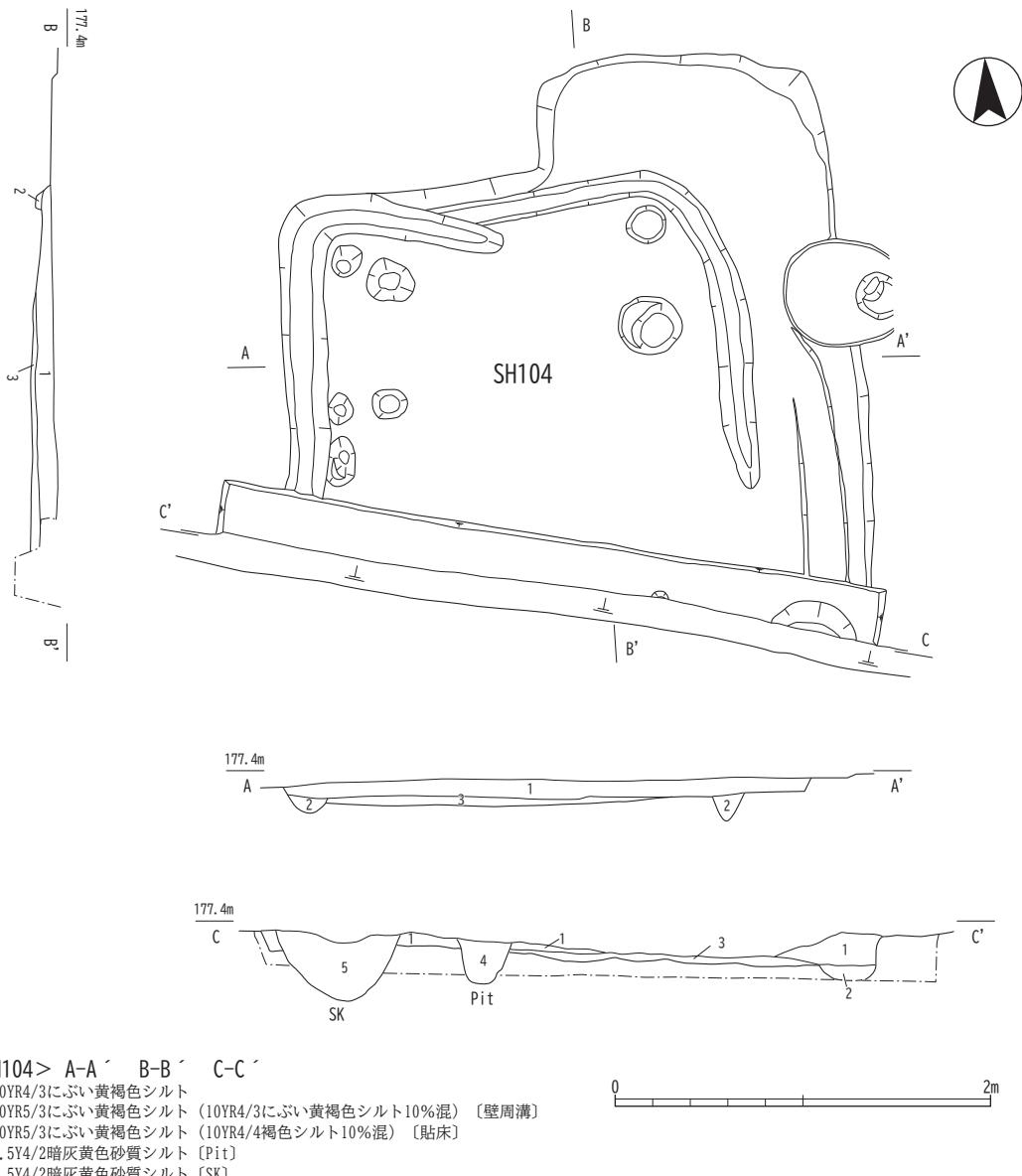
S K 13・14（第28図、写真図版24）2区a南側で検出した近世の土坑で、SK 13がSK 14より後出の遺構である。SK 13は直径1.8m、深さ10cmの不整円形で、SK 14は長径1.8m、短径1.0m、深さ35cmの隅丸方形である。SK 14の西側は一段深くなっている。両遺構とも、ブロック土混じりの褐灰色・黄褐色シルトで埋没する。近世の陶磁器片が出土した。

S K 16（第29図、写真図版24）2区b東半、A-H14・15グリッドで検出した不整形な土坑で、長径1.4m、短径1.2m、深さ40cmを測る。掘方は北側

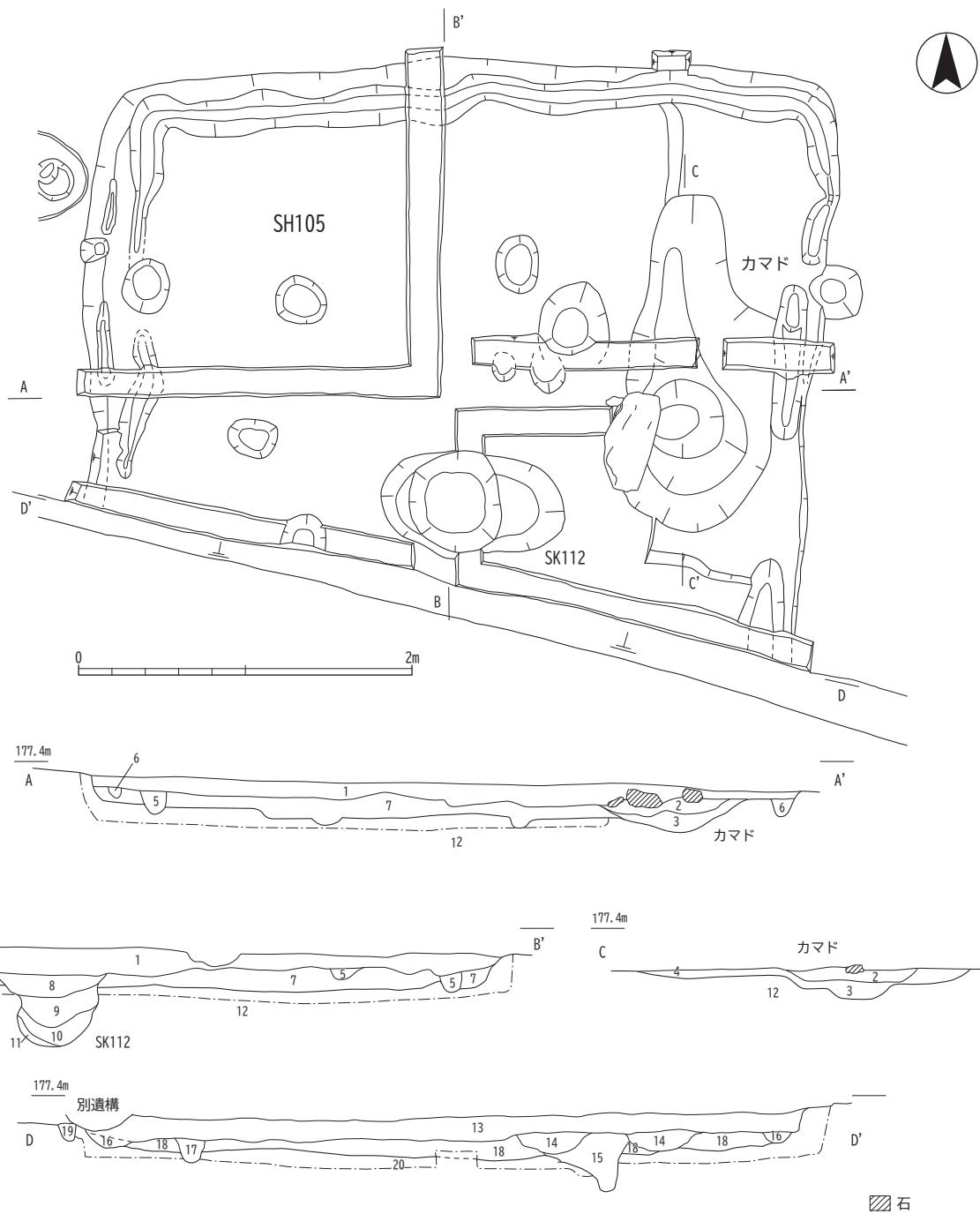
が深くなっている、この付近に礫が廃棄されている。埋土から近世の陶器が出土している。

S K 17（第29図、写真図版25）2区b東半、S B 49の南東隅で検出した長方形の土坑である。遺構南側はS B 49ピット（柱抜取穴）と重複しており、柱抜取穴がより新しい。長さ1.9m、幅1.2m、深さ20cmで、埋土下層（2層）は均質な砂質シルト、上層（1層）はブロック土混じりの褐灰色砂質シルトである。底面はほぼ平坦であるが、特に硬化はない。埋土から平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

S K 20（第29図、写真図版25）2区b東半、S B



第26図 S H 104 (1:40)



<SH105> A-A' B-B' C-C'

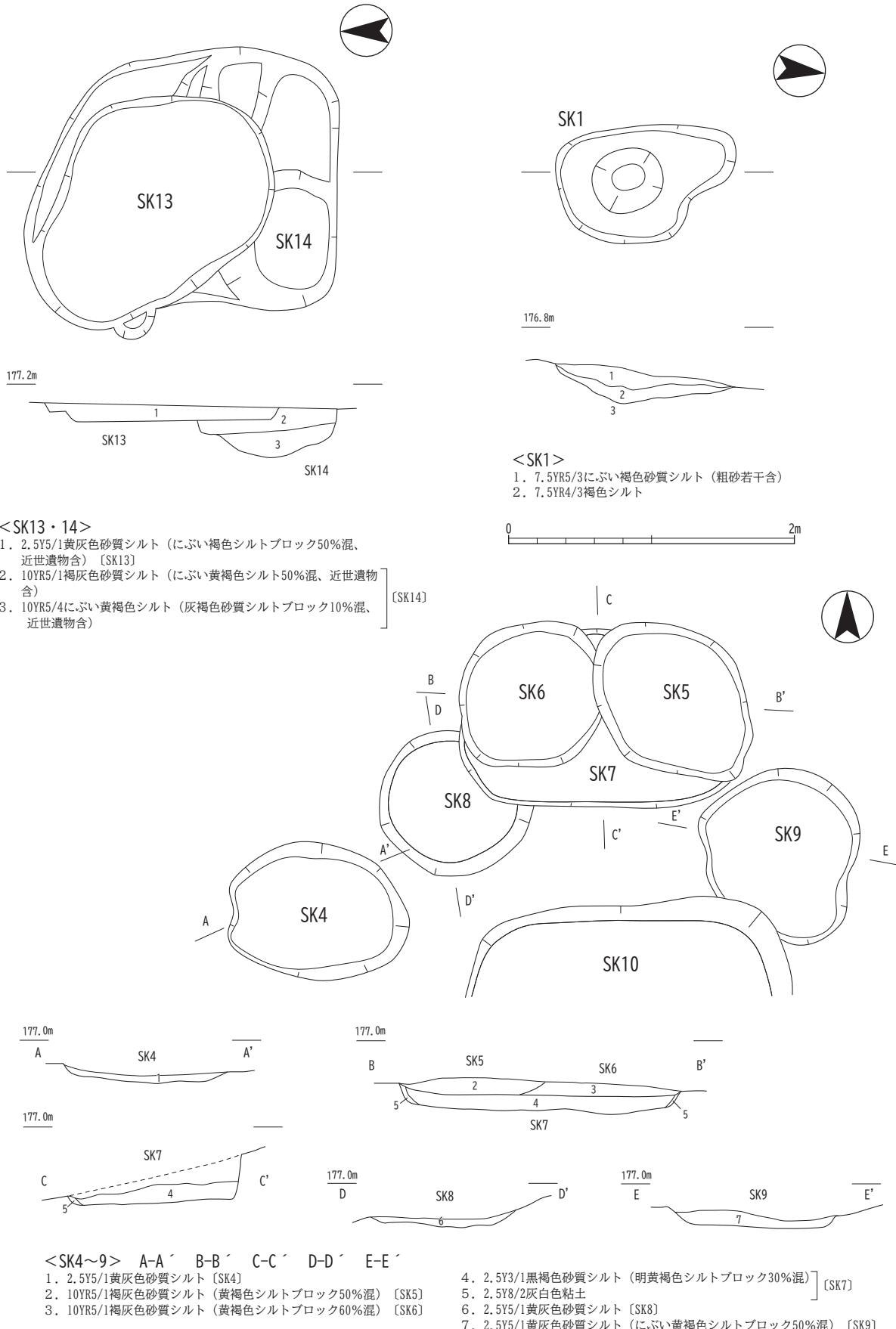
1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (10YR4/4褐色シルトブロック10%、炭混)
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (焼土20%、炭10%混)
3. 7.5YR4/3褐色砂質シルト (炭5%混) [カマド埋土]
4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (炭5%混)
5. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
6. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト (10YR4/4褐色シルト20%混) [壁周溝等埋土]
7. 10YR4/4褐色シルト (10YR4/3にぶい黄褐色シルト20%混) [貼床]
8. 2.5YR4/3オリーブ褐色砂質シルト (10YR4/6褐色砂質シルトブロック10%、炭少量混)
9. 2.5YR4/3オリーブ褐色砂質シルト (10YR4/6褐色砂質シルトブロック30%、炭5%混)
10. 10YR2/3黒褐色砂質シルト (10YR4/6褐色砂質シルト10%、炭少量混)
11. 10YR3/3暗褐色砂質シルト
12. 10YR4/4褐色砂質シルト [基盤層]

[SK112]

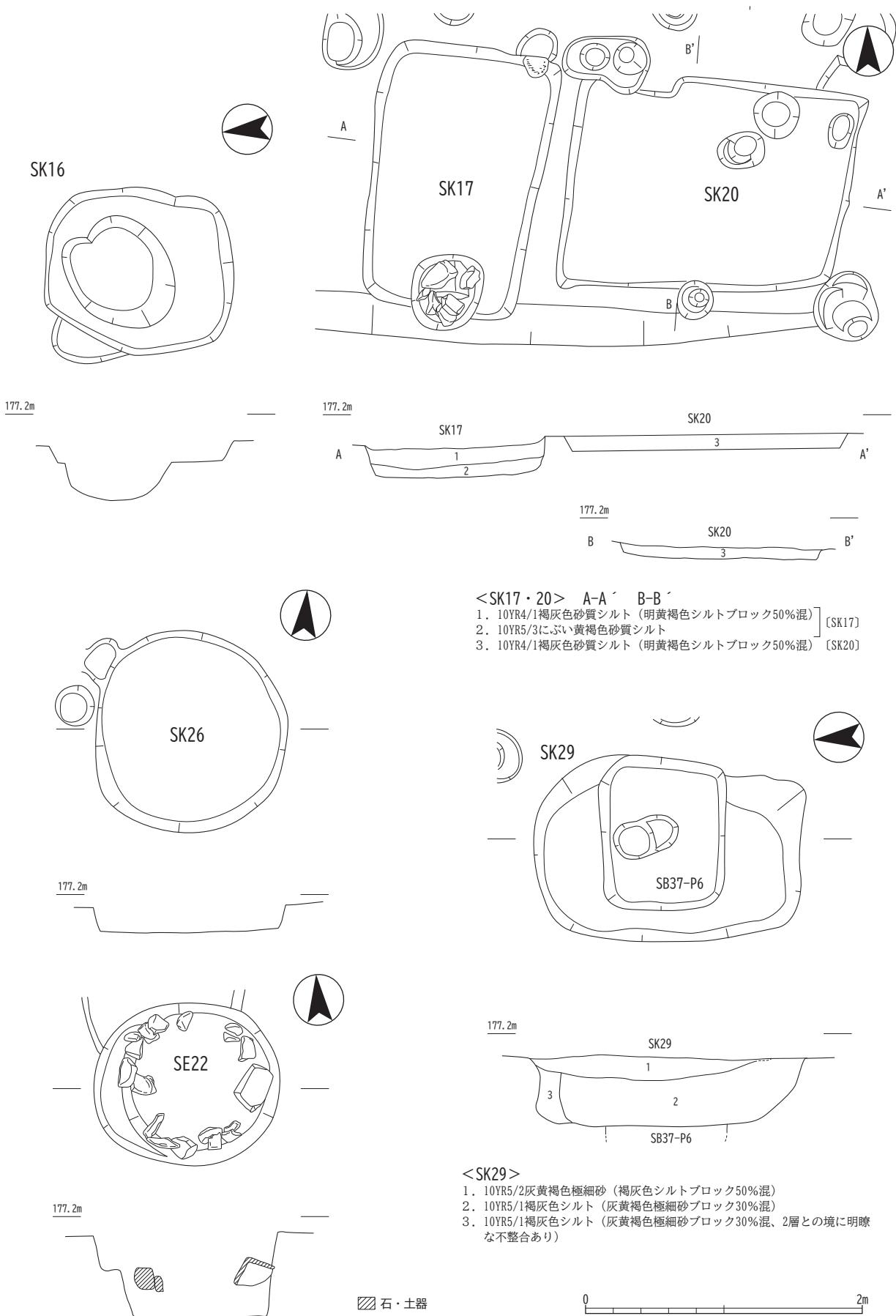
<SH105 (3区 a 南壁)> D-D'

13. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (10YR4/4褐色シルトブロック10%、炭混)
14. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (径2mm以下礫混)
15. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (粘性やや強い)
16. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト [壁周溝]
17. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト [Pit等]
18. 10YR4/4褐色シルト (10YR4/3にぶい黄褐色シルト20%混) [貼床か]
19. 10YR3/2黒褐色砂質シルト (径2mm以下礫混)
20. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト～7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト [基盤層]

第27図 SH 105 (1:40)



第28図 SK1・4～9・13・14 (1:40)



第29図 SK16・17・20、SE22、SK26・29 (1:40)

49 の南東隅で検出した長方形の土坑で、SK 17 に隣接する。長さ 2.0 m、幅 1.5 m、深さ 10cm で、底面は平坦であるが、特に硬化していない。埋土はブロック土混じりの褐灰色砂質シルトである。平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

SE 22 (第 29 図、写真図版 24) 2 区 c 南、A-I19 グリッドで検出した近世の井戸（水溜）で、SB 37-P8 と重複している。直径 1.3 m、深さ 60cm の円形で、石組の下部が残存していた。廃絶時に石組を破壊し、石を廃棄して埋め戻したとみられる。石組の部材には、瓦質土器も用いられていた。最下部の掘方形状から、円形の枠があった可能性は高いが、痕跡は検出できなかった。

埋土から 18 世紀代の陶磁器や瓦を転用した加工円板などが出土地した。農耕用の野井戸であろう。

SK 26 (第 29 図、写真図版 25) 2 区 c 西、SB 51 内で検出した中世の土坑で、SB 51 との先後関係は不明である。直径 1.5 m、深さ 20cm の円形土坑で、埋土は褐灰色砂質シルト単層である。有機質の枠などを据えた痕跡は認められなかった。平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

SK 28 (写真図版 25) 2 区 c 南、A-J22 グリッドで検出した中世の大型土坑である。直径 3.2 m、深さ 20cm の浅い皿状を呈する。底面は竪穴建物のように平坦ではない。また、調査区内では SK 28 に関わるようなピットは確認できない。

埋土（2 区 c 南壁 16 層）は砂混じりの灰褐色砂質シルトで、平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器のほか、砥石や韁羽口が出土しており、SK 28 付近で鍛冶が行われていたことを示唆する。

SK 29 (第 29 図、写真図版 24) 2 区 c 南、A-I21 グリッドで検出した近世の土坑で、SB 37-P6 と重複している。長さ 2.0 m、幅 1.3 m、深さ 50cm の隅丸方形で、埋土下層に明瞭な不整合面（2 層・3 層間）がみられることから、掘り直しや枠等の抜き取りがなされたと推測される。

埋土から 18 世紀代の陶磁器が出土した。

SK 30・31・34 (第 30 図、写真図版 24) 2 区 c 南、A-JH21 グリッドで検出した近世の土坑群である。SK 30 は長さ 2.1 m、深さ 50cm の方形土坑、SK 31・34 は直径 1.0 ~ 1.2 m、深さ 40 ~ 50cm

の円形土坑で、SK 30・34・31 の順に掘削されている。

埋土下層は細砂混じりの砂質シルトで、上層はブロック土が多く混じる。SK 31 は最下層に極細砂が堆積しており、滯水した可能性が高いが、有機質の枠等を据えた痕跡は認められない。SK 31 から 18 世紀代の陶磁器が出土した。

SK 40 (第 30 図、写真図版 25) 2 区 b 西半で検出した直径 1.8 m の中世の円形土坑である。調査区壁際にあり、付近の遺構保存のため完掘していない。

埋土は大小の礫を多く含む灰褐色または黒褐色シルトである。礫は長さ 30 ~ 40cm の角礫が一定あり、石組の井戸であった可能性があろう。埋土から平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

なお、下層（6 層）埋土を土壤分析に供し、古植生や中世の生業に関する資料を得た（第 V 章、写真図版 29）。

SK 42 (第 30 図、写真図版 25) 2 区 b 西半、A-K12 グリッドで検出した直径 1.8 m の中世の土坑である。調査区壁際にあるため深さは不明であるが、SK 40 と規模が類似しており、井戸の可能性があろう。埋土から中世の陶器片が出土した。

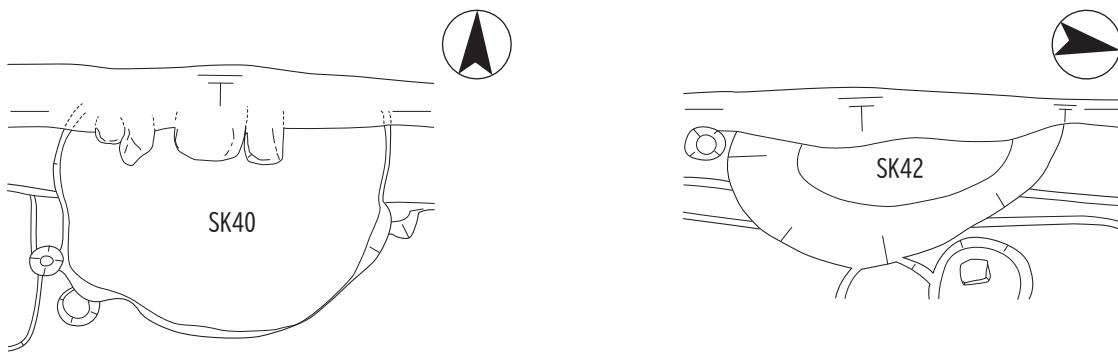
SK 102 (第 30 図) 3 区 a、B-I6 グリッドで検出した円形土坑で、直径 1.3 m、深さ 30 cm を測る。

3 区 a 北壁土層の状況から、基本層序 II 層下の遺構であり、中世以前のものと判断される。埋土は焼土混じりの砂質シルトないしシルトで、遺物は出土しなかった。

SK 106 (第 31 図、写真図版 26) 3 区 a、B-K9 グリッドで検出した中世の円形土坑で、直径 2.0 m、深さ 60 cm を測る。平面および土層観察によれば、南よりに直径約 1.5 m の円形の掘り込みがあり、やや縦まりのないシルトが堆積していた（2 層）。井戸枠などを据えた野井戸（水溜）の可能性があるが、井戸枠の腐食痕は明確でなかった。こうした状況は、他に SK 29 でもみられる。遺構の基盤層は砂質シルトや粗砂で、天水などは自然に地中に浸透したと推測される。

埋土から平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

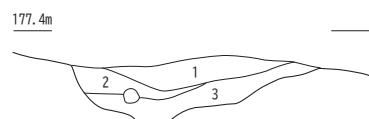
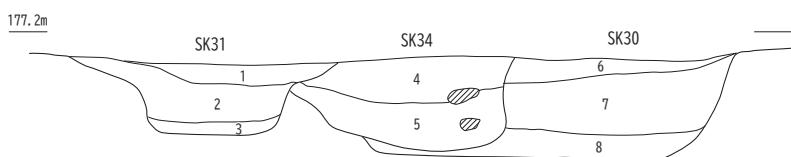
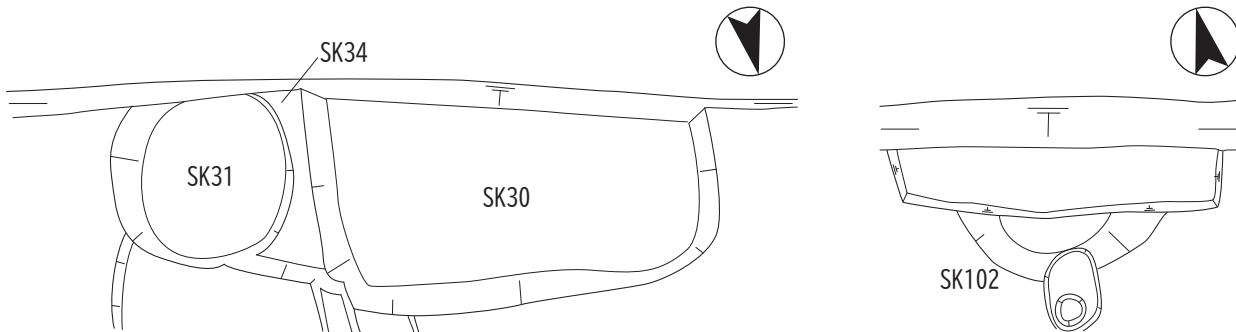
SK 107 (第 31 図、写真図版 26) 3 区 a、B-L9



- <SK40>**
1. 7.5YR4/2灰褐色シルト（極細砂を20%含む）
 2. 7.5YR3/1黒褐色シルト（細砂を10%、礫を2%含む）
 3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（極細砂を10%含む）
 4. 7.5YR3/2灰褐色シルト（細砂を10%、礫を5%含む）
 5. 7.5YR4/2灰褐色シルト（細砂を10%含む）
 6. 10YR3/2黒褐色シルト（細砂を10%、礫を5%含む、土壤分析試料No.7採取）
 7. 10YR4/2灰黄褐色シルト（細砂を10%含む）

- <SK42>**
1. 10YR3/2黒褐色シルト（拳大礫5%、細砂2%、10YR6/8明黄褐色シルトブロック30%混）
 2. 5BG4/1暗青灰色細砂
 3. 10YR6/8明黄褐色シルト（2.5Y3/2黒褐色シルト40%、礫2%混）

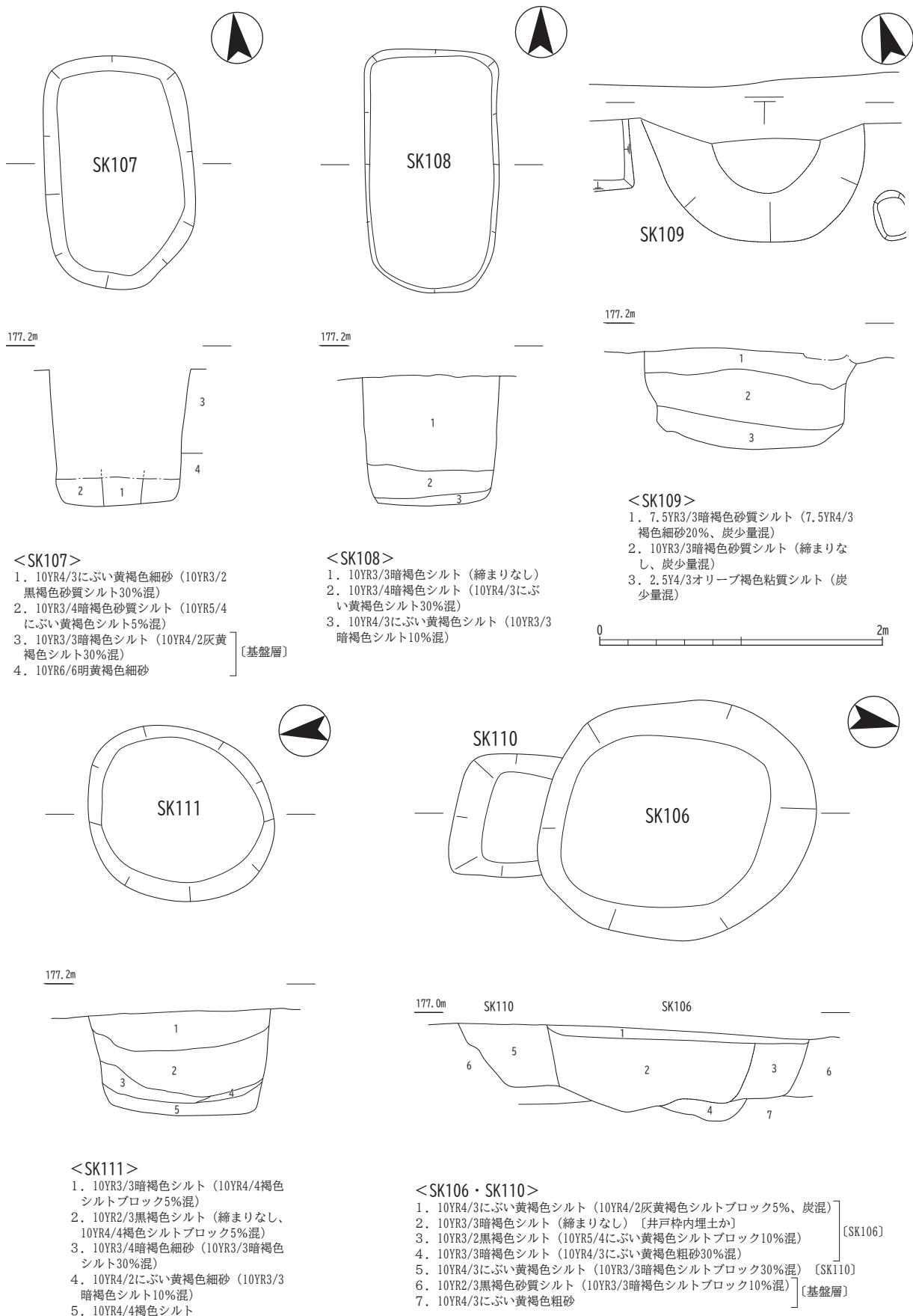
0 2m



- <SK30・31・34>**
1. 10YR4/2灰黄褐色シルト（細砂20%、暗灰黄色砂質シルトブロック10%混）
 2. 7.5YR4/2灰褐色シルト（暗灰黄色砂質シルトブロック10%、細砂20%混、径1cmの礫まばら）
 3. 10YR4/2灰黄褐色極細砂
 4. 7.5YR4/2灰褐色シルト（黄褐色シルトブロック5%、細砂20%混）
 5. 10YR4/2灰黄褐色シルト（細砂30%混、径5mm～1cm大の礫まばらに含む）
 6. 7.5YR4/2灰褐色シルト（黄褐色シルトブロック25%、細砂20%混）
 7. 10YR4/2灰黄褐色シルト（細砂30%混）
 8. 7.5YR4/2灰褐色シルト（礫2%、細砂20%混）

- <SK102>**
1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（締まりあり）
 2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（炭5%、焼土少量混）
 3. 7.5YR4/3褐色砂質シルト（焼土30%、炭5%混）

第30図 SK 30・31・34・40・42・102 (1:40)



第31図 SK 106～111 (1:40)

グリッドで検出した中世の長楕円形土坑である。長径 1.6 m、短径 1.0 m、深さ 1.0 m を測り、付近の土坑群の中ではもっとも深い。埋土はブロック土混じりの砂質シルトや細砂である。

埋土から平安時代末から鎌倉時代の土師器のほか、鉄滓が出土した。

S K 108（第 31 図、写真図版 26）3 区 a、B-L9

グリッドで検出した中世の長楕円形土坑である。長径 1.6 m、短径 1.0 m、深さ 90cm で、埋土はブロック土混じりの砂質シルトや細砂である。

埋土から平安時代末から鎌倉時代の瓦器が出土した。

S K 109（第 31 図、写真図版 26）3 区 a、B-J9

グリッドで検出した円形土坑で、直径 1.6 m、深さ 70 cm を測る。3 区 a 北壁土層の状況から、基本層序 II 層下の遺構であり、中世以前のものと判断される。

埋土は最下層が粘土質シルト、中・上層が砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

S K 110（第 31 図、写真図版 26）3 区 a、B-K9

グリッドで検出した方形土坑で、一辺 90cm、深さ 40 cm を測る。S K 106 に先行する遺構である。

遺物は出土していないが、S K 106・S K 107 等と同様の中世の遺構であろう。

S K 111（第 31 図、写真図版 26）3 区 a、B-L9

グリッドで検出した円形土坑で、直径 90cm、深さ 70 cm を測る。埋土は下層がシルトや細砂、上層がブロック土混じりの砂質シルトである。中世の土師器・瓦器が出土した。

S K 112（第 27 図）3 区 a、S H 105 内で検出した

楕円形の土坑で、長径 1.1 m、短径 60cm、深さ 40 cm を測る。S H 105 貼床上から掘り込まれており、竪穴建物内の貯蔵穴や廃棄土坑であろう。埋土から奈良時代の土師器が出土している。

（4）溝

S D 23・24 2 区 c、A-HI20 付近で検出した中世ないし近世の溝である。

S D 23 は幅 15cm、深さ 5cm、S D 24 は幅 20cm、深さ 15cm の小溝で、南北方向に走行し、調査区南北外へ延びている。S D 25 より後出の遺構で、出土した遺物は S D 25 から混入した可能性が高い。

近世の小溝 S D 27 と一対となり、道路（幅約 4.5 ~ 5.0 m）の側溝であった可能性もある。

S D 25（第 32 図、写真図版 27）2 区 c、A-HI20 付近で検出した中世の溝である。幅 2.1 m、深さ 40cm で、調査区内で延長 12.5 m を測る。南北方向に走行し、さらに調査区外北へ延びている。南側は 2 区 c 南壁付近で途切れている。

埋土はシルトで、調査中も降雨がすぐに浸透したことから、常時滞水する溝ではなく、雨水処理や土地区画のための溝であろう。埋土から 14 世紀初頭～前半の土器・陶磁器が出土している。

なお、下層（3 層）埋土を土壤分析に供し、古植生や中世の生業に関する資料を得た（第 V 章、写真図版 29）。

S D 27 2 区 c、A-IJ21 付近で検出した近世の溝である。幅 25cm、深さ 5cm の浅い小溝で、南北方向に走行し、さらに調査区外北へ延びている。近世の陶磁器が出土した。

S D 27 の性格は、土地の区画溝のほか、S D 23・24 と対になる道路側溝であった可能性もある。

S D 35 2 区 c、A-I21 付近で検出した中世の溝である。幅 1.6 m、深さ 5cm の浅い溝で、南北方向に走行し、さらに調査区外南北へ延びている。S K 30・31・34 や S D 27 に先行する溝である。平安時代末から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

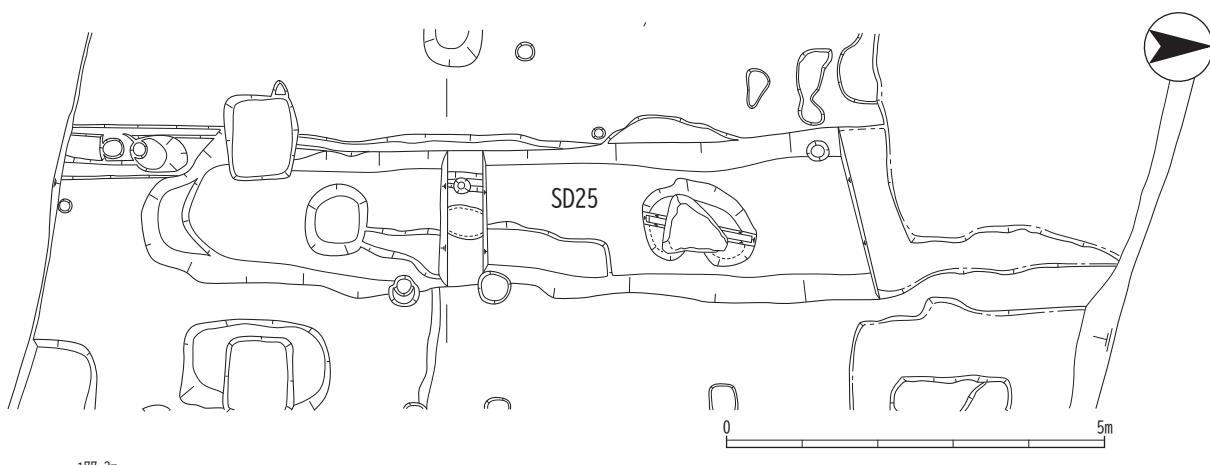
S D 36 2 区 c、S D 35 上面で検出した中世の溝である。幅 40cm、深さ 4cm の浅い溝で、S D 35 の埋土の一部である可能性もある。

平安時代末から鎌倉時代の土師器、中世の青磁碗が出土した。

S D 46・47 1 区で検出した近世の溝で、幅 30 ~ 50cm、深さ 3 ~ 5cm の素掘溝である。近世の陶器が出土した。

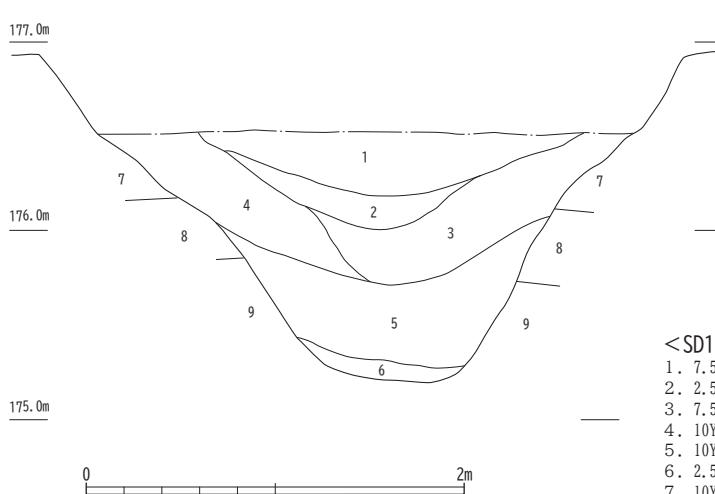
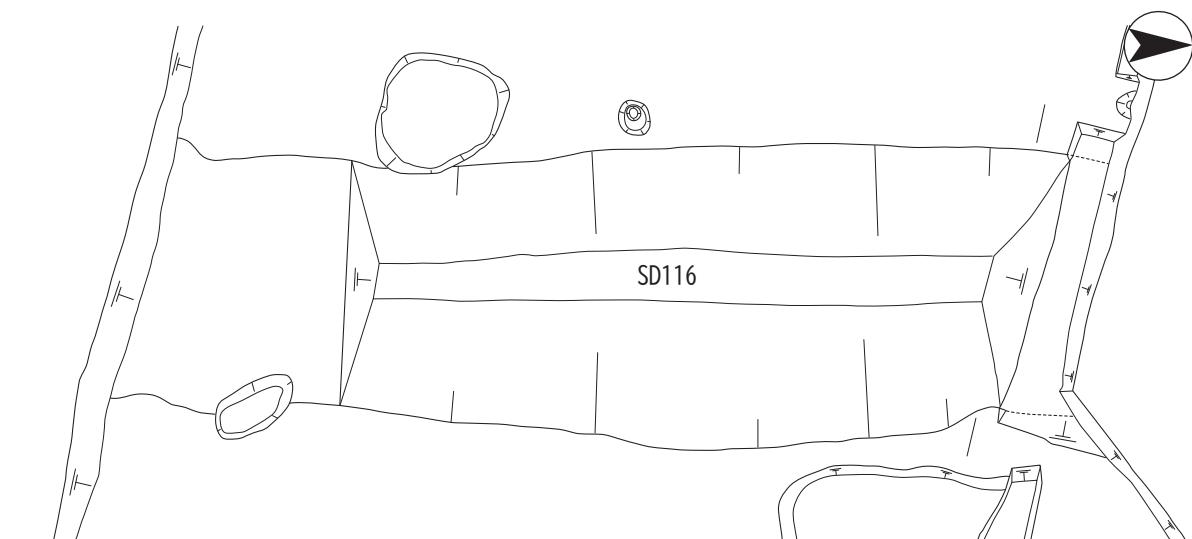
S D 116（第 32 図、写真図版 27）3 区 a、B-K11 グリッド付近で検出した大型の堀である。最大幅 4.0 m、深さ 1.7 m で、断面形は V 字形を呈する、いわゆる薬研堀である。

3 区 a 北壁土層の状況から、基本層序 II 層下の遺構であり、中世以前のものと判断される。また、近世までに完全に埋没し、その後の地割境界などには



<SD25>

1. 10YR4/2灰黄褐色シルト（細砂10%、礫2%混）【別Pit埋土】
2. 10YR4/2灰黄褐色シルト（細砂10%混）
3. 7.5YR2/2灰褐色シルト（細砂30%混、土壤分析試料No. 6採取）
4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（細砂5%混）



<SD116>

1. 7.5YR3/2黑褐色砂質シルト（10YR2/2黑褐色砂質シルト30%混）
2. 2.5YR5/3黄褐色細砂～中粒砂（7.5YR3/2黑褐色砂質シルト5%混）
3. 7.5YR2/2黑褐色砂質シルト（2.5Y5/3黄褐色細砂～中粒砂10%混）
4. 10YR3/3暗褐色砂質シルト（2.5Y5/3黄褐色細砂～中粒砂5%混）
5. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（炭2%混）
6. 2.5Y5/4黄褐色細砂～中粒砂（同色砂質シルト5%混）
7. 10YR5/3暗褐色シルト（10YR4/2灰黄褐色シルト30%混）
8. 10YR6/6明黄褐色細砂
9. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト（10YR6/6明黄褐色細砂20%混）

〔基盤層〕

第32図 SD 25・116 (平面図1:100、土層断面図1:40)

影響していない。

堀肩の立ち上がりは、堀の南側ほど西肩が急で、東肩が緩やかである。このことから、東から西への移動を遮断するための堀であるとみられる。堀の付近に土壘や柵などの付属施設の痕跡はみられない。埋土は砂質シルトや細砂で、上層は特にブロック土が多く混じる。

遺物は出土していないため、堀の掘削・廃絶時期は不明であるが、調査地の西側には南北朝から戦国期の山城（峰山城跡）が存在しており、関連する戦国期の遺構である可能性が高いが、奈良時代の遺構や平安時代の薦生牧に関わる可能性も否定できず、今後の調査で時期を確定していく必要がある。

(櫻井)

第5表 遺構一覧表

遺構番号	調査区	グリッド	時期	規模 (m) ()は残存値			出土遺物	備考 (切り合いは古→新)
				長(径)	幅	深		
SK1	2区	A-D13		1.3	0.8	0.2		
SE2	2区	A-C14	近世	1.9	1.0	-	陶器	完掘せず
SK3								欠番
SK4	2区	A-E14	近世	1.2	1.0	0.1	陶器	
SK5	2区	A-DE14	近世	1.3	1.0	0.1	陶器	SK7→SK6→SK5
SK6	2区	A-DE14	近世	1.1	1.0	0.1	陶器	SK7→SK6→SK5
SK7	2区	A-DE14	近世 (18c末)	2.0	1.2	0.1	磁器	SK8→SK7→SK6→SK5
SK8	2区	A-DE14	近世	1.0	-	0.05		
SK9	2区	A-E14・15	近世	1.2	1.1	0.1		SK9→SK10
SK10	2区	A-E14・15	近世	2.3	-	-		大型の擾乱、SK9→SK10 完掘せず
SK11	2区	A-E15	近世	(1.2)	-	-		大型の擾乱 完掘せず
SE12	2区	A-H11・12	近世	(2.3)	-	-		完掘せず
SK13	2区	A-G13	近世	1.8	-	0.1	陶磁器	SK14→SK13
SK14	2区	A-G13	近世	1.8	1.0	0.35	陶磁器	SK14→SK13
SK15	2区	A-H15	近世	-	-	-	陶器	SB38-P2上の擾乱
SK16	2区	A-H14・15	近世	1.4	1.2	0.4	陶器	
SK17	2区	A-H16	平安末～鎌倉 (12c後葉～13c前葉)	1.9	1.2	0.2	土師器、瓦器	SB49屋内(南東隅) 土坑
SK18	2区	A-H14						欠番 (SB39-P3に変更)
SK19	2区	A-I16						欠番 (古代のピット)
SK20	2区	A-H17	平安末～鎌倉 (12c後葉～13c前葉)	2.0	1.5	0.1	土師器、瓦器	SB49屋内(南東隅) 土坑
21	2区	A-H17						欠番 (ピット)
SE22	2区	A-I19	近世 (18c)	1.3	1.1	0.6	陶器、磁器、瓦質土器 加工円板	水溜
SD23	2区	A-H120	中世以降	(11.0)	0.15	0.05	瓦器、陶器	SD25→SD23・24
SD24	2区	A-H120	中世以降	(11.0)	0.2	0.15	土師器、瓦器、陶器	SD25→SD24
SD25	2区	A-H120	鎌倉～南北朝 (14c初頭～前半)	(12.5)	2.1	0.4	土師器、瓦器、土錐 古瀬戸、常滑	SD25→SD23・24
SK26	2区	A-H18	平安末～鎌倉 (12c後葉～13c前葉)	1.5	-	0.2	土師器、瓦器	
SD27	2区	A-IJ21	近世	(11.3)	0.25	0.05	陶磁器	SK31→SD27
SK28	2区	A-J22	平安末～鎌倉	3.2	-	0.2	輪羽口、砥石、土師器、 瓦器	SB37・39→SK28
SK29	2区	A-I21	近世	2.0	1.3	0.5	陶器	SB37→SK29
SK30	2区	A-J21	近世	2.1	-	0.5	陶磁器	
SK31	2区	A-J21	近世	1.0	-	0.4	陶磁器	
SK32	2区	A-H22	近世	1.4	1.2	-	磁器	完掘せず
SD33	2区	A-I21	中世	2.4	0.3	-	陶器	ごく浅い溝 SD35→SD33
SK34	2区	A-J21	近世	(1.2)	-	0.5	磁器	SK30→SK34→SK31
SD35	2区	A-I21	平安末～鎌倉	(11.5)	1.6	0.05	土師器、瓦器	SD35→SK30・31・34
SD36	2区	A-I21	中世	(3.2)	0.4	0.04	瓦器、青磁	
SB37	2区	A-I17～24	奈良?	29.5	(5.0)	-		梁行2間以上×桁行10間の長舎 東西棟、SB37→SB39
SB38	2区	A-I14～16	奈良?	7.0	-	-		梁行2間、礎盤石あり 南北棟
SB39	2区	A-G～I22	奈良	(12.0)	3.0	-	土師器、須恵器	梁行1間×桁行6間以上、同位置建 て替え、南北棟、SB37→SB39

遺構番号	調査区	グリッド	時期	規模 (m) ()は残存値			出土遺物	備考 (切り合いは古→新)
				長(径)	幅	深		
SK40	2区	A-I12~14	平安末～鎌倉 (12c後葉～13c前葉)	1.8	-	(0.6)	土師器、瓦器	完掘せず
SK41	2区	A-I12	近世	1.0	-	0.05	陶器	SB44→SK41
SK42	2区	A-K12	中世	1.8	-	0.6	陶器	
SK43	2区	A-G20						欠番 (基盤層中の巨礫)
SB44	2区	A-I12	奈良	(6.5)	3.7	-	土師器、須恵器	桁行3間以上
SB45	2区	A-I12	奈良?	(5.0)	-	-		1×1間以上、円形Pit 礎盤石あり
SD46	1区	A-C4	近世	11.7	0.5	0.05	陶器	
SD47	1区	A-C4	近世	2.3	(0.3)	0.03	陶器	
SB48	2区	A-E16	平安末～鎌倉	7.0	5.0	-	土師器	3×2間?、側柱
SB49	2区	A-G15	平安末～鎌倉 (12c後葉～13c前葉)	7.8	(4.0)	-	土師器、瓦器、瓦、土錐	3×2間以上、総柱
SB50	2区	A-H16	平安末～鎌倉	2.1	2.1	-	瓦器	1×1間 SK20→SB50
SB51	2区	A-H18	平安末～鎌倉	5.0	4.5	-	土師器、瓦器	2×2間、総柱
SA52	2区	A-H21	中世	7.6	-	-		南北方向、4間
SH101	3区	B-K3～4	奈良	3.1	3.0	0.2	土師器、須恵器	北東側にカマド残欠
SK102	3区	B-I6	中世以前	(1.3)	-	0.3	焼土塊	
SK103	3区	B-J3	中世	1.0	0.6	0.1	土師器、瓦器	
SH104	3区	B-K4～5	奈良	3.1	(2.6)	0.2	土師器	
SH105	3区	B-L5	奈良	4.4	(3.3)	0.2	土師器、須恵器	東側にカマド残欠
SK106	3区	B-K9	平安末～鎌倉	2.0	1.7	0.6	土師器、瓦器	SK110→SK106
SK107	3区	B-L9	中世	1.6	1.0	1.0	土師器、鉄滓	旧SE107
SK108	3区	B-L9	平安末～鎌倉 (12c後葉～13c前葉)	1.6	1.0	0.9	瓦器	
SK109	3区	B-J9	中世以前	1.6	-	0.7		
SK110	3区	B-K9	中世	0.9	-	0.4		SK110→SK106
SK111	3区	B-L9	中世	0.9	-	0.7	土師器、瓦器	
SK112	3区	B-L5	奈良	1.1	0.6	0.4	土師器	SH105屋内土坑
SD113	3区	B-N15		(9.0)	0.4	0.1	土師器	
SD114	3区	B-LM17	近世以降	5.1	0.4	0.08	土師器、瓦	
SK115	3区	B-N18	近世	(0.7)	0.3	0.1	土師器、陶器	
SD116	3区	B-K11他	中世以前	(12.3)	4.0	1.7		断面V字形の大溝 (薬研堀)
SK117	3区	B-C14	近世以降	1.3	-	-		攢乱、完掘せず
SK118	3区	B-C15	近世	(2.7)	1.0	-	土師器、陶器	攢乱、完掘せず
SK119	3区	B-CD15	近世以降	(5.0)	1.5	-	瓦、陶器	攢乱、完掘せず
SK120	3区	B-D13	近世	1.8	1.2	-	土師器、陶磁器	攢乱、完掘せず
SK121	3区	B-D14	近世以降	1.1	-	-	土師器	攢乱、完掘せず
SK122	3区	B-F13～15	近世	3.6	2.5	-	陶磁器	攢乱、完掘せず
SK123	3区	B-EF14～15	近世	6.0	5.0	-	土師器、陶磁器	攢乱、完掘せず
SK124	3区	B-F13	近世以降	1.5	-	-	磁器	攢乱、完掘せず
SK125	3区	B-DE15	近世以降	1.7	-	-	磁器	攢乱、完掘せず
SK126	3区	B-A13						欠番

IV 遺 物

1. 出土遺物の概要

今回の出土遺物は縄文時代、古代から近世の土器・陶磁器などで、総量はコンテナ換算で31箱(30.8kg)である。なかでも中世（特に平安時代末から鎌倉時代初め）の土器が圧倒的に多い。古代の遺物はごくわずかであるが、SB 37等の大型掘立柱建物の重要性を鑑み、奈良時代の遺物は混入遺物も極力図化するよう努めた。このほか、表土などに縄文時代の土器や石器が含まれており、遺跡や地形環境の変遷を知るうえで重要である。近世の遺物は、完掘した遺構から出土したものを中心に図化した。

ここでは、遺構出土遺物（遺構番号順）、表土・包含層・その他出土遺物の順に説明する。編年や分類の典拠は註⁽¹⁾を参照されたい。各遺物の製作技術などの詳細は、遺物観察表（第6表）に記した。

2. 遺構出土遺物

SK 17（第33図） 1・2は瓦器椀で、1は口縁部外面のミガキが省略されている。伊賀地域の瓦器椀編年で6期（12世紀後葉から13世紀前葉）に相当しよう。3は古代の須恵器甕で混入遺物。胴部に櫛描直線文がみられる。

SK 20（第33図） 5～6期の瓦器椀（4・5）、中世の土師器皿（6・7）がある。6は器壁が厚い小皿である。

SE 22（第33図） 9～13は肥前系磁器で、肥前IV期前半（18世紀前半）の丸碗（9～11）や紅小皿（12）などがある。陶器は京都・信楽系陶器が主体で、鉢（15・19）、灯明皿（16）、鍋（20）などの雑器や調理具がみられる。22～24は瓦軒用の加工円板で、いずれも直径6cm前後のもの。

SD 24（第33図） 土師器小皿（8）がある。

SD 25（第33図） 25～28は瓦器である。皿25、椀26は、内面に横方向のミガキが残るが、27・28は内面ミガキと圈状の暗文が一体化しており、伊賀地域の瓦器椀編年で9期（14世紀初頭）に相当する。

29は瓦質土器の鍋で、外面は被熱している。

30～43は土師器皿で、30・35・41のように器壁が分厚いものと、31・32や39・40のように器壁が薄手のものがある。44は小型の羽釜形鍋である。45は口縁部を丸く巻き込む、伊賀地域の羽釜形鍋であろう。46は管状の土錐である。

47～52は陶器である。片口鉢50・51は内面が著しく摩耗している。49は古瀬戸後Ⅲ期の折縁深皿、52は常滑7型式の甕である。

25・26を除くと、瓦器・陶器とも14世紀初頭から前半に位置付けられよう。

SK 26（第34図） 54～57は土師器皿、58～62は瓦器椀である。瓦器椀はすべて外面ミガキがなく、58・61・62は、見込みの暗文が「ℓ」字状を呈する。いずれも6期のものである。

SK 28（第34図） 中世の土師器皿（63）、外面に退化したミガキの残る瓦器椀（64）のほか、薄手の砥石（66）、輪羽口（65）がある。輪羽口は外径約6cm程度に復元できる。

SK 30・31（第34図） 67・71・73は両遺構を識別する前の段下げる時、68～70はSK 31、72はSK 30出土遺物である。67～69は磁器碗で肥前IV期のもの。70・71は京都・信楽系陶器である。72は白磁製品を転用した加工円板。73は凝灰岩製の砥石で、各面に成形時の鑿痕が残る。

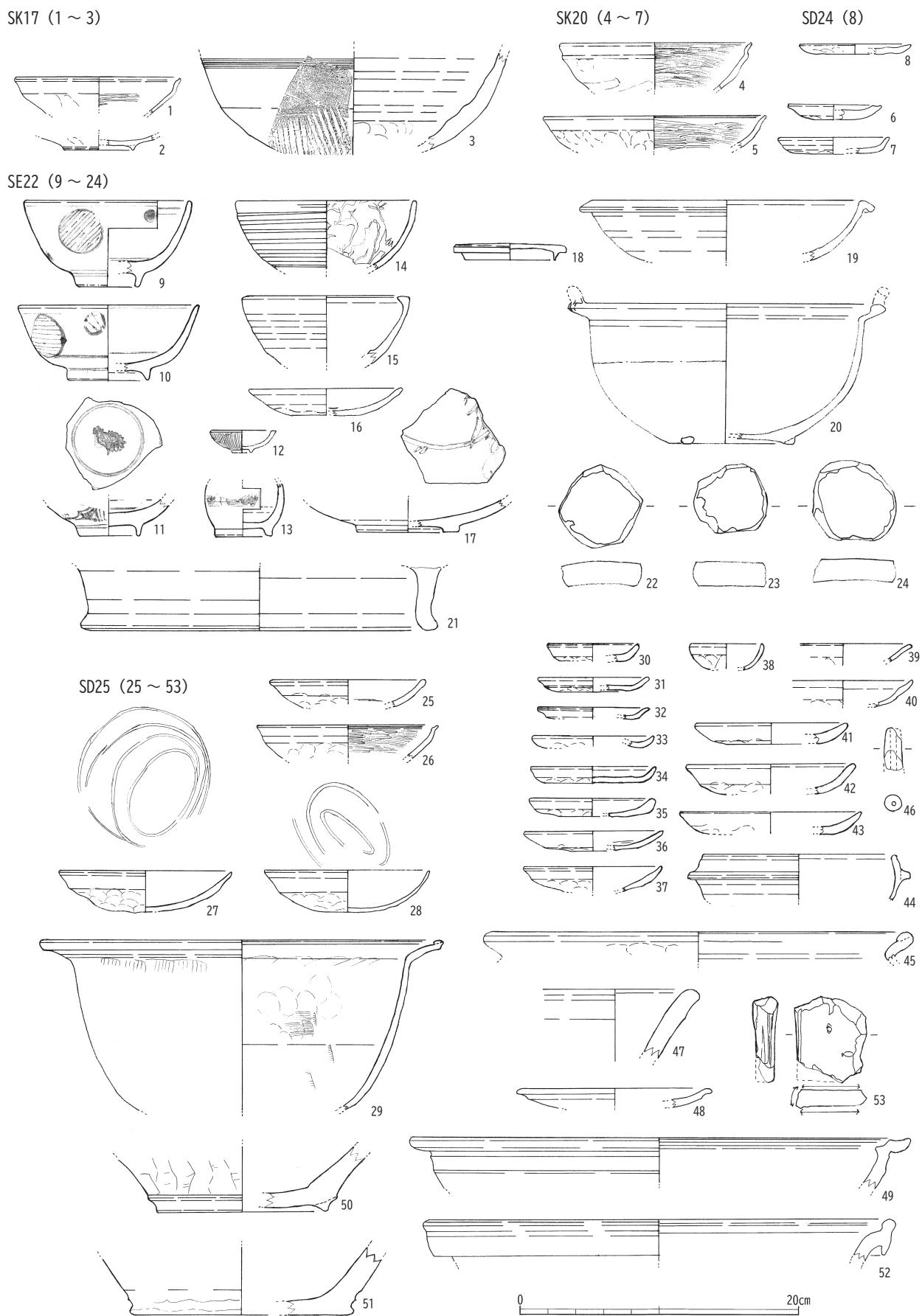
SD 33（第34図） 中世の片口鉢口縁部（74）がみられる。

SD 36（第34図） 75は内面ミガキのある瓦器椀、青磁76は口縁端部がやや厚手の小碗で、外面は無文のもの。

SB 39（第34図） いずれも古代の土器である。77は須恵器杯または椀の口縁部片である。78は土師器甕で、内外面とも頸部付近をヨコハケで調整する。伊賀地域に通有の甕であろう⁽²⁾。

SB 44（第34図） P4から古代の須恵器甕（85）が出土している。

SB 48（第34図） 中世の土師器皿（86）、土師器鍋（87）がみられる。



第33図 出土遺物① (1:4)

S B 49（第34図） いずれも中世の遺物である。88・89は土師器皿、90～92は6期ごろの瓦器椀である。他に管状の土錐（93）や凸面に縄目を残す瓦（94）などが出土している。

S B 51（第34図） 中世の瓦器椀（95・96）、土師器皿（97）がある。

S H 101（第34図） 奈良時代の須恵器杯（98）、鍋や盤等の扁平な把手（99）が出土している。

S H 105（第34図） 100は須恵器杯C、101は杯Bである。土師器皿A（102）は内面に放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施し、外面調整は口縁部ヨコナデ、底部は未調整である（a手法）。103は胴部中央付近が最大径となる甕で、外面ナナメハケ、内面をヨコハケで調整する。これらは都城（平城宮）の土器編年で、平城II～IIIに相当しよう。

S K 106（第35図） 図示したものはすべて瓦器椀（104～107）である。105は外面に若干ミガキが残存する段階のもの。他は外面のミガキが完全に消失している。

S K 107（第35図） 椭形渕の小片（108）が出土している。

S K 108（第35図） 図示したものはすべて瓦器椀（109～113）である。112・113は見込みに「ℓ」字状の暗文がみられる。6期のものであろう。

その他Pit（第35図） すべて中世の遺物である。114・115は土師器皿、116～124は瓦器椀で、概ねS B 48・49・51出土遺物と同時期のものであろう。

3. 表土・包含層・その他

126～130は範囲確認調査で出土した遺物（第35図）である。いずれも本発掘調査を実施した地点から出土した。126は中世、127はやや器高のある近世土師器皿である。伊賀地域は近世の土師器皿編年が確立しておらず、大和地域の土器編年⁽³⁾を参照すると、18～19世紀に位置付けられる。129・130は火成岩製の敲石で、縄文時代のものであろう。

131～180は表土・包含層や他時代の遺構に混入していた遺物である（第35・36図）。

131～133は縄文時代の遺物である。131は縄文土器の鉢で、胴部が屈曲し外面は横方向のミガキが

みられる。後期前半のものであろう。132はサヌカイト製の無茎鏹、133はR Fである。134は原石表皮の残るサヌカイト剥片で、2区c南壁（4層）から出土した。

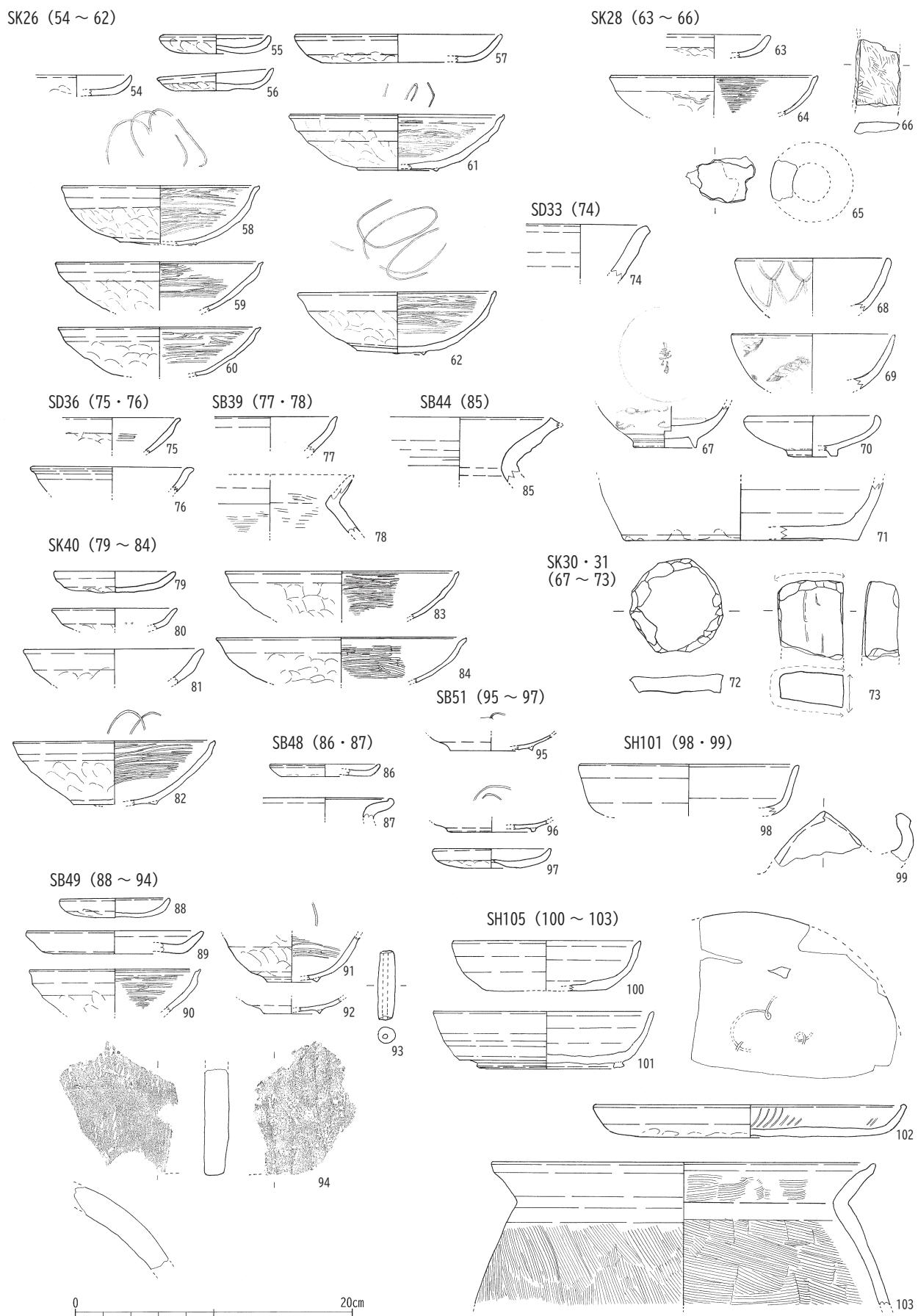
135～139は古代の土器である。奈良時代の須恵器杯（136）、土師器高杯（137）や鍋類（138・139）などがある。135～137はS B 37・39周辺から出土した。

140～155は中世の遺物である。土師器・瓦器は遺構出土遺物と大差ないが、ジグザグ状暗文の瓦器皿（145）、椀（150）などがある。152は肩部突帯間に重画文を押捺する瓦質土器風炉で、14世紀後半から15世紀前半のもの。153は土器短頸壺で、近世の火消壺かもしれない。155は銭貨で、表面が著しく摩耗しており銘は判読できない。154は常滑5型式の甕である。

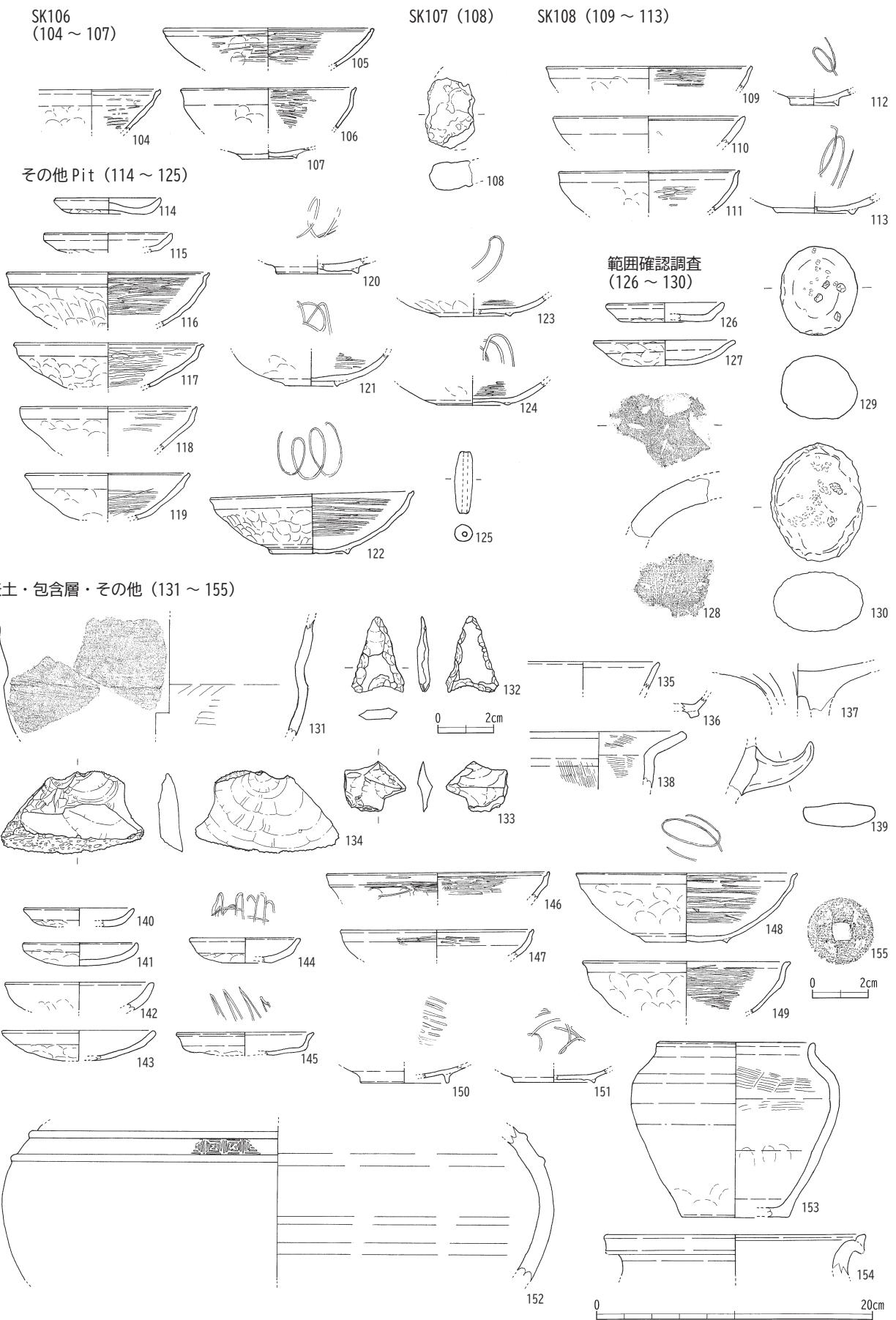
156～180は近世の遺物で、18・19世紀の土器・陶磁器が多い。土師器皿（156・157）は127と同じくやや高さのあるもの。焙烙（158～160）は三種類ほどあり、160は底部外面に型作り成形時の離型剤（金雲母粉）がみられる。瀬戸・美濃系陶器（161～164）は碗皿類が多く、調理具や植木鉢などの雑器、仏飯器などは伊賀・信楽製品（166～171・173・174）が主体となるようである。172は見込みに樓閣山水文を描く肥前京焼風陶器で、高台内印銘「清水」。肥前系磁器（175～178）は肥前IV期（17世紀末から18世紀）の碗が多くみられ、当地の開発（街道沿いの宅地化）がこの時期に活発化していることが知られる。179は2区aで出土した木瓜形の刀鍔である。鉄地に銀象嵌で梅樹文を描く良品で（写真図版37）、責金は銅である。成分分析結果は第V章を参照されたい。明治の村絵図や地籍図などから、2区aの北側には水路（もと堀か）で囲繞された方形区画があり、土豪の居館などが存在した可能性が高い（写真図版32）。この刀鍔はそうした富裕層の帶刀だった可能性があろう。

4. 薦生遺跡表面採集遺物

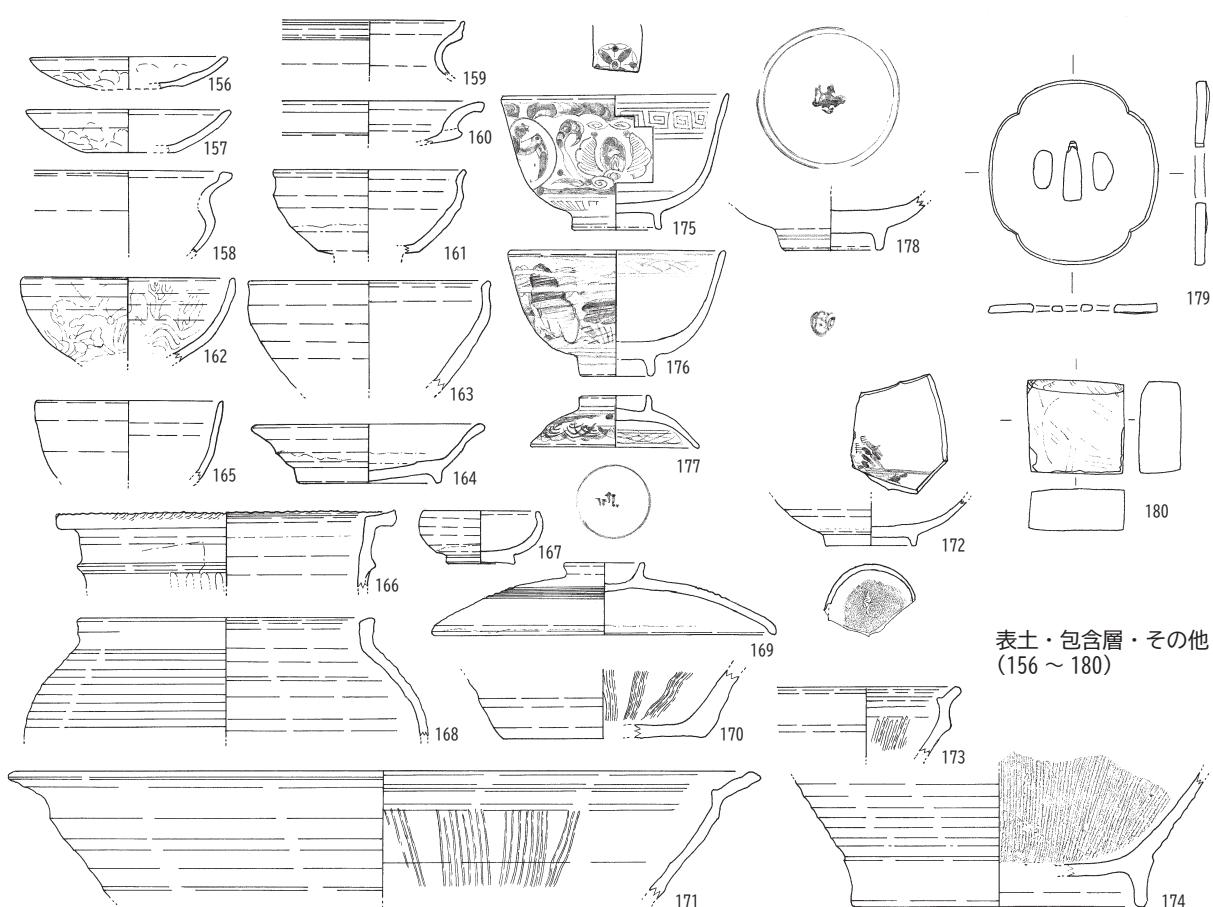
181～193は薦生遺跡の北部で表面採集された遺物である（第36図）。名張市薦生在住の福広博敏氏



第34図 出土遺物② (1:4)

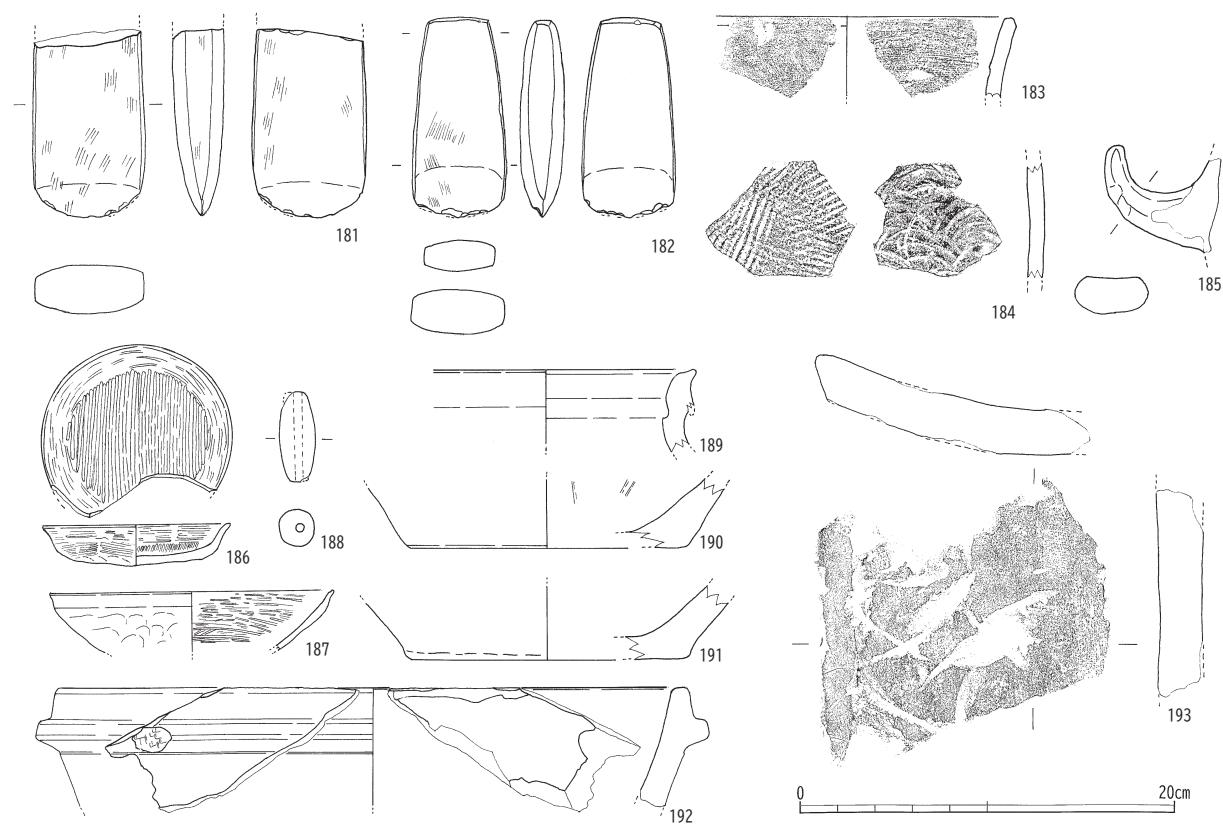


第35図 出土遺物③ (1:4、132・155は1:2)



表土・包含層・その他
(156～180)

薦生遺跡採集資料 (181～193)



第36図 出土遺物④ (1:4)

が、自己の田畠で採集した遺物で、令和4年8月に当センターへ寄贈された。遺物の時期は、縄文時代・古代（平安時代除く）・中世にわたり、今回の出土遺物と共に多くのものが、出土遺物にないものも含まれており、各時代の遺物散布域や遺跡の性格を知るうえで非常に重要な資料である。

遺物は第37図A地点付近で採集されたものが多いが、縄文時代の定角式石斧は同B地点で採集したという。B地点付近は東西を小さな谷に挟まれた舌状の微高地であり、『名張市史』⁽⁴⁾に記された縄文時代の遺物散布域と概ね一致している。

181・182は緑色岩製の定角式磨製石斧である。いずれも使用痕が顕著で、刃部には微細な剥離がみられる。183は粗製の深鉢で、縄文時代後期のもの。184・185は古代の土師器・須恵器で、奈良時代の遺物が遺跡北部にも散布していることが判明する。193は平瓦で、凹面は丁寧にナデを施すが、凸面に布目痕を残すもの。凸面布目痕のある平瓦は名張市夏見廃寺でも出土しており（夏見廃寺平瓦I類⁽⁵⁾）、奈良時代の薦生遺跡の動向を知るうえで特に重要な遺物である。

186～192は中世の遺物で、瓦器（186・187）、土錐（188）、14～15世紀代の信楽焼甕（189）、擂鉢（190）などがある。瓦器皿（186）は、内外面に丁寧なミガキを施し、黒色土器の特徴を残す古相のものである。192は滑石製石鍋で、破面が摩耗しており長短冊形を呈する。鍔にも二次加工の鑿痕があり、温石等に再加工する途上の未成品であろう。

なお、表採資料にも弥生～飛鳥時代、平安時代の遺物はなく、この時代が遺跡の空白期間であることがうかがえる。

註

（1）土器・陶磁器の分類・編年と暦年代観は、下記文献に従う。

- ・古代の土師器・須恵器 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』VI、1975年 / 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』VII、1976年 / 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』IX、1978年 / 器種分類：奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告』16、2005年。

- ・中世の土師器 森川常厚「伊賀地域の中世土器」『三重

県史』資料編考古2、三重県、2008年。

- ・瓦器 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」

『中世土器の基礎研究』20、日本中世土器研究会、2006年。

- ・肥前系陶磁器 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』

2000年。

- ・京都・信楽系陶器 京焼：角谷江津子「同志社校地出土の京焼とその変遷」『同志社大学歴史資料館館報』第2号、同志社大学歴史資料館、1999年 / 信楽焼：畠中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版、2003年。

- ・瀬戸・美濃系陶器 古瀬戸：藤澤良祐「古瀬戸前期・中期・後期様式の編年」『中世瀬戸窯の研究』高志書院、2008年。

- / 大窯期：藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、2002年 / 登窯以降：瀬戸市『瀬戸市史』陶磁史篇6、1998年 / 美濃窯：樋崎彰一「近世美濃窯の変遷」『尾呂』瀬戸市教育委員会、1990年。

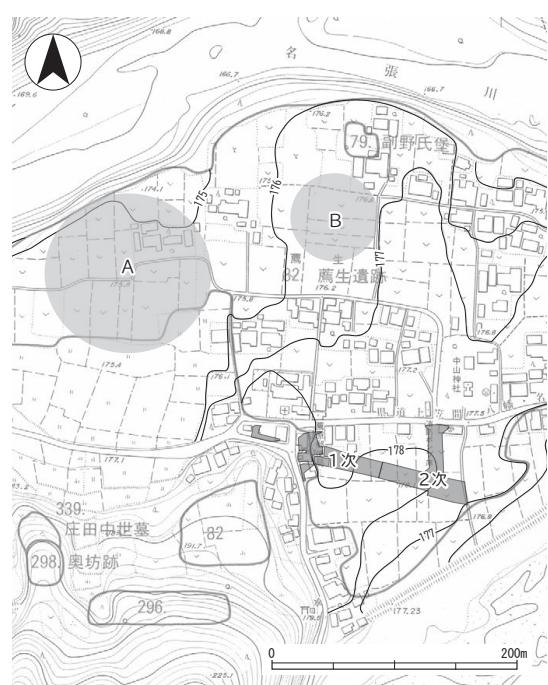
- ・常滑焼 愛知県『愛知県史』別編窯業3、2012年。

（2）外側頸部下をヨコハケ調整する甕は、伊賀地域に広くみられる（笠井賢治「伊賀」『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会、1996年）。

（3）奈良市教育委員会「奈良町遺跡出土の土師器皿の編年」『南都出土中世土器資料集』2014年。

（4）名張市「薦生遺跡」『名張市史』資料編考古、2010年。

（5）名張市教育委員会『夏見廃寺』1988年。



第37図 遺物採集位置（地図出典は第8図参照）

第6表 遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類 (产地・系統)	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量(cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	001-01	瓦器	椀	2区	A-H16	SK17	口縁～胴部 1/12	11.8	-	-	灰	内：ミガキ
2	001-02	瓦器	椀	2区	A-H16	SK17	底部2/12	-	4.8	-	灰白	
3	001-05	須恵器	甕	2区	A-H16	SK17	胴部小片	-	-	-	灰	外：タタキ
4	001-06	瓦器	椀	2区	A-H17	SK20	3/12	13.6	-	-	灰	内：ミガキ
5	001-07	瓦器	椀	2区	A-H17	SK20	2/12	15.8	-	-	灰	内：ミガキ
6	001-03	土師器	皿	2区	A-H17	SK20	1/12	10.0	-	1.0	浅黄橙	
7	001-04	土師器	皿	2区	A-H17	SK20	1/12	7.8	-	1.2	にぶい橙	
8	009-01	土師器	皿	2区	A-I20	SD24	2/12	7.9	-	0.7	灰白	
9	002-04	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	A-II9	SE22	口縁部4/12 底部3/12	11.6	4.0	6.2	灰白	
10	004-05	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	A-II9	SE22	1/12	12.9	5.6	5.4	灰白	
11	002-08	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	A-II9	SE22	底部5/12	-	3.9	-	明綠灰	
12	004-03	磁器 (肥前)	紅小皿	2区	A-II9	SE22	口縁部11/12 底部12/12	4.1	1.2	1.6	明綠灰	
13	002-05	磁器 染付 (肥前)	仏花器	2区	A-II9	SE22	底部12/12	-	3.2	-	明綠灰	
14	002-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	2区	A-II9	SE22	6/12	12.8	-	-	浅黄	灰釉、打刷毛目
15	002-06	陶器 (京都・信楽)	鉢	2区	A-II9	SE22	1/12	10.4	-	-	浅黄	灰釉
16	002-03	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	2区	A-II9	SE22	1/12	10.8	-	1.9	にぶい赤褐	鐵釉
17	004-01	陶器 (京都・信楽)	皿	2区	A-II9	SE22	底部4/12	-	5.2	-	灰白	灰釉、鐵絵
18	004-02	陶器	蓋	2区	A-II9	SE22	2/12	6.4	8.0	-	灰白	灰釉
19	003-02	陶器	鉢	2区	A-II9	SE22	1/12	19.4	-	-	灰白	灰釉
20	003-01	陶器 (伊賀・信楽)	鍋	2区	A-II9	SE22	8/12	21.8	8.2	10.1	灰白	灰釉
21	003-03	瓦質土器	鉢	2区	A-II9	SE22	底部1/12	-	24.2	-	灰	
22	002-02	土製品	加工円板	2区	A-II9	SE22	完形	長6.0	幅5.9	厚1.6	灰	重量60.3g, 瓦転用
23	002-01	土製品	加工円板	2区	A-II9	SE22	完形	長5.0	幅5.2	厚1.7	灰	重量52.9g, 瓦転用
24	004-04	土製品	加工円板	2区	A-II9	SE22	完形	長5.8	幅5.9	厚1.6	灰	重量64.0g, 瓦転用
25	010-05	瓦器	皿	2区	A-H20	SD25	2/12	11.0	-	-	灰	
26	012-05	瓦器	椀	2区	A-G20	SD25	1/12	12.8	-	-	灰	内：ミガキ
27	009-05	瓦器	椀	2区	A-G20	SD25	8/12	12.2	-	3.0	灰	内：暗文
28	010-06	瓦器	椀	2区	A-H20	SD25	9/12	11.8	-	3.0	灰	内：暗文
29	010-01	瓦質土器	鍋	2区	A-I20	SD25	3/12	28.6	-	-	灰	
30	012-09	土師器	皿	2区	A-I20	SD25	2/12	6.4	-	1.3	浅黄橙	
31	010-09	土師器	皿	2区	A-H20	SD25	3/12	7.8	-	1.0	灰白	
32	012-07	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	2/12	7.6	-	0.8	にぶい橙	
33	012-08	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	1/12	8.4	-	0.9	浅黄橙	
34	010-03	土師器	皿	2区	A-H20	SD25	1/12	8.8	-	1.2	にぶい橙	
35	010-02	土師器	皿	2区	A-I20	SD25	1/12	8.4	-	1.3	浅黄橙	
36	012-10	土師器	皿	2区	A-I20	SD25	1/12	9.8	-	1.4	灰白	
37	010-07	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	1/12	9.8	-	-	にぶい黄橙	
38	012-11	土師器	皿	2区	A-I20	SD25	3/12	5.0	-	-	浅黄橙	
39	012-01	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	小片	-	-	-	灰白	
40	012-02	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	小片	-	-	-	灰白	
41	010-04	土師器	皿	2区	A-H20	SD25	2/12	10.8	-	1.5	淡橙	
42	010-08	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	2/12	12.0	-	-	浅黄橙	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量(cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
43	012-06	土師器	皿	2区	A-G20	SD25	1/12	12.8	-	-	灰白	
44	011-02	土師器	鍋	2区	A-H20	SD25	1/12	13.8	-	-	にぶい黄橙	
45	011-01	土師器	鍋	2区	A-H20	SD25	1/12	29.8	-	-	にぶい黄橙	
46	012-12	土製品	土錐	2区	A-I20	SD25	1/2	-	-	厚1.3	にぶい橙	重量3.9g
47	012-03	陶器	鉢	2区	A-G20	SD25	小片	-	-	-	橙	
48	011-04	陶器 (古瀬戸)	皿	2区	A-H20	SD25	1/12	13.2	-	-	灰オリーブ	灰釉
49	011-03	陶器 (古瀬戸)	皿	2区	A-H20	SD25	1/12	35.6	-	-	オリーブ黄	灰釉
50	009-02	陶器	片口鉢	2区	A-I20	SD25	底部1/12	-	12.2	-	灰白	外：ケズリ
51	011-05	陶器 (信楽)	鉢	2区	A-H20	SD25	底部2/12	-	15.2	-	橙	
52	009-03	陶器 (常滑)	甕	2区	A-G20	SD25	口縁部小片	33.2	-	-	にぶい褐	
53	012-04	石製品	砥石	2区	A-G20	SD25	1/2	長6.3	幅5.1	厚1.3	-	重量61.0g, 凝灰岩, #320
54	006-02	土師器	皿	2区	A-H18	SK26上層	小片	-	-	-	橙	
55	006-01	土師器	皿	2区	A-H18	SK26上層	2/12	7.6	-	1.3	浅黄橙	
56	005-04	土師器	皿	2区	A-H18	SK26	完形	8.2	-	1.6	浅黄橙	
57	005-05	土師器	皿	2区	A-H18	SK26	1/12	14.8	-	2.0	浅黄橙	
58	005-03	瓦器	椀	2区	A-H18	SK26	6/12	14.2	5.5	-	灰	内：ミガキ, 暗文
59	004-07	瓦器	椀	2区	A-H18	SK26	1/12	14.8	-	-	灰	内：ミガキ
60	004-06	瓦器	椀	2区	A-H18	SK26	1/12	14.6	-	-	灰	内：ミガキ
61	005-01	瓦器	椀	2区	A-H18	SK26	口縁部1/12 底部3/12	14.6	5.6	4.0	灰	内：ミガキ, 暗文
62	005-02	瓦器	椀	2区	A-H18	SK26	口縁部6/12 底部11/12	14.3	4.7	4.5	灰	内：ミガキ, 暗文
63	006-04	土師器	皿	2区	A-J22	SK28	小片	-	-	-	淡赤橙	
64	007-01	瓦器	碗	2区	A-J22	SK28	1/12	14.8	-	-	灰	内：ミガキ
65	006-05	土製品	輪羽口	2区	A-J22	SK28	小片	径6.0	-	-	灰褐	
66	007-02	石製品	砥石	2区	A-J22	SK28	小片	長4.8	幅3.4	厚0.9	-	重量22.0g, ホルンフェルス, #1000
67	007-05	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	A-J21	SK30・31上層	底部7/12	-	4.4	-	明緑灰	
68	008-01	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	A-J21	SK31	1/12	11.0	-	-	明オリーブ 灰	
69	008-02	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	A-J21	SK31	1/12	11.6	-	-	灰白	
70	007-07	陶器 (京都・信楽)	皿	2区	A-J21	SK31	口縁部3/12 底部1/12	9.2	2.7	2.9	灰白	灰釉
71	007-06	陶器 (京都・信楽)	鉢	2区	A-J21	SK30・31上層	底部4/12	-	16.2	-	灰白	灰釉
72	007-03	土製品	加工円板	2区	A-J21	SK30	完形	長6.8	幅6.7	厚1.5	灰白	重量76.0g 白磁碗転用
73	007-04	石製品	砥石	2区	A-J21	SK30・31上層	1/2	長5.7	幅4.8	厚2.6	-	重量112.0g, 凝灰岩, #600 鑿痕
74	012-13	陶器	片口鉢	2区	A-I21	SD33	口縁部小片	-	-	-	灰黄	
75	013-01	瓦器	椀	2区	A-H21	SD36	小片	-	-	-	灰	内：ミガキ
76	012-14	青磁 (中国)	碗	2区	A-H21	SD36	1/12	11.4	-	-	灰オリーブ	
77	013-04	須恵器	杯	2区	A-G22	SB39-P1A柱痕 (A-G22P1i1)	口縁部小片	-	-	-	灰	
78	013-03	土師器	甕	2区	A-G22	SB39-P8B掘方 (A-G22P1i2B)	口縁部小片	-	-	-	浅黄橙	内：ヨコハケ 外：ヨコハケ
79	008-05	土師器	皿	2区	A-I12~14	SK40	9/12	8.5	-	1.4~ 1.7	浅黄橙	
80	008-04	瓦器	皿	2区	A-I12	SK40	2/12	9.0	-	-	灰	
81	008-06	土師器	椀	2区	A-I12, 13	SK40	1/12	12.8	-	-	橙	
82	008-08	瓦器	椀	2区	A-I13, 14	SK40	口縁部2/12 底部3/12	14.6	6.0	4.6	灰	内：ミガキ, 暗文
83	008-03	瓦器	椀	2区	A-I12	SK40	1/12	16.6	-	-	灰	内：ミガキ
84	008-07	瓦器	椀	2区	A-I13, 14	SK40	1/12	18.0	-	-	灰	内：ミガキ
85	013-02	須恵器	甕	2区	A-I12	SB44-P4 (A-I12P1i1)	口縁部小片	-	-	-	灰	

遺物番号	実測番号	種類 (产地・系統)	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量(cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
86	013-06	土師器	皿	2区	A-G16	SB48-P3 (A-G16P1t2)	2/12	7.9	-	0.9	灰白	
87	013-05	土師器	鍋	2区	A-F17	SB48-P1 (A-F17P1t1)	口縁部小片	-	-	-	にぶい褐	
88	014-01	土師器	皿	2区	A-G15	SB49-P4 (A-G15P1t2)	1/12	7.8	-	1.4	にぶい橙	
89	014-03	土師器	皿	2区	A-H15	SB49-P6 (A-H15P1t2)	1/12	12.6	-	1.6	浅黄橙	
90	014-07	瓦器	椀	2区	A-H17	SB49-P10 (A-H17P1t2)	1/12	12.2	-	-	灰	内：ミガキ
91	014-02	瓦器	椀	2区	A-H15	SB49-P5 (A-H15P1t1)	1/12	-	3.6	-	灰白	内：ミガキ、暗文
92	014-04	瓦器	椀	2区	A-H16	SB49-P3 (A-H16P1t3)	底部2/12	-	4.0	-	灰	
93	014-06	土製品	土錐	2区	A-H17	SB49-P10 (A-H17P1t2)	完形	長5.0	-	厚1.2	にぶい黄橙	重量8.06g
94	013-07	瓦	丸瓦	2区	A-H16	SB49-P3 (A-H16P1t3)	小片	長8.7	幅7.5	厚1.7	灰	凸：繩目 凹：ナデ
95	014-09	瓦器	椀	2区	A-H18	SB51-P7 (A-H18P1t2)	底部1/12	-	6.0	-	灰	
96	014-10	瓦器	椀	2区	A-H18	SB51-P3 (A-H18P1t3)	底部2/12	-	5.8	-	灰	
97	014-08	土師器	皿	2区	A-H18	SB51-P6 (A-H18P1t5)	2/12	8.4	-	1.4	にぶい橙	
98	1001-05	須恵器	杯	3区	B-K4	SH101	1/12	15.8	-	3.7	灰	
99	1001-04	土師器	甌	3区	B-K4	SH101	把手片	-	-	-	にぶい橙	
100	1002-02	須恵器	杯	3区	B-L5・6	SH105	3/12	13.4	8.4	3.6	灰白	
101	1001-06	須恵器	杯	3区	B-K5	SH105	口縁部2/12 底部5/12	16.0	9.2	4.1	灰	外：ケズリ
102	1002-01	土師器	皿	3区	B-KL5	SH105	1/12	22.2	-	2.3	橙	内：暗文 外：底部オサエ、ナデ
103	1003-01	土師器	長胴甌	3区	B-L5	SH105	1/12	24.6	-	-	橙	内：ヨコハケ 外：ハケ
104	1004-02	瓦器	椀	3区	B-K9	SK106	口縁部小片	-	-	-	灰	内：ミガキ
105	1004-01	瓦器	椀	3区	B-K9	SK106	1/12	15.0	-	-	灰	内：ミガキ 外：ミガキ
106	1002-03	瓦器	椀	3区	B-K9	SK106	1/12	12.6	-	3.0	灰	内：ミガキ
107	1002-04	瓦器	椀	3区	B-K9	SK106	底部2/12	-	4.0	-	灰白	内：ミガキ
108	1010-09	その他	鉄滓	3区	B-L9	SK107	2/3	長5.1	幅3.6	厚2.1	-	重量54.47g
109	1004-05	瓦器	椀	3区	B-LM9	SK108	1/12	14.8	-	-	灰	内：ミガキ
110	1004-07	瓦器	椀	3区	B-M9	SK108	口縁部小片	13.6	-	-	灰	内：ミガキ
111	1004-04	瓦器	椀	3区	B-LM9	SK108	1/12	13.0	-	-	にぶい黄橙	内：ミガキ
112	1004-06	瓦器	椀	3区	B-LM9	SK108	底部4/12	-	5.2	-	灰	内：暗文
113	1004-08	瓦器	椀	3区	B-M9	SK108	底部4/12	-	5.4	-	白、灰	内：暗文
114	014-12	土師器	皿	2区	A-F18	Pit1	6/12	7.6	-	1.2	にぶい黄橙	
115	1010-05	土師器	皿	3区	B-J7	Pit2	1/12	9.2	-	-	にぶい黄橙	
116	015-04	瓦器	椀	2区	A-H17	Pit4	2/12	14.6	-	-	灰	内：ミガキ
117	1005-02	瓦器	椀	3区	B-J7	Pit3	1/12	17.6	-	-	灰	内：ミガキ
118	014-11	瓦器	椀	2区	A-F17	Pit3	2/12	12.8	-	-	灰	内：ミガキ
119	015-06	瓦器	椀	2区	A-J12,13	Pit1	1/12	11.8	-	-	灰	内：ミガキ
120	015-05	瓦器	椀	2区	A-I21	Pit2	底部3/12	-	5.8	-	灰	内：暗文
121	015-01	瓦器	椀	2区	A-G17	Pit1	4/12	-	3.8	-	灰	内：ミガキ、暗文
122	1005-01	瓦器	椀	3区	B-J7	Pit3	ほぼ完形	14.7	5.4~5.6	4.1~4.5	灰	内：ミガキ、暗文
123	015-03	瓦器	椀	2区	A-H17	Pit1	底部3/12	-	5.0	-	灰	内：ミガキ、暗文
124	015-02	瓦器	椀	2区	A-H16	Pit1	底部2/12	-	4.8	-	灰	内：ミガキ、暗文
125	015-07	土製品	土錐	2区	A-J25	Pit1	完形	長4.5	-	厚1.3	灰黄褐	重量6.55g
126	019-02	土師器	皿	範確No.15		包含層	2/12	8.2	-	1.4	にぶい橙	
127	018-03	土師器	皿	範確No.8		包含層	完形	10.1	-	1.8~2.0	橙	
128	019-01	瓦	丸瓦	範確No.13		包含層	小片	長5.3	幅5.4	厚1.8	黄灰	凹：布目痕

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量(cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
129	018-05	石器	敲石	範確No13		包含層	完形	長6.5	幅5.6	厚4.6	-	重量206.0g, 安山岩?
130	018-04	石器	敲石	範確No15		包含層	完形	長8.7	幅6.7	厚4.3	-	重量347.7g, 安山岩?
131	1005-03	縄文土器	鉢	3区	B-K13	包含層	胴部2/12	胴部 22.0	-	-	にぶい黄橙	外:ケズリ
132	021-01	石器	石鎚	2区	A-124	SB37-P1掘方 (A-I24Pit1)	完形	長2.7	幅1.9	厚0.4	-	重量1.83g, サヌカイト
133	1007-03	石器	RF	3区		表土	完形	長3.7	幅4.4	厚1.1	-	重量13.42g, サヌカイト
134	018-02	石器	剥片	2区	A-K24	2区 c 南壁4層	完形	長6.0	幅10.4	厚1.7	-	重量33.8g, サヌカイト
135	006-03	須恵器	杯	2区	A-J22	SK28	口縁部小片	-	-	-	灰	
136	014-05	須恵器	杯	2区	A-H17	SB49-P10 (A-H17Pit2)	底部小片	-	-	-	黄灰	
137	009-04	土師器	高杯	2区	A-H20	SD25	杯~脚部片	-	-	-	にぶい橙	
138	1004-03	土師器	鍋	3区	B-L9	SK108	口縁部小片	-	-	-	にぶい橙	内:ヨコハケ 外:ハケ
139	1007-04	土師器	鍋	3区		表土	把手片	-	-	-	にぶい橙	
140	017-05	土師器	皿	2区	A-G20	包含層	2/12	7.8	-	-	にぶい橙	
141	017-06	土師器	皿	2区	A-113	擾乱	7/12	8.1	-	1.7	浅黄橙	
142	1007-02	土師器	皿	3区		表土	1/12	10.6	-	-	浅黄橙	
143	017-04	土師器	皿	2区	A-G20	包含層	5/12	10.9	-	-	にぶい橙	
144	015-08	瓦器	皿	2区	A-E18	包含層	2/12	7.8	-	1.8	灰	内:暗文
145	017-03	瓦器	皿	2区	A-F18	包含層	2/12	9.8	-	-	灰	内:暗文
146	1010-02	瓦器	椀	3区	B-L4	南壁	口縁部1/12	15.8	-	-	灰	内:ミガキ 外:ミガキ
147	1007-01	瓦器	椀	3区		表土	1/12	13.8	-	-	灰	内:ミガキ 外:ミガキ
148	017-07	瓦器	椀	2区	A-113	擾乱	5/12	15.8	6.0	5.0	灰	内:ミガキ, 暗文
149	015-09	瓦器	椀	2区	A-H15	包含層	1/12	14.8	-	-	灰	内:ミガキ
150	1010-07	瓦器	椀	3区	B-L15	褐色砂質シルト	底部5/12	6.4	-	-	灰	内:暗文
151	016-01	瓦器	椀	2区	A-F18	包含層	底部3/12	-	5.6	-	灰	内:暗文
152	016-02	瓦質土器	風炉	2区	A-G20	包含層	胴部1/12	-	-	-	灰	外:重画文, ミガキ
153	1001-01	瓦質土器	壺	3区	B-J15	包含層	口縁部1/12 底部2/12	11.2	7.6	12.7	灰	あるいは土器か
154	017-01	陶器 (常滑)	甕	2区	A-F15, 16	包含層	1/12	18.6	-	-	灰	
155	024-01	銅製品	錢貨	3区		表土	完形	径2.5	-	厚0.13	-	重量3.75g
156	1010-04	土師器	皿	3区		北壁柱穴	4/12	10.3	-	-	浅黄橙	
157	1009-06	土師器	皿	3区		表土	1/12	10.8	-	2.3	浅黄橙	
158	1006-07	土師器	焙烙	3区	B-F15	SK123	小片	-	-	-	にぶい橙	
159	1010-08	土師器	焙烙	3区	B-A13	包含層	口縁部小片	-	-	-	にぶい橙	
160	1006-06	土師器	焙烙	3区	B-F15	SK123	口縁部小片	-	-	-	橙	
161	1009-02	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	3区		表土	2/12	10.0	-	-	黒	鉄釉
162	1006-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	B-F15	SK123	2/12	11.2	-	-	オリーブ黄	刷毛目
163	1007-05	陶器	天目茶碗	3区		表土	2/12	12.8	-	-	褐	鉄釉、禾目状に曜変
164	1008-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区		表土	口縁部1/12 底部7/12	11.8	7.2	3.1	灰白	灰釉、輪禿皿
165	1005-05	陶器 (京都・信楽)	碗	3区	B-D13	SK120	1/12	9.8	-	-	灰黃	灰釉
166	1006-02	陶器	植木鉢	3区	B-E14	SK122	1/12	18.0	-	-	黒褐, 淡黄	鉄釉
167	1010-01	陶器 (伊賀・信楽)	小碗	3区		表土	口縁部8/12 底部12/12	6.1	3.4	2.8	淡黄	灰釉
168	1006-01	陶器 (伊賀・信楽)	壺	3区	B-D13	SK120	2/12	15.4	-	-	暗褐色	鉄釉
169	1008-02	陶器 (伊賀・信楽)	鍋 (蓋)	3区		表土	2/12	18.2	-	3.9	灰白	灰釉
170	1005-04	陶器 (伊賀・信楽)	擂鉢	3区	B-C15	SK118	底部2/12	-	10.6	-	にぶい橙	
171	1008-04	陶器 (伊賀・信楽)	擂鉢	3区		表土	1/12	39.2	-	-	暗赤灰	錆釉

遺物番号	実測番号	種類 (产地・系統)	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量(cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
172	1009-01	陶器 (肥前)	碗	3区		表土	底部5/12	-	4.4	-	浅黄	京焼風陶器、高台内印銘「清水」
173	1006-03	陶器 (伊賀・信楽)	擂鉢	3区	B-F15	SK123	口縁部小片	-	-	-	暗赤灰	錯釉
174	1008-03	陶器 (伊賀・信楽)	擂鉢	3区		表土	底部1/12	-	14.8	-	赤灰	錯釉
175	1001-02	磁器 染付 (肥前)	碗	3区		表土	口縁部5/12 底部1/12	12.0	4.6	7.2	明緑灰	
176	017-08	磁器 染付 (肥前)	碗	2区		表土	5/12	11.4	3.8	6.7	灰白	
177	1009-04	磁器 染付 (肥前)	碗(蓋)	3区		表土	4/12	8.8	-	2.8	灰白	源氏香文
178	018-01	磁器 染付 (肥前)	碗	2区		表土	底部11/12	-	5.0	-	明緑灰	コンニャク印判五弁花
179	024-02	鉄製品	刀鍔	2区		表土	完形	長9.9	幅9.1	厚0.5	-	重量187.91g、木瓜形、鉄地銀象嵌 資金は銅
180	017-02	石製品	砥石	2区	A-F17	包含層	完形	長5.1	幅5.2	厚2.2	-	重量136.0g、泥岩、#1000
181	020-02	石器	磨製石斧	調査区外		表採	1/2	長10.1	幅6.0	厚2.3	-	重量267.0g、緑色岩
182	020-01	石器	磨製石斧	調査区外		表採	完形	長10.8	幅5.0	厚2.3	-	重量235.1g、緑色岩
183	021-05	繩文土器	深鉢	調査区外		表採	小片	-	-	-	にぶい黄橙	
184	020-03	須恵器	甕	調査区外		表採	胴部小片	-	-	-	青灰	内：タタキ 外：タタキ
185	020-04	土師器	鍋	調査区外		表採	把手片	-	-	-	にぶい黄橙	
186	020-05	瓦器	皿	調査区外		表採	11/12	10.0	-	2.2	黄灰	内：ミガキ 外：ミガキ
187	021-04	瓦器	碗	調査区外		表採	1/12	15.2	-	-	灰	内：ミガキ
188	020-06	土製品	土錐	調査区外		表採	ほぼ完形	長4.8	-	厚1.9	褐灰	重量12.4g
189	021-06	陶器 (信楽)	甕	調査区外		表採	小片	-	-	-	にぶい橙	
190	021-03	陶器 (伊賀・信楽)	擂鉢	調査区外		表採	底部1/12	-	14.4	-	灰白	
191	021-02	陶器 (常滑)	甕	調査区外		表採	底部1/12	-	14.6	-	にぶい赤褐	
192	022-01	石製品	石鍋	調査区外		表採	1/12	33.0	-	-	-	滑石製、再加工途上(鑿痕)
193	023-01	瓦	平瓦	調査区外		表採	1/4	-	-	厚2.5	灰黄	凸：布目痕 凹：ナデ

V 自然科学分析

1. 分析の種類と対象

自然科学分析は、次項（1）～（3）を実施した。分析委託先はパリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社吉田生物研究所である。

（1）樹種同定と放射性炭素年代測定

古代の長舎である掘立柱建物 S B 37・S B 39 は遺構内の出土遺物が少なく、年代を確定できない。S B 37・S B 39 柱穴掘方埋土から採取した炭化材を対象に ^{14}C 年代測定を実施し、あわせて樹種同定を実施した。炭化材の産状については第Ⅲ章を参照されたい。分析の結果、古代の年代を示すものではなく、いずれも基盤層に含まれる弥生・古墳時代の炭化材であると判断された。このような古い炭化材が遺構に混入する背景として、カヤ、アカガシ亜属など硬質の樹木炭化材が残存しやすかった可能性が示唆された。また、S B 37・S B 39 の造営時に炭化材を多く供給するような人間活動が希薄であったことも考えられる。

（2）土壤分析（植物珪酸体）

調査地は、「東大寺文書」により平安時代に「薦生牧」が所在したとされることから、植物珪酸体分析を実施し、平安時代を中心とした栽培植物や古植生に関する情報を得ることとした。

調査地は高燥で、基盤層は砂質堆積物からなり、地表からの土壤化作用を強く受けていることが層相から判明している。このため、花粉・珪藻の遺存状況が不良であると推測されたため、植物珪酸体に限定して分析を行った。分析試料は、古代の掘立柱建物 S B 37・S B 38・S B 39 埋土、中世の土坑 S K 40 下層埋土、溝 S D 25 下層埋土である。試料の採取位置は第Ⅲ章を参照されたい。

分析の結果、調査地付近はタケ亜科などが繁茂しており、栽培穀物（イネ・コムギ）は、鎌倉時代の S K 40 下層埋土、鎌倉～室町時代の溝 S D 25 にのみ認められた。分析結果は第VI章で総括したい。

（3）金属製品成分分析調査

刀鍔（遺物 179）1 点の象嵌等について、材質を

確認する為に成分分析を行い、刀鍔の製作技術に関する情報を得た。
(櫻井)

2. 分析結果報告

（1）樹種と年代測定

試料は、大型建物のピットから検出された炭化物 5 点である。No. 8 と No. 9（2 点あり）の 3 点は土壤ごと採取された炭化材、No. 10、No. 11 の 2 点は水洗によって得られた炭化材である。

①分析方法

・樹種同定

土壤ごと採取された 3 点（No. 8 と No. 9）は、土壤から炭化材を抽出したあと、水洗された炭化材 2 点（No. 10、No. 11）とともに、双眼実体顕微鏡下で周囲をトリミングしながら組織を観察し、同定する。40 ~ 50mg に調整した中心部を年代測定用試料とする。削り落とした残試料で、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面を作成し、電子顕微鏡での観察・撮影を行う。同定は、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して行う。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

・放射性炭素年代測定

採取試料の周囲を削り落として 50mg 程度に調整する。削り落とした部分は樹種同定に用いる。試料は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE

cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al., 2020) である。

②結果

・樹種同定

結果を第 7 表に示す。検出された種類は、針葉樹が 1 種類 (カヤ)、広葉樹が 1 種類 (コナラ亜属アカガシ亜属) である。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)

イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪幅全体も狭い。仮道管内壁に対をなしたらせん肥厚がみられる。放射組織は柔細胞のみで構成される。

第 7 表 樹種同定結果

No.	種別	遺構・層位	時代	樹種
8	炭化材	SB39-P1掘方	奈良	アカガシ亜属
9-1	炭化材	SB37-P12掘方	奈良	カヤ
9-2	炭化材	SB37-P12掘方	奈良	アカガシ亜属
10	炭化材	SB39-P1掘方	奈良	アカガシ亜属
11	炭化材	SB39-P8B掘方	奈良	アカガシ亜属

放射組織は単列で、細胞高が低い (4 ~ 5 細胞高) ものが多い。

コナラ属アカガシ亜属

(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では橢円形、単独で放射方向に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で 1 ~ 15 細胞高のものと、複合放射組織がある。

・放射性炭素年代測定

結果は第 8 表、第 38 図に示す。いずれの試料も年代測定に必要な炭素量が回収できている。同位体補正を行った測定年代は、No. 8 が $2390 \pm 20\text{BP}$ 、No. 9 (カヤ) が $1665 \pm 20\text{BP}$ 、No. 9 (アカガシ亜属) が $2470 \pm 20\text{BP}$ 、No. 10 が $2225 \pm 20\text{BP}$ 、No. 11 が $2210 \pm 20\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。 2σ の値は、No. 8 が calBC540 ~ 398、No. 9 (カヤ) が calAD262 ~ 428、No. 9 (アカガシ亜属) が calBC760 ~ 477、No. 10 が calBC379 ~ 201、No. 11 が calBC368 ~ 197 である。

③考察

樹種同定の結果、アカガシ亜属が 4 点、カヤが 1 点である。さらに水洗によって得られた炭化材 (No. 10、No. 11) 中の炭化材をそれぞれ数点観察したが、いずれもアカガシ亜属であった。ともに暖地に多い種類であり、特にアカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要な構成要素である。これらは遺跡周辺に現在でも普通にみられる種類であることから、資材として採取・利用したと考えられる。アカガシ亜属は非常に重硬な木材で、硬さを生かした農工具などに使われることが多い。アカガシ亜属の炭化材が多いのは、周囲にアカガシ亜属が多く生育していたとも考えられるが、他の木材に比べ硬くて燃え残りやすいことも、原因の一つと思われる。一方カヤは、成長が遅いため建築材としては使いにくいが、木目の美しさなどから、彫刻材や器具材として使われるこ

第8表 放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正年代						Code No.
					年代値				確率 %		
9	炭化材 アカガシ亜属	AAA (1M)	2390±20 (2390±21)	-29.24 ± 0.36	σ cal BC 478 - cal BC 402	2427 - 2351 calBP	68.3				YU- 16511
					2 σ cal BC 540 - cal BC 398	2489 - 2347 calBP	95.4				pal- 14216
9-1	炭化材 カヤ	AAA (1M)	1665±20 (1667±20)	-24.34 ± 0.30	σ cal AD 377 - cal AD 420	1573 - 1531 calBP	68.3				YU- 16512
					cal AD 262 - cal AD 275	1688 - 1675 calBP	5.2				pal- 14217
9-2	炭化材 アカガシ亜属	AAA (1M)	2470±20 (2469±20)	-27.58 ± 0.29	σ cal BC 750 - cal BC 685	2699 - 2634 calBP	34.3				YU- 16513
					cal BC 667 - cal BC 636	2616 - 2585 calBP	14.3				pal- 14218
					cal BC 589 - cal BC 541	2538 - 2490 calBP	19.7				
					2 σ cal BC 760 - cal BC 477	2709 - 2426 calBP	95.4				
10	炭化材 アカガシ亜属	AAA (1M)	2225±20 (2223±20)	-27.97 ± 0.29	σ cal BC 361 - cal BC 349	2310 - 2298 calBP	7.9				YU- 16514
					cal BC 310 - cal BC 272	2259 - 2221 calBP	24.6				pal- 14219
					cal BC 266 - cal BC 241	2215 - 2190 calBP	15.9				
					cal BC 236 - cal BC 207	2185 - 2156 calBP	19.9				
					2 σ cal BC 379 - cal BC 342	2328 - 2291 calBP	17.4				
					cal BC 321 - cal BC 201	2270 - 2150 calBP	78.1				
11	炭化材 アカガシ亜属	AAA (1M)	2210±20 (2209±20)	-26.42 ± 0.26	σ cal BC 356 - cal BC 345	2305 - 2294 calBP	8.6				YU- 16515
					cal BC 318 - cal BC 280	2267 - 2229 calBP	31.7				pal- 14220
					cal BC 255 - cal BC 249	2204 - 2198 calBP	3.9				
					cal BC 233 - cal BC 204	2182 - 2153 calBP	24.1				
					2 σ cal BC 368 - cal BC 197	2317 - 2146 calBP	95.4				

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。

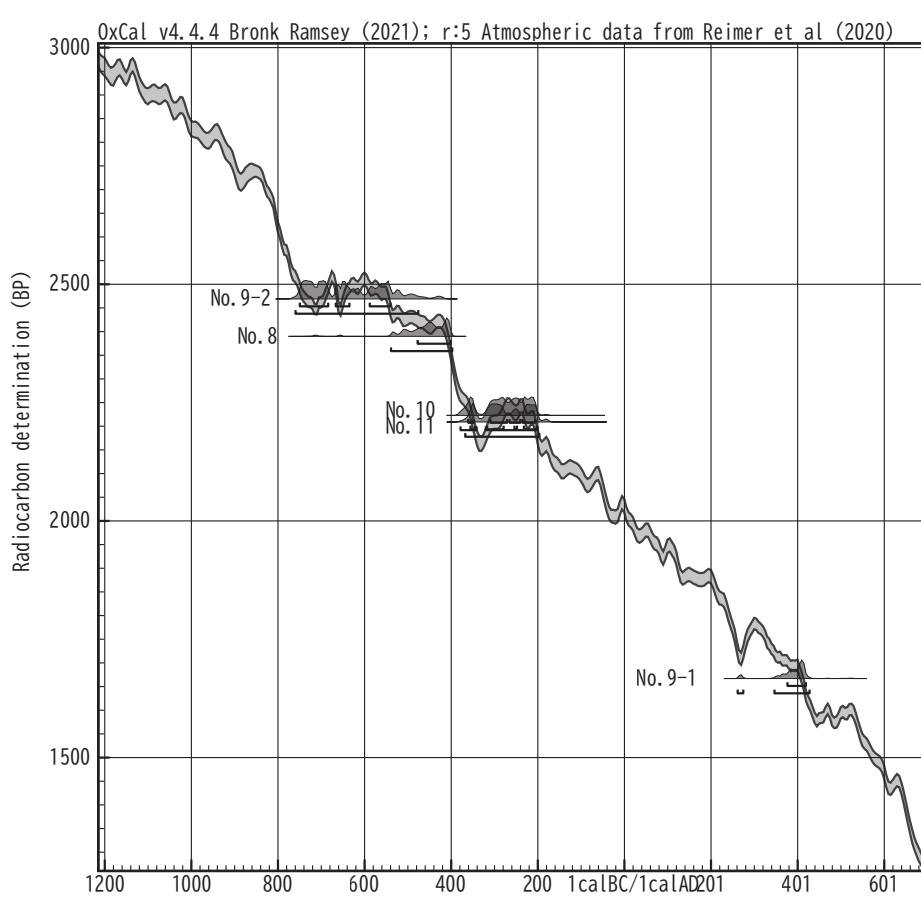
4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5)暦年の計算には、OxCal v4.4を使用

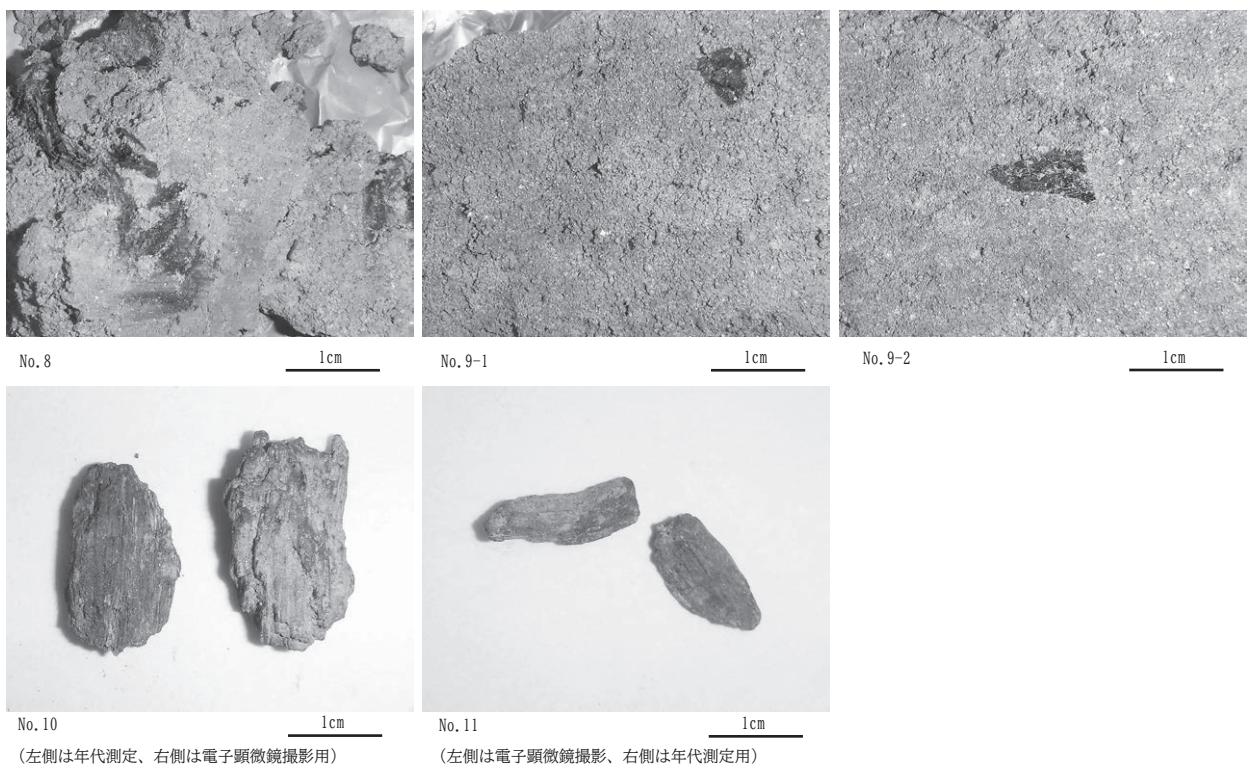
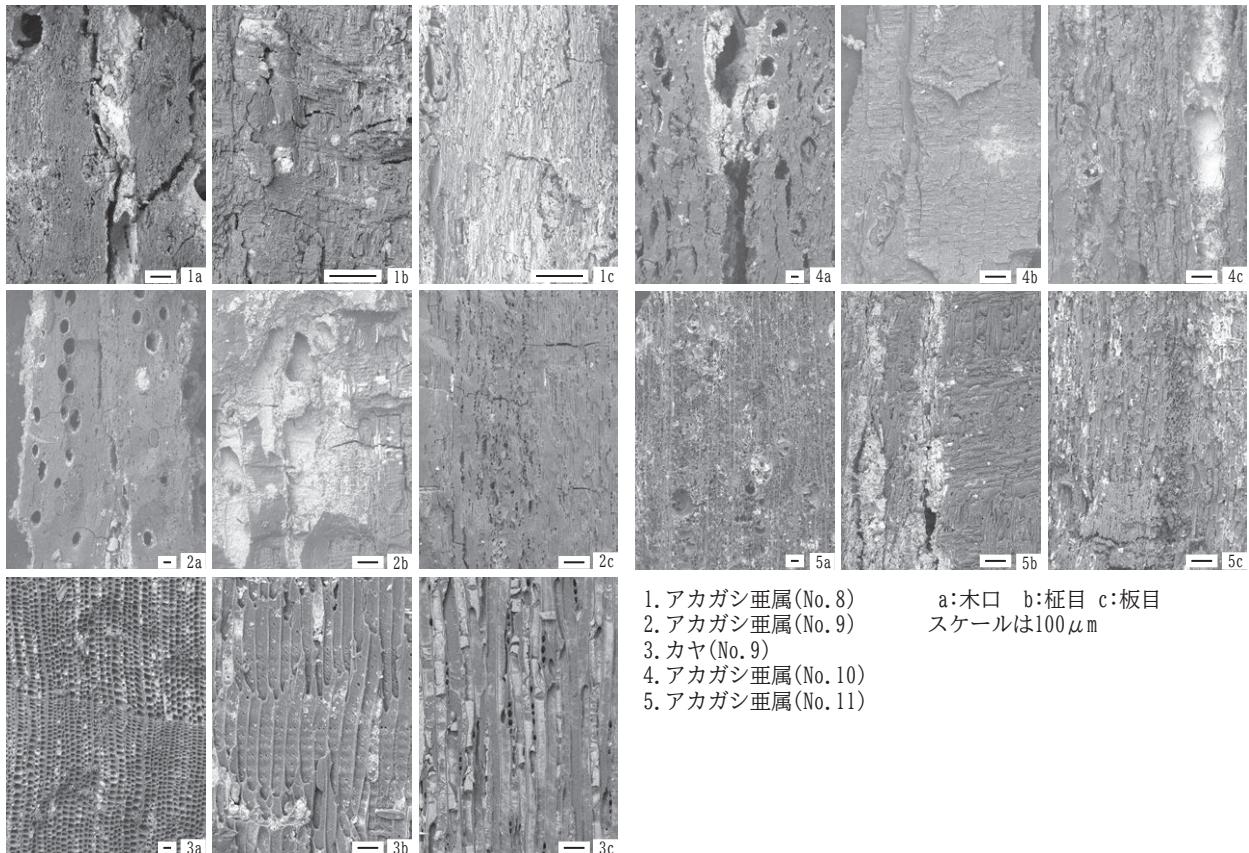
6)較正データセットは、IntCal20を使用。

7)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である



第38図 暦年較正結果



第39図 年代測定用試料

とが多い木材である。

分析した木材は、奈良時代と思われる遺構から検出されたが、アカガシ亜属は弥生時代、カヤは古墳時代の年代値を示す。いずれも比較的硬い木材であることから、炭化しても残りやすく、再堆積の可能性も含め検討していく必要がある。

(2) 土壤分析（植物珪酸体）

分析試料は、奈良時代の大型建物跡のピットであるSB 37-P12掘方（No.1）、SB 37-P1掘方（No.2）、SB 37-P5掘方（No.3）、SB 38-P1掘方（No.4）、SB 39-P8B掘方（No.5）の5点である。比較試料として中世の遺構からSD 25下層（No.6）、SK 40下層（No.7）から2点を分析し、合計7点である。

①分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、その他のイネ科由来植物珪酸体、イネ科以外（カヤツリグサ科などの草本類、樹木珪酸体等）の植物珪酸体を近藤（2010）の分類などを参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量の層位的变化を図示とともに、相対的な変化量も示す。

②結果

結果を第9表、第40図に示す。大型建物のピット内試料5点は組成が類似する。植物珪酸体の保

存状態は不良で、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体を合わせた土壤1gあたりの含量は最大で約1万個/g、少ない試料で約3千個/gである。短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともにメダケ属を含むタケ亜科が多いのが特徴である。その他スキ属やイチゴツナギ亜科を少量含む。イネ属等栽培植物は未検出である。ブナ科由来と思われる樹木珪酸体がわずかにみられる。

中世遺構の土壤1gあたりの含量は、SD 25の植物珪酸体量が多く約3万2千個/g、一方SK 40は約6千個/gである。ともにイネ属の植物珪酸体が検出され、穎や单細胞に由来する珪化組織片も検出される。また、コムギ、オオムギなどの栽培種を含むコムギ連の短細胞珪酸体がみられる。その他の試料は大型建物跡のピット内試料と類似し、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともにメダケ属を含むタケ亜科が多い。

③考察

土壤1gあたりの植物珪酸体量は試料ごとに異なるが、大局的にみると、植物珪酸体全体の産出量と各分類群の産出量には相関があり、全体の産出量が多くなると各分類群の産出量も増える。これは、植物珪酸体の産出量が、堆積時の取り込まれる量やその後の続成作用による分解等、化石の形成過程（タフオノミー）の影響を強く受けているためとみられる。

奈良時代、中世の試料ともメダケ属を含むタケ亜科が多い。メダケ属は、メダケをはじめ暖地に多くの種類を多く含む。メダケ属を含むタケ亜科は、河川沿いや崩壊地、伐採地など植生が失われた場所に先駆的に侵入して生育する。遺跡周辺には、急傾斜の山地や、河川沿いの地形が存在することから、このような場所にメダケ属を含むタケ亜科が生育していたと思われる。なお、タケ亜科の植物珪酸体は、他の珪酸体に比べ産出量が多く風化にも強いため（近藤, 2010; 杉山・藤原, 1986）、他の種類よりも残しやすいことが知られている。そのため、タケ亜科の周辺植生における比率は植物珪酸体の量比ほど多くはなかったと思われる。その他、スキ属やイチゴツナギ亜科など開けた草地をつくる種類も検出される。本地域には「薦生牧」が存在した可能性が指

第9表 植物珪酸体含量

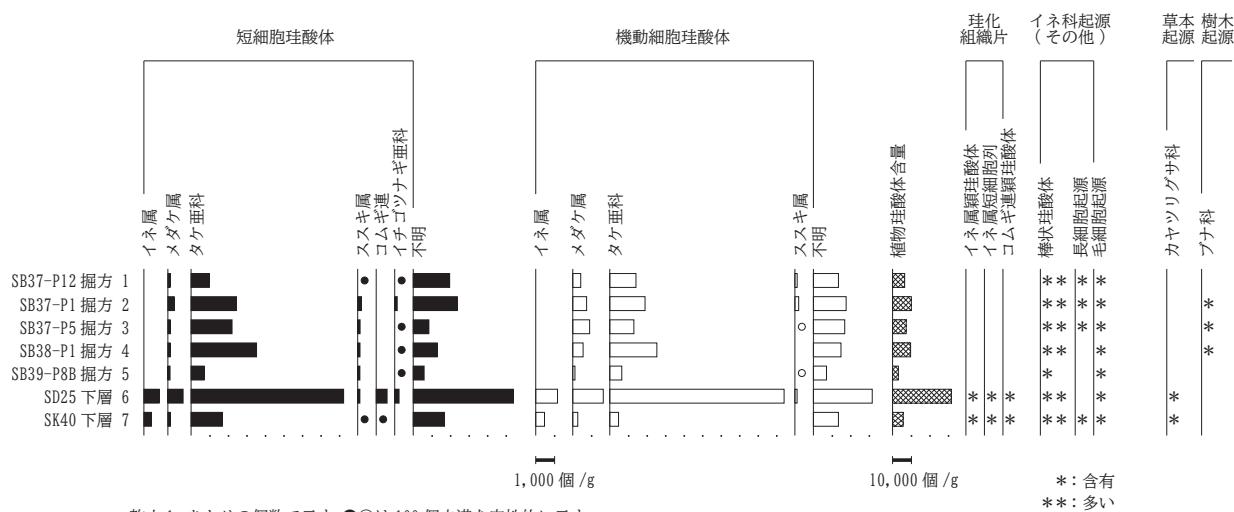
(個/g)

分類群	SB37-P12掘方 1	SB37-P1掘方 2	SB37-P5掘方 3	SB38-P1掘方 4	SB39-P8B掘方 5	SD25下層 6	SK40下層 7
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ属	-	-	-	-	-	800	400
メダケ属	100	300	100	100	100	800	100
タケ亜科	1,000	2,400	2,200	3,500	700	8,200	1,700
ススキ属	<100	200	100	100	100	100	<100
コムギ連	-	-	-	-	-	600	<100
イチゴツナギ亜科	<100	100	<100	<100	<100	200	-
不明	2,000	2,400	800	1,300	600	5,400	1,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ属	-	-	-	-	-	1,200	500
メダケ属	400	700	900	600	100	1,600	300
タケ亜科	1,400	1,900	1,300	2,500	600	9,400	500
ススキ属	100	200	<100	-	<100	100	-
不明	1,400	1,800	1,700	1,500	700	3,200	1,400
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,200	5,500	3,400	5,100	1,600	16,200	3,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,300	4,600	4,000	4,600	1,500	15,500	2,700
植物珪酸体含量	6,500	10,100	7,400	9,700	3,100	31,700	5,600
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	-	-	-	-	-	*	*
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	*	*
コムギ連穎珪酸体	-	-	-	-	-	*	*
イネ科起源(その他)							
棒状珪酸体	**	**	**	**	*	**	**
長細胞起源	*	*	*	*	-	-	*
毛細胞起源	*	*	*	*	*	*	*
その他							
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	*	*
樹木起源珪酸体							
ブナ科(はめ絵パズル型)	-	*	*	*	-	-	-

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

<100 : 100個/g未満

- : 未検出, * : 含有, ** : 多い



乾土 1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

第40図 植物珪酸体含量

摘されているが、これと矛盾しない結果である。

奈良時代の試料からは、ブナ科と思われる樹木珪酸体が検出される。樹木の植物珪酸体は常緑広葉樹など革質な葉に形成されることが多い。本地域はシイ・カシなど常緑広葉樹林が生育する気候帯である。このため、メダケ属やブナ科の植物珪酸体、アカガシ亜属の炭化材など暖地に多い植物化石が検出されることと矛盾しない。

中世の遺構からは、イネ属が検出される。葉に形成される短細胞、機動細胞珪酸体に加え、葉の一部である珪化組織片、稻粋に由来する植物珪酸体が検出されることから、周辺における稻作が推定される。これらの植物珪酸体は作土の混入や、生活資材として利用された稻藁や稻粋に由来すると思われる。また、コムギ連の短細胞珪酸体もみられる。コムギ連

には先述したように栽培種のムギ類を含むことから、当時の栽培が示唆されるが、形態から近縁の野生種との区別が付かないため、稻作のようにはっきりとはいえない。しかしながら、コムギ連の植物珪酸体の挙動が栽培種であるイネ属と似ていることから、栽培に由来する可能性が高いのではないかと思われる。

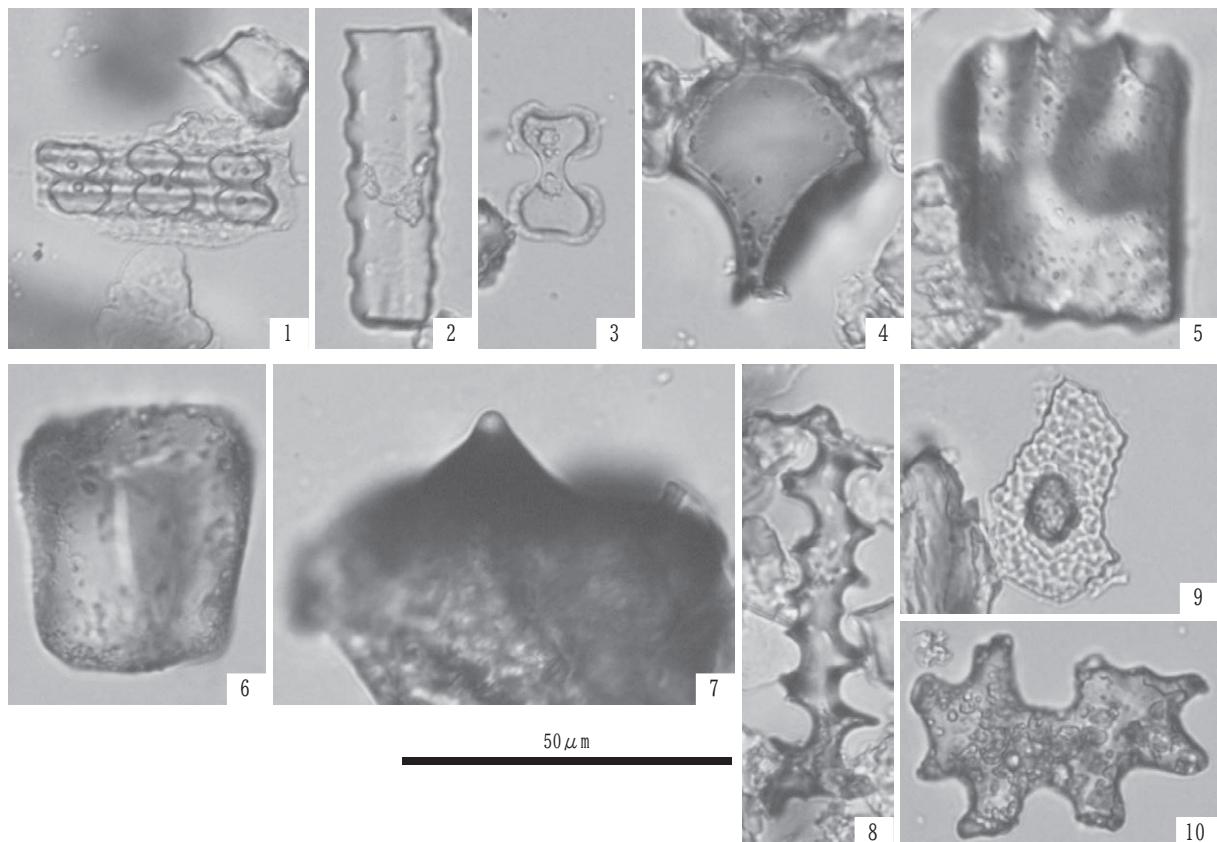
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

松元美由紀・田中義文・馬場健司)

(3) 金属製品成分分析調査

①資料と方法

調査した資料は鍔 1 点である(第42図)。鍔の責金、象嵌、地金、箔の4箇所で蛍光X線分析を行い、元素を同定した。装置は AMETEK 製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置 SPECTRO MIDEX04 を用いた。



1. イネ属短細胞列(SD25下層;6)
2. コムギ連短細胞珪酸体(SD25下層;6)
3. ススキ属短細胞珪酸体(SB37-P5掘方;3)
4. イネ属機動細胞珪酸体(SD25下層;6)
5. メダケ属機動細胞珪酸体(SB37-P1掘方;2)
6. ススキ属機動細胞珪酸体(SB37-P1掘方;2)
7. イネ属穎珪酸体(SD25下層;6)
8. コムギ連穎珪酸体(SD25下層;6)
9. カヤツリグサ科葉部珪酸体(SD25下層;6)
10. ブナ科葉部珪酸体(SB38-P1掘方;4)

第41図 植物珪酸体

②分析結果

成分分析結果（第10表）を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。結果から鉄地に銅の責金が嵌め込まれ、銀で梅紋様の象嵌が施されている。箔についてはアルミニウムが主成分として検出されているが、由来については不明である。

（株式会社吉田生物研究所）

第10表 成分分析結果

元素	責金	象嵌	地金	箔
Al	-	-	-	87
Si	-	-	-	6.21
Fe	1.26	4.23	97.5	5.24
Cu	83.36	35.25	-	-
Ag	-	59.28	-	-

単位：(wt%)

引用文献

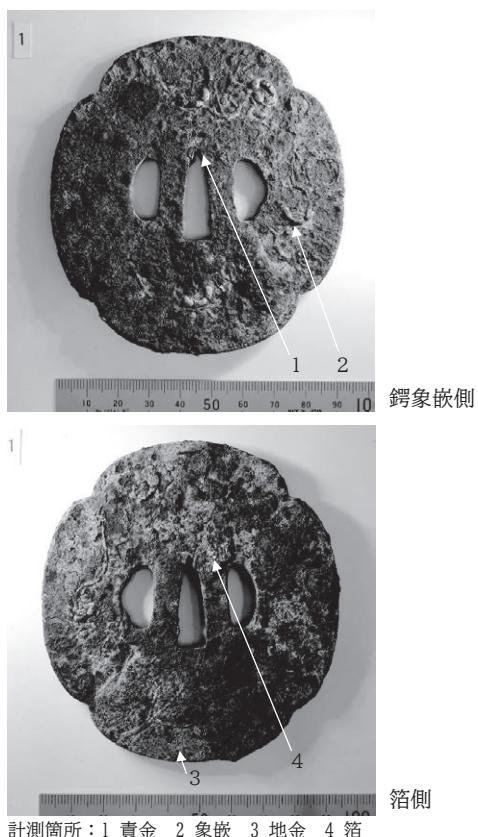
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 近藤鍊三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., &

Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修），海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p. 杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, 69-84.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修），海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



第42図 成分分析対象箇所

VI 総 括

1. 遺跡形成過程と古環境

範囲確認調査・発掘調査の結果、薦生遺跡の基盤層は、名張川河床の礫層に氾濫堆積物が墨重することで形成されており、この氾濫堆積物は名張川の攻撃面である段丘の南側に自然堤防を発達させていることがわかった。3区基盤層中には黒ボク状の暗色帯がみられ、暗色帯が形成される完新世以降、度々シルトや砂質シルトが堆積したようである。

縄文時代の遺物は、遺跡北側に多く散布しているようだ（第IV章）、今回の調査地内では縄文時代の遺構は確認できなかったが、基本層序II層から縄文時代後期の土器、石器が若干出土している。詳細は不明ながら、薦生遺跡は縄文時代早期の遺跡としても知られており⁽¹⁾、今後の調査でも、少なくともこの暗色帯下までは遺構・遺物の有無を確認していく必要があるだろう。

調査地は基盤層が砂質のシルトや細砂であるため、調査中、降雨後に地表が帶水することがなった。近代に至るまで、付近は畠（畠）地として利用され、水田は一部の谷水田に限られていたが、こうした水文環境が弥生時代から飛鳥時代、平安時代の遺構・遺物の希薄さに現れていると考えられる。

薦生遺跡の時代ごとの遺構の変遷は第43図に示した。

2. 奈良時代の薦生遺跡

（1）長舎の性格

S B 37は桁行10間、柱間寸法3.0m（約10尺）等間の大型建物で、S B 39も桁行6間の長舎形式（以下、単に「長舎」とよぶ）である。また、全容が不明なS B 44も梁行に対して桁行の長い建物と推測され、長舎の可能性がある。

長舎の全国的な集成研究によれば、古代の長舎は一般集落ではなく、官衙および関連遺跡、寺院に特有の建物形式とされる⁽²⁾。長舎の機能は様々だが、官衙では、平城宮朝堂院や国府政庁のようにコ字・

口字形に配置され儀礼空間を構成することが多い。寺院では僧房など大人数が使用する施設の例がある。

この他では、交通に関わる遺跡の例が多い。古代交通史上では、山陽道山崎駅（河陽宮）の「十間屋」がよく知られており⁽³⁾、近年発見された滋賀県黒土遺跡の長大な長舎（桁行15間、長さ45m）も古代東山道に関わると推測されている⁽⁴⁾。この他、平城宮左右馬寮（厩舎と推定）のように、馬匹の管理に関する長舎があることも、牧との関係で注目される。薦生遺跡の長舎も、遺跡内を通過した古道に関連する施設の可能性は高いといえよう。

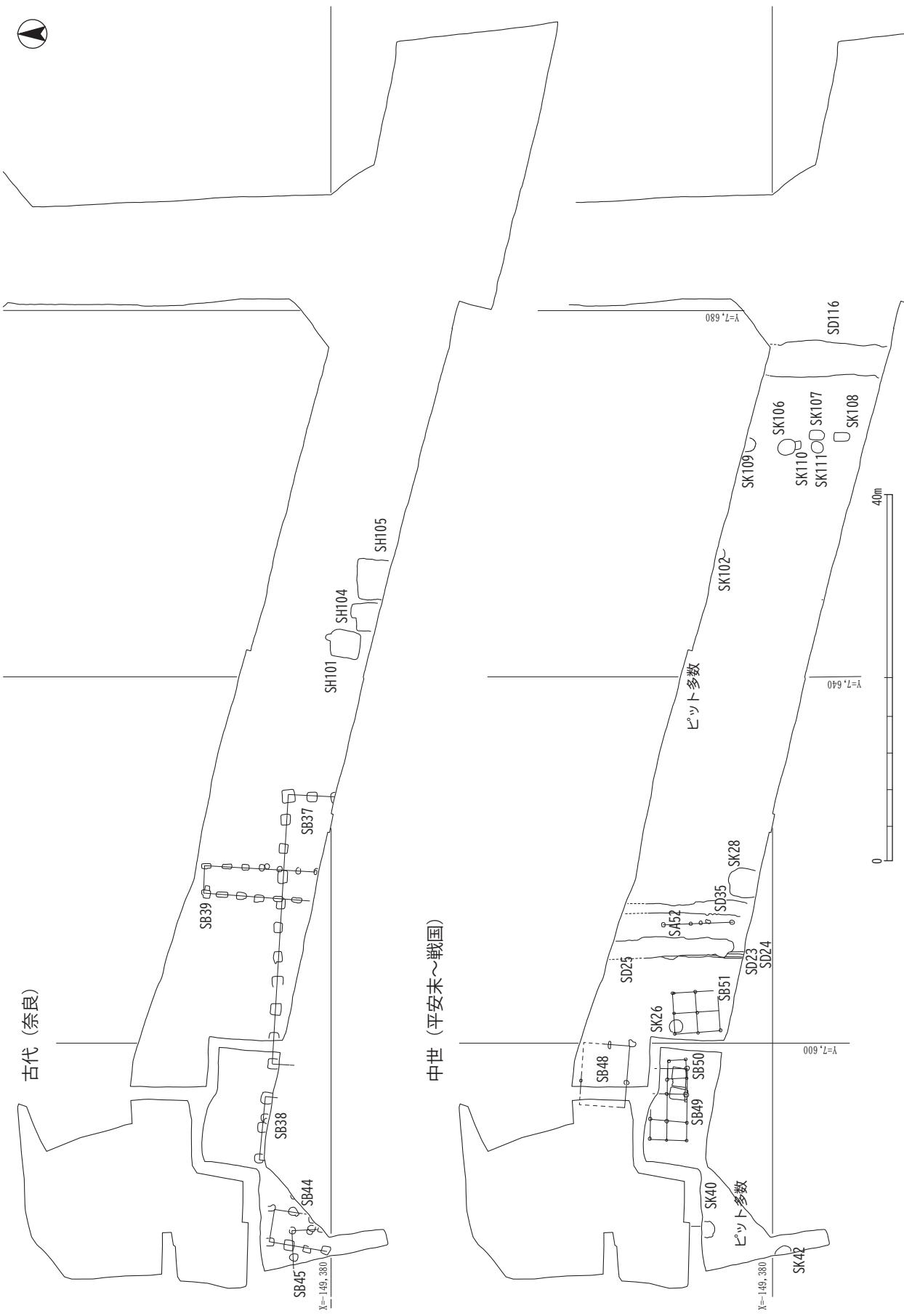
三重県の官衙では、鈴鹿市伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）S B 05 政庁脇殿（推定13間）、多気郡明和町斎宮跡S B 8539（9間）、四日市市久留倍官衙遺跡（朝明郡衙または朝明駅家）S B 437・S B 439（ともに14間）、官衙関連遺跡では四日市市菟上遺跡S B 217（9間）、鈴鹿市天王遺跡S B 306（8間）、津市六大B遺跡S B 25・27（7間）の例があるが、桁行10間以上の長舎となると、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）、久留倍官衙遺跡の2遺跡、つまり令制下の国・郡衙に限定されるのである⁽⁵⁾。

このうち、久留倍官衙遺跡の長舎（S B 437・439）は桁行14間、梁行3間で、柱間寸法は2.1m等間である⁽⁶⁾。薦生遺跡S B 37は柱間寸法が3.0m（約10尺）等間であるので、久留倍官衙遺跡S B 437等より長大な建築部材を要したと推測される。また、ピット掘方もS B 37がより大型である。したがって、S B 37は正規の官衙建物と同等か、それ以上の格式を備えた建物であるといえよう。なお、桁行10間以上で柱間寸法10尺以上の建物は、平城宮や国府を除くと畿内および周辺でも非常に少ない。

他方で、S B 37柱痕跡や柱あたりから復元される柱の直径は最大でも25cmで、官衙政庁や頓宮・離宮の中枢建物ほどの格式はなく、S B 37は実用性の高い建物であったと推測される。

（2）掘立柱建物の変遷

奈良時代の掘立柱建物群は、概ね正方位を指向するが、僅かな軸方位差や遺構の切り合いなどから、



第43図 遺跡の変遷(1:600)

少なくとも3時期の変遷が想定される（第44図）。建物時期決定の材料が乏しいため、各期に併存した建物や建物の前後関係は推定にとどまるが、SB37からSB39への変遷を軸として、大型でピット掘方形が方形かつ整然となる建物から、小型で掘方形が崩れていき、礎盤石が小型化した建物に変わると捉え、建物変遷案を提示する。

・I期：SB37

SB37とSB38は、同時期とするとケラバと軒先が干渉する可能性が高く、軸方位も若干異なることから別時期の建物と捉えるが、両者の前後関係も含め、今後の調査による検討を要する。

・II期：SB39、SB38、SB44

長舎SB37廃絶後、長舎SB39が機能した段階で、南北棟が主体となる。SB39とSB38・SB44は軸方位を若干違えており、さらに細かい建物の時期差があった可能性もある。

・III期：SB45、その他円形ピットの掘立柱建物

SB38付近など、ピット掘方が円形で、中世のピットよりも大型の掘方をもつもの。ピット底面には小ぶりの礎盤石がみられる。SB38との重複関係から、こうした建物が最も新しい様相のものと考える。

（3）遺構の空間構成

先の建物変遷案からは、今回検出した長舎・その他の建物が官衙政府のようにコ字・口字型に配置され、儀礼のための空間を構成するとはいがたい。また、掘立柱建物群は段丘南西端の最高所にあり、この付近に若干の方形地割を想定することも不可能ではないが（写真図版32下）、未調査地の南側に広大な儀礼空間を想定することは地形上困難であろう。さらに、SB37等からやや離れてはいるものの、SH101などカマドを有する竪穴建物が付近に存在することも考慮する必要がある。

遺跡の全体像を考える上では、遺跡北側にも奈良時代の遺物が散布していることが重要であろう（第IV章）。交通関連の官衙では、東西方向の道路の北側に主要な施設や区画を配置し、道路が南面する山陽道山崎駅の例がよく知られており、薦生遺跡でも調査地より北側の広い平坦地に、枢要な建物が存在した可能性は十分にあるといえよう。

また、このように遺跡全体を捉えると、長舎形式の建物が複数かつ列状に配置される久留倍官衙遺跡の遺構配置が参考になる。久留倍官衙遺跡は大きく3期の変遷があり、口字形の郡衙政庁（I期）から、長舎主体（II期）の時期を経て、正倉院（III期）へと変遷する。このうちII期が奈良時代中頃と推定され、聖武天皇行幸時の朝明頓宮である可能性も指摘されており⁽⁷⁾、薦生遺跡でも行幸など突発的な人馬の移動に関わって、遺跡の各所で長舎が整備されたことも想定すべきであろう。

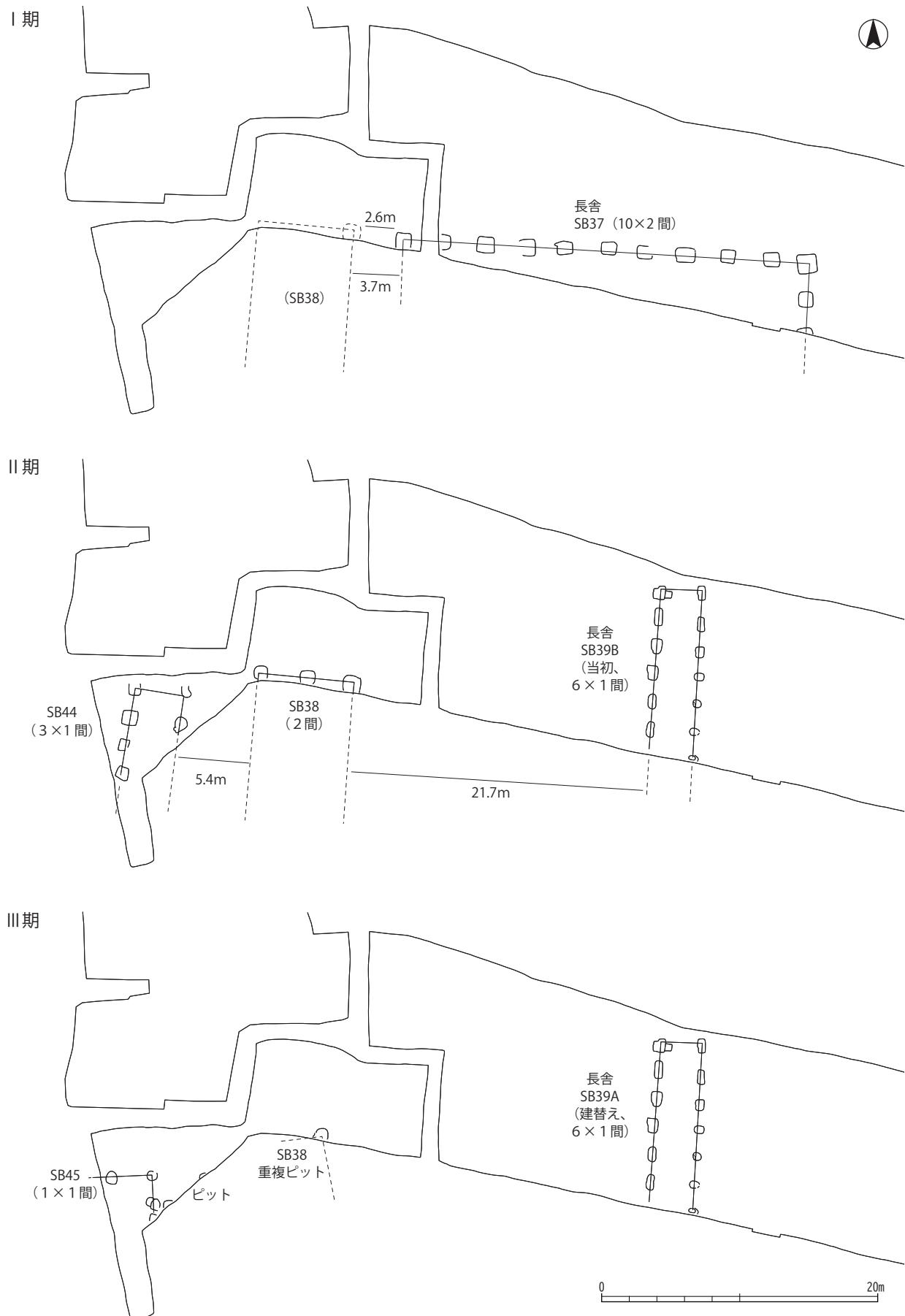
なお、現状で奈良時代古道の具体的な位置は不明であるが、明治時代の新田街道は調査地（1区）付近からいったん段丘北端へ向かい、笠間川へと至っている（写真図版32）。これは、現道のある丘陵裾付近は谷が接しており、段丘北端がより安定した微高地となっているためと考えられる（第III章第8図）。奈良時代の古道も、この安定した薦生遺跡の北西部分を通ったのち、段丘東端の渡河点（現在の薦生橋付近）へ向かった可能性があろう。

（4）奈良時代の薦生遺跡の性格

現状では、墨書き器などの文字資料が出土しておらず、遺跡の性格を具体的に示す資料が乏しい。また、建物群も数期の変遷が想定され、遺跡内の調査面積もまだ少ないことから、遺跡・建物とも性格を特に限定せず、様々な可能性を俎上に載せておくべきである。例えば、名張郡や夏見郷の出先機関（下級官衙）、交通や伝馬に関わる中継地や布施屋、名張川水運の拠点（筏流しの木津）、毛原廃寺など寺院の造営や解体（壊運）に関わる施設、木材を伐り出す杣や牛馬を飼養する牧の管理施設、藤原氏や酒人内親王が夏見郷に領有していた鮎漁の築瀬・栗林といった山・野・河の恵みの集散地などである。

しかしながら、平安時代に遺跡が存続せず、また10・11世紀の名張郡司も薦生の既得権益を主張していないことから、その性格は奈良時代に固有のものであり、名張郡司の直轄地だったとも考えにくい。加えて、出土遺物の少なさから、官人や杣人等が常駐し、文書事務や労働に従事したかは疑問である。

毛原廃寺など周辺遺跡の動向を踏まえると、遺跡内の古道が都祁山道の有力推定ルート（笠間川ルート）であることが、薦生遺跡を評価するうえで最も



第44図 奈良時代建物の変遷 (1:400)

重要な要素といえよう。また、奈良時代に固有の事情とは、平城京の存在であり、都祁山道が奈良と伊賀・伊勢を結ぶ短捷路だったことにほかならない。

都祁山道は、天平12年（740）の聖武天皇関東行幸や、斎王となった久勢女王、井上内親王の群行や帰京にも利用されたとみられ⁽⁸⁾、これら特定の歴史的事跡に伴う布施屋や名張頓宮として、各期の建物が突発的、あるいは計画的に整備されたことは十分に考えられよう。斎王の群行や帰京では、渡河点（横河）での禊が重要であり、この点でも薦生遺跡の立地は注目されるのである。なお、聖武行幸記事では「至名張郡」（『続日本紀』）とあり、通説では行幸関係記事中の「至○○郡」は郡衙に宿したと解される⁽⁹⁾が、この点は改めて検討を要する。

翻って、薦生遺跡の調査成果は、都祁山道＝笠間川ルートとする説の蓋然性を高めるものといえる。

（5）牧・関・離宮・頓宮

中山章氏は、薦生牧・広瀬牧の立地を検討するなかで、古代関・駅家と牧の立地を比較検討し、交通ルート上である、官衙的施設をもつ、地理的・人工的に閉鎖された空間であるという共通点を見出している⁽¹⁰⁾。中山氏の視座は、古代関や駅家のみならず、奈良時代の離宮・頓宮の立地についても応用することができよう。

薦生遺跡は交通の至便な場所にありながら、蛇行する名張川と山地・丘陵によって周囲と隔絶された静謐な土地であり、その景観は、例えば聖武天皇が造営した恭仁宮・紫香楽宮や行幸時の吉野（芳野）離宮（奈良県宮滝遺跡）、頓宮推定地（伊勢河口頓宮など）と非常によく似ている。なお、東野治之氏は、こうした聖武天皇の足績を「山の中の小天地に退くという気分が濃厚」であると評している⁽¹¹⁾。

吉野（芳野）離宮の発掘調査⁽¹²⁾によれば、聖武朝の主要な遺構は段丘内の高所ではなく、河岸沿いに整然と配置され、方位も南面していない。こうした遺構配置は薦生遺跡を考える上でも参考になる。

天平8年（736）の聖武天皇吉野行幸は、わずか2週間の行幸であるが、二条大路出土木簡からは膨大な経費と平城京での文書事務が発生したことがうかがえる⁽¹³⁾。また、天平12年（740）の聖武天皇関東行幸は、聖武天皇の人物研究や滋賀県膳所城下

町遺跡（推定禾津頓宮跡）の発掘調査成果などから、極めて周到な計画のもと実施されたと考えられるようになり⁽¹⁴⁾、ごく短期間の頓宿でも大規模な施設整備を要した可能性は高い。また、頓宮の立地は天皇好み（山中の小天地や風光明媚な土地）を強く反映しているとみられる。

天平12年の聖武天皇行幸が、都祁山道を経て薦生地内を通ったのであれば、薦生に名張頓宮が置かれ、短期間の大規模な施設整備が生じた可能性もあり、奈良時代の行幸や頓宮の研究に、薦生遺跡の調査成果が与える影響は大きいものがある。

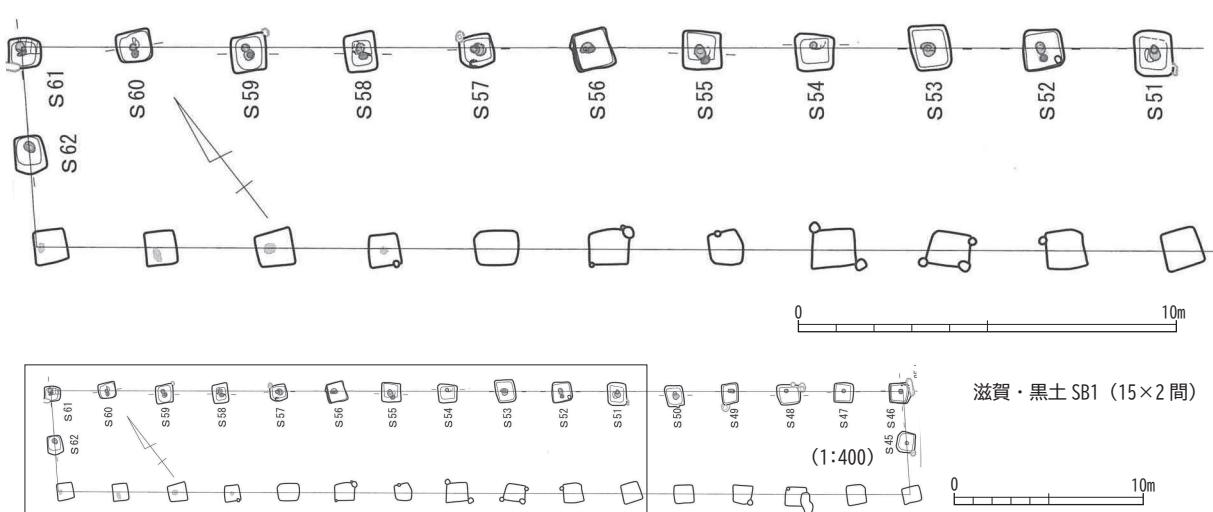
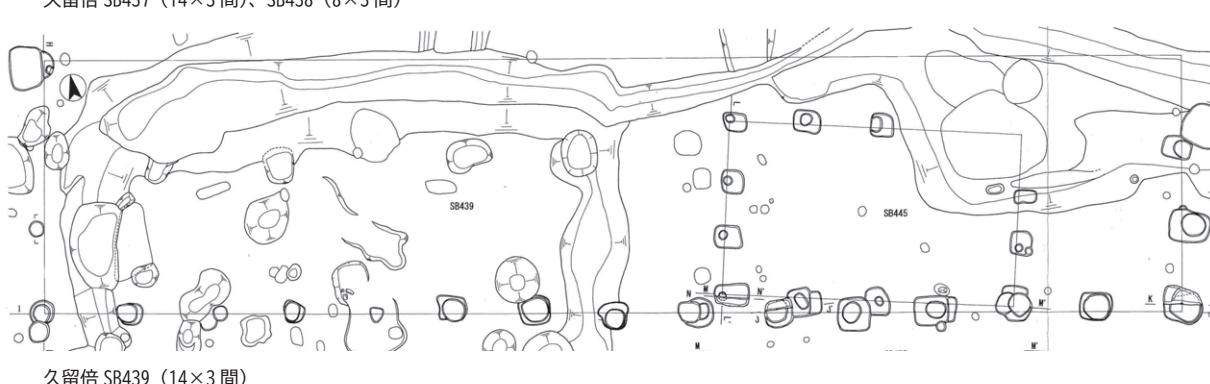
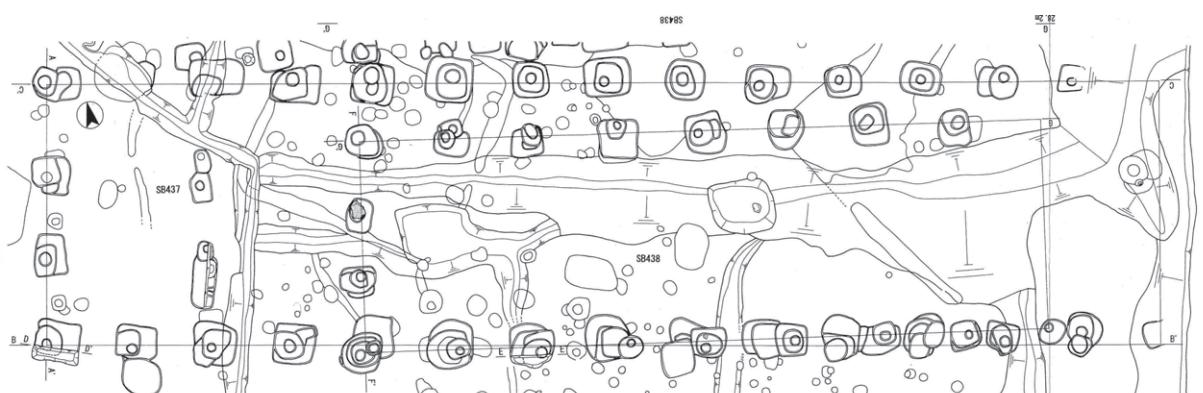
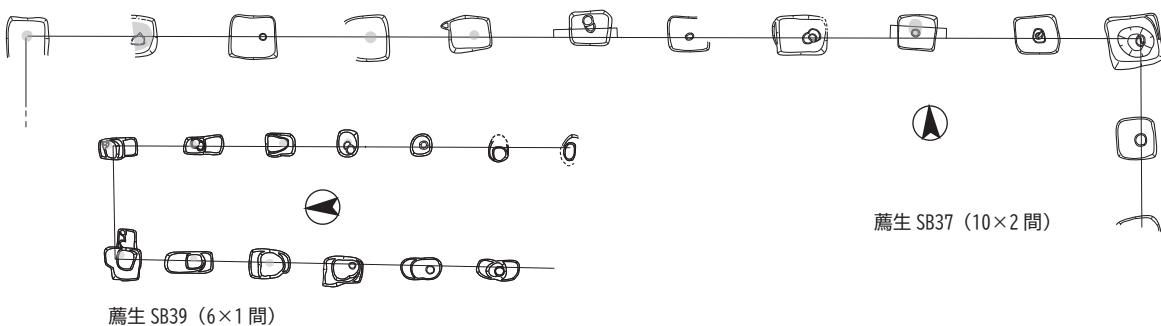
3. 平安時代の「薦生牧」

調査地の河岸段丘は名張川の河川敷から連続しており、河畔は洪水の影響で植生の遷移が強制的に抑制され、草原的な環境が常時保たれている（写真図版1）。河川と山地により周囲から隔絶された地形や草原的な環境は、牛馬、特に馬匹の生産や備蓄に適していたと考えられる。

土壤の植物珪酸体分析（第V章）の結果、奈良時代・中世の遺構とも、メダケ属を含むタケ亜科が多くみられた。タケ亜科は河川沿いや崩壊地、伐採地など植生が失われた場所に先駆的に侵入することが知られている。他に、ススキ属など開けた草地をつくる種類も検出された。

一方、牧の経営に関連するような穀物（イネ属・コムギ連）の植物珪酸体や組織片は、中世（平安時代末から鎌倉時代）の遺構に集中して認められた。少なくとも調査地付近では、古代以前にイネやコムギなどの飼料を日々的に栽培したり、馬の使役や放牧に大量の飼料を供給していた形跡は認められなかった。また、調査地内では、平安時代（9～11世紀）の遺構・遺物はみられない。

薦生牧は令制、延喜式制下の牧ではなく、興福寺僧都円珍から藤原朝成・經通に伝頒されたいわゆる私牧である。東大寺の所領拡大の過程で、東大寺と藤原氏の争論となった牧ではあるが、牧内に谷水田や荒廃田などの多様な土地を含んでおり、段丘全体を放牧地とするような牧とは考えがたく（第II章）、莊園立券のための名目上の牧であった可能性も指摘



第45図 SB37と長舎の事例 (1:200)

されている⁽¹⁵⁾。今回の発掘調査では平安時代（9～11世紀）の遺構・遺物は皆無であり、薦生牧の経営の実態を知ることは難しい。現状では、薦生牧は河畔の草原的環境をそのまま活かした、放飼のための小規模な牧であった可能性が高いといえよう。

今後の調査で遺跡内の地点差や、平安時代の遺構・遺物の分布をさらに追及していく必要があろう。

4. 中世の薦生遺跡

（1）平安時代末から鎌倉時代

薦生遺跡で確認された中世の遺構・遺物は、多くが平安時代末から鎌倉時代のものである。この時期は、梁・桁行2間前後的小規模な建物がまばらに展開しており、SK 106など野井戸とみられる土坑が点在する状況から、調査地は耕地に付随する小屋や小規模な建物が散在するエリアであったと推測され、道路建設前や明治期の絵図（写真図版32）とさほど変わらない景観が想定できる。SD 25・SD 35などの溝は、概ね正方位に沿っており、中世から現代まで土地の地割が踏襲されていることが知られる。

出土遺物では、土師器・瓦器などの供膳具が目立ち、鍋などの煮炊具があまり出土していない。このことも、主屋などの生活拠点が別にあることを示唆しており、集落の中心は、調査地以北の現集落付近に想定することができる。

平安時代末から鎌倉時代は、東大寺文書に「薦生庄」の名が現れる時期であり、史料上、13世紀には麦作が行われていたことが確実である（第Ⅱ章）。平安時代に空閑地（放牧地）や荒廃田を含む薦生の再開発が、東大寺領化により進んだとも考えられ、発掘調査の成果と文献史料の記述は整合的である。

中世における遺跡内の地点差や、集落の形成過程を追求し、薦生荘の実態を明らかにしていく必要があろう。

（2）南北朝から戦国期

調査地内では14世紀以降の遺構は少ないものの、大和産瓦質土器の風炉が出土したことは特筆され、薦生地内に土豪などの有力者層が存在したことがうかがえた。文献では、黒田悪党に数えられる薦生荘民の名がみえ、彼らは庄田中世墓や峰山城の造営主

体でもあったと推測される。

薦生地内には中世城館の副野氏堡が所在するほか、明治期の地籍図によると2区aの北側隣接地に水路で方形に囲まれた区画があり、この付近にも中世城館が存在する可能性がある（写真図版32下）。近世の遺物ではあるが、2区aから刀鍔の良品が出土したこと、こうした地域の有力者層の存在を物語る。

3区で検出したSD 116は、いわゆる薬研堀であることや、西側を防御する意識がみられることから、調査地西方の峰山城跡に関わる戦国期の堀と推定しているが、出土遺物がなく時代を確定できていない。奈良時代の建物群や、平安時代の薦生牧に関連する施設の可能性も残され、今後の調査で掘削・廃絶時期を確定させる必要がある。

なお、今回の調査では、近世、特に18世紀に入り新田街道（現：県道上笠間八幡名張線）の付近で土地造成や遺構掘削が盛んになったことがうかがえた。道沿いに家屋が立ち並ぶ街村的な景観は、主に近世に形成されたものであろう。

5. 調査のまとめ

以上の総括を踏まえ、発掘調査の成果と薦生遺跡の特質を箇条書きで列挙する。

- ・遺跡は名張川の河岸段丘に立地する。
- ・調査地は名張川の氾濫堆積物が形成した自然堤防上にあり、段丘面で最も標高が高い。
- ・奈良時代の大型建物が複数みられた。SB 37は桁行10間、SB 39は桁行6間の長舎である。特に、SB 37は郡衙の長舎と同等かそれ以上のもので、異例といえる。
- ・建物は3時期程度の変遷が想定され、SB 39以外は短期間で廃絶する。
- ・奈良時代の官衙関連遺跡が新たに確認され、古代の交通や地方行政機構の実態を知るうえで重要な成果が得られた。
- ・笠間川ルートが奈良時代の都祁山道である蓋然性がより高まった。
- ・奈良時代の遺物は遺跡の北側にも散布している。
- ・植物珪酸体の分析から、牧の經營に影響するような穀物（イネ属・コムギ連）の痕跡は、中世（平

安時代末から鎌倉時代）以降に集中する。古代以前はタケ亞科などが繁茂する、河畔の草原的環境であったとみられる。

- ・平安時代（9～11世紀）の遺構・遺物はみられない。「薦生牧」は河畔の地形や草原的な環境を放飼に利用した小規模なものか。
- ・平安時代末から鎌倉時代には小規模な建物や野井戸がみられ、東大寺領薦生荘の実態や成立過程を示す。
- ・14世紀以降は瓦質土器の優品（風炉）を有するような土豪が存在したと推測される。こうした土豪は、黒田悪党に加担した薦生荘民であり、庄田中世墓の造営主体でもあったと推測される。

6. 今後の課題と展望

今回の発掘調査により、古代名張郡の中心地から大きく離れた地域で奈良時代の長舎が確認された。

これまで、文献史や奈良県側の考古学研究では、笠間川ルートや薦生の重要性が議論されてきたが、改めて、大和都祁から笠間川を経て伊賀国内の薦生、名張美旗（身野）、青山（阿保）へ至る古代交通ルートの重要性を再認識する必要がある。

奈良時代建物の時期と変遷、遺跡の全体像はまだ不明な点が多い。建物を囲む柵・堀・溝等の遮蔽施設の有無や、古道の位置、古道の北側に儀礼の空間を有する、より重要な施設群が存在した可能性を検討しながら、今後の調査にあたっていく必要がある。

こうした薦生遺跡の空間構成や歴史的意義を考えるために、単に古代名張郡の官衙関連遺跡の動向をおさえるだけではなく、長舎建物や古代交通遺跡の研究、奈良時代の吉野（芳野）離宮の調査成果や、行幸頓宮推定地の調査成果、聖武天皇行幸、斎王の群行・帰京といった特定の歴史的事績も視野に入れていくことが必要である。奈良県側で現在進められている毛原廃寺の発掘調査成果も注視しながら、遺跡の検討を続けていきたい。

（櫻井）

1993年。

- (2) 奈良文化財研究所『長舎と官衙の建物配置』2014年。
- (3) 高橋美久二「山崎駅と駅家の構造」『長岡京古文化論叢』同朋舎出版、1986年。
- (4) 草津市教育委員会・(公財)滋賀県文化財保護協会『榊差遺跡・榊差古墳群・黒土遺跡発掘調査報告書』2021年。
- (5) 許2前掲 / 三重県埋蔵文化財センター『六大B遺跡（B～I地区）発掘調査報告』2006年 / 三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005年。
- (6) 四日市市教育委員会『久留倍遺跡5』2013年。
- (7) 山中章編『聖武天皇伊勢行幸地の総合的研究』（科学研究費報告書）2007年。
- (8) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道』第一巻、法藏館、1988年 / 市大樹「古代の交通」『三重県史』通史編 原始・古代、2016年。
- (9) 許8足利1988/青木和夫他校注『続日本紀』2（新日本古典文学大系13）、岩波書店、1990年 / 榎村寛之・廣岡義隆・山中章「鼎談 三重の万葉と歴史－天平12年の聖武天皇による関東行幸－」『行幸宴歌論』和泉書院、2010年。
- (10) 山中章「薦生牧・廣瀬牧に関する基礎的考察」『三重大史学』第20号、三重大人文学部、2020年。
- (11) 東野治之「聖武天皇の伊勢国行幸－遷都と大仏造立への一階梯－」『難波宮と古代都城』同成社、2020年。
- (12) 吉野町・奈良県立橿原考古学研究所『宮滝遺跡第70次発掘調査記者発表資料』2019年。
- (13) 奈良文化財研究所『地下の正倉院展 二条大路木簡の世界』2009年。
- (14) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『膳所城下町遺跡』2005年 / 許11前掲。
- (15) 延暦17年12月8日格では、山川藪沢の占有が禁じられるが、墓地と牧が例外とされていた。旧牧の地形を利用した放牧地を一部含め、周辺の土地を囲い込んで一円所領化を図った可能性のある例として、薦生牧・廣瀬牧が挙げられている（吉川敏子「大和国宇陀郡の古代牧二題」『文化財学報』第37集、奈良大学文学部文化財学科、2019年）。

註

- (1) 奥義次「三重県における押型文土器出土遺跡の分布動向」『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、



空中写真（県・市町共有デジタル地図空中写真 平成29年度撮影、上が北、矢印先が調査地）



遺跡遠景（南東から、矢印先が調査地）

写真図版2 (調査地遠景)



調査地遠景（第1次、東から）



1区・2区全景（上空から、上が北）



1区調査前風景（東から）



2区調査前風景（西から）



2区・3区調査前風景（南東から）

写真図版4 (1区)



1区東半（西から）



1区西半（南東から）



2区a 南半（南西から）



2区a 北半（北から）



2区b・c全景（南西から）



2区b・c掘立柱建物周辺（北東から）



2区b・c全景（東から）



同（西から）



3区a 全景（西から）



3区b 全景（写真右奥が中山神社、南から）



S B 37 検出状況（北東から）



S B 37-P1 土層（北西から）



S B 37-P2 土層（南から）



S B 37-P3 土層（南から）



S B 37-P4 土層（西から）

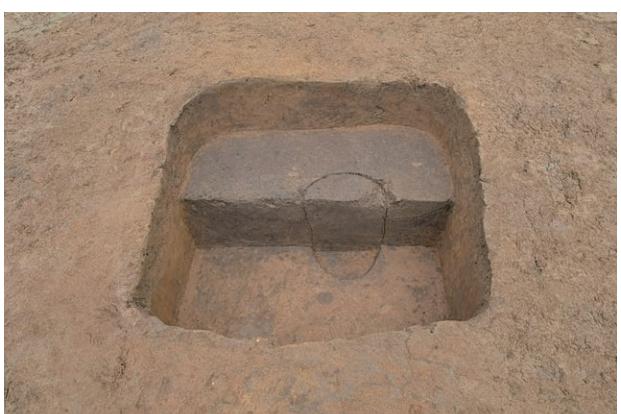
写真図版10
(掘立柱建物)



S B 37-P5 土層（西から）



S B 37-P10 柱抜取穴検出状況（東から）



S B 37-P12 土層（西から）



S B 37-P13 土層（北から）



S B 37-P1 完掘状況（南から）



S B 37-P2 完掘状況（南から）



S B 37-P3 完掘状況（南から）



S B 37-P4 完掘状況（南から）



SB 37-P5 完掘状況（南から）



SB 37-P6 完掘状況（南から）



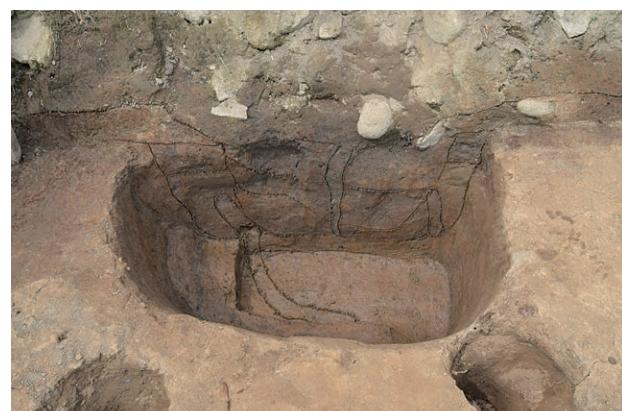
SB 37-P7 完掘状況（南から）



SB 37-P8 完掘状況（南から）



SB 37-P9 完掘状況（南から）



SB 37-P10 完掘状況（東から）



SB 37-P11 完掘状況（北から）



SB 37-P12 完掘状況（西から）



S B 37 完掘状況（北東から）



S B 37・39 完掘状況（上空から、上が北）



S B 39 検出状況（南西から）



S B 39-P1 土層（西から）



S B 39-P2 土層（西から）



S B 39-P3 土層（西から）



S B 37-P5・S B 39-P12 検出状況（南から）

写真図版 14
(掘立柱建物)



S B 39-P4 土層（西から）



S B 39-P7 土層（西から）



S B 39-P8A 土層（西から）



S B 39-P8B 土層（南から）



S B 39-P10 土層（西から）



S B 39-P11 土層（西から）



S B 39-P12 土層（東から）



S B 39-P1 完掘状況（西から）



S B 39 完掘状況（南西から）



S B 39-P8 完掘状況（北西から）



S B 39-P9 完掘状況（西から）



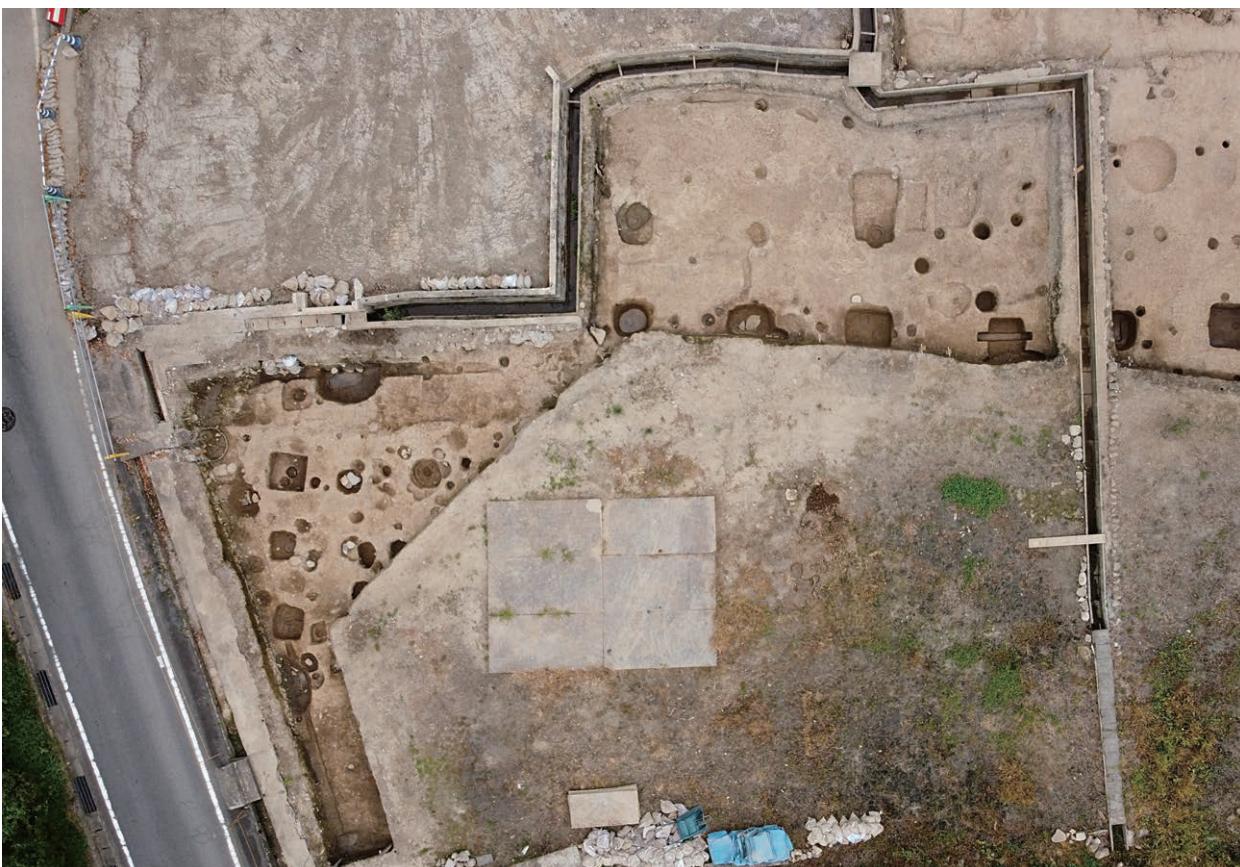
S B 39-P12 完掘状況（南西から）



S B 39-P10 完掘状況（西から）



2区b 全景（北東から）



S B 38・44・45 完掘状況（上空から、上が北）



S B 38-P2 硏盤石（北西から）



S B 38-P1 土層（北から）



S B 38-P3 土層（北から）



S B 38-P1 完掘状況（北から）



S B 38-P3 完掘状況（北から）



S B 44・45 検出状況（南から）



同（北西から）



S B 44・45 完掘状況（南から）



S B 44-P4 土層（西から）



S B 44-P5 土層（西から）



S B 44-P6 土層（西から）



S B 44-P3 完掘状況（西から）



S B 44-P4 完掘状況（北西から）



S B 44-P5 完掘状況（西から）



S B 44-P6 完掘状況（西から）



S B 45-P3 础盤石（南から）



S B 45-P1 土層（南から）



S B 45-P2 土層（東から）



S B 45-P1 础盤石（南から）



S B 45-P2 完掘状況（南から）



S B 49・50 (南東から)



S B 48・51 (南東から)



SH 101・104・105（北東から）



SH 101（北から）



SH 104 (北から)



SH 105 (北から)

写真図版24
(土坑・井戸)



SK 1 (東から)



SK 4~6・8~10 (東から)



SK 7 (東から)



SK 16 (東から)



SK 30・31・34 土層 (北から)



SK 13・14 土層 (西から)



SE 22 (南から)



SK 29 土層 (南西から)



SK 26（南東から）



SK 28（北から）



SK 40（南から）



SK 42（北東から）



SK 17・20（北西から）



SK 106～111（写真奥がSD 116、西から）



SK 106 土層（東から）



SK 108 土層（南から）



SK 109 土層（南から）



SK 111 土層（西から）



S D 25 (南西から)



S D 116 (南から)



下層確認1 土層（北西から）



下層確認2 土層（北西から）

写真図版29（下層確認・その他）



下層確認3（西から）



下層確認3土層（北から）



S B 37-P1 土壤試料採取位置（北から）



S B 37-P12 土壤試料採取位置（西から）



S B 38-P1 土壤試料採取位置（北から）



S B 39-P8B 土壤試料採取位置（南から）



S K 40 下層 土壤試料採取位置（南から）



S D 25 下層 土壤試料採取位置（南から）

写真図版30
(範囲確認調査)



調査坑1（南から）



調査坑2（南から）



調査坑4（南から）



調査坑19 土層（南から）



調査坑19（南東から）



砂による遺構面の保護（北西から）



砂による遺構の保護（北西から）



法面籠枠（南西から）



ポリエチレン製U字溝（南西から）



道路工事風景（2区、東から）



伊賀国名張郡薦生村全図（三重県蔵、明治21年作成、明治33年修正、右上が北）



伊賀国名張郡薦生村地籍図（薦生自治会蔵、明治期）※地割はトレース







79



93



122 暗文



82



83

84



122



98



108



122 底



100



114



125



103



116

117

118

119



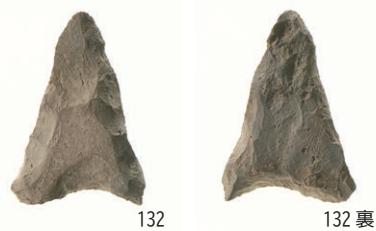
127



102



101





155



171



175



163



174



176



164



172



178



167



172 印銘



180



179



179 X線透過画像

写真図版38 (出土遺物⑥・表面採集遺物)



182



181



177



184



186 内



177



185



186



183



188



192



193



193 布目

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 425

薦生遺跡（第1・2次）発掘調査報告
～名張市薦生～

2025（令和7）年3月14日
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社アイブレーン

